である。○玉襷「畝火」の枕詞。（前出）○鳴く鳥の「玉襷」以下此の句まで三句は「音」に懸る序である。畝傍山は輕の地の西北方に近く聳えてゐる山であるから茲に歌つたのである。○音も聞えず「音」を流布本にオト（童蒙抄・考・略解・攷證・檜嬬手・美夫君志講義同訓）、古義にコヱ（新考・新釋・全釋同訓）と訓んでゐる。集中には鳥の啼聲をコヱと言つた例もオトと言つた例もある。然るにここは妻らしい聲も聞えずの意であるから、古義の訓のコヱが妥當である。○玉桙の「道」の枕詞。（前出）○一人だに似てし行かねば「似之不去者」を檜嬬手にニシガユカネバ、新解にニルガユカネバと訓んであるが、流布本以下諸註の訓のニテシユカネバに從ふべきある。「似てし」の「し」は強意の助詞。市を行き交ふ人々を見ても、一人として妻に似た樣子をして通る者は無いからと云ふ意。○すべを無み「無み」の「み」は、「人目を多み」の「み」と同じ接尾語で、形容詞の語幹に附いて副詞的修飾語を造る。致し方が無いのでの意。○袖ぞ振りつる　袖を振る事は前に講じた（一三二）を始め、集中に屢歌はれてゐるが、何れも人と別れる場合にする動作である。此の作では妻は既に亡き人であるが、作者は妻の生前に屢往來した輕の市に來て、人目も憚らず妻の名を喚び袖を振つて、哀別の情を表したのである。

畝傍山近景

【譯】輕の地は我がいとしい妻の里であるから、しみ〴〵と見たいと思ふけれども、輕へ行く道を始終通つたら人目に附くことが多いであらうし、繁々と行つたならば人もそれと知るであらうから、何れ後程逢はうと先を頼みに思つて、獨り思ひを心に祕めて戀ひ焦れてゐると、沖の藻のやうに自分に靡き添うて臥した妻は、大空を渡る日が山に沒して行くやうに、照り輝く月が雲間に隱れるやうに、亡くなつてしまつたと使が來て告げたので、其の知らせを聞いて、言ふべき言葉も爲すべき術も知らずして、唯話だけを聞いて其の儘ぢつとしては居られないので、我が戀ひ慕ふ感情の千分の一なりとも、慰む心地になれようかと思つて、我が妻が常に立ち出て見た輕の市に自分が立つて聞くと、妻らしい聲も聞くことも出來ず、道を往來する人々の中にも、一人として妻に似た姿の者は通らないので、最早如何とも仕樣が無いから、妻の名を喚び叫んで袖を振つたことである。

【評】此の長歌の冒頭から「戀ひつつあるに」までの十八句には、死んだ妻が世に在りし頃、世間を憚らねばならぬ事情があつて、物足りない思慕の情に苦しんでゐた事を敍べてゐる。是はそれ以下に歌つてゐる悲痛な感情を一層深からしめて居ると共に、やがて終に「吾妹子が止まず出で見し輕の市に」以下を歌ふ爲の前提となつてゐる。次に「渡る日の暮れ行くが如」以下は、其の妻が俄かに死去した事を知つた時の驚きから、遣る瀬ない悲歎に暮れるまでの、感情の推移を歌つてゐるのであつて、終の「梓弓聲に聞きて」以下は感情が高潮に達した部分である。此の部分では遂に居たたまらなくなつて、茫然と家を出て妻の里なる輕の市の雜閙の中に佇み、今は人目も憚らず涙に曇つた目で、妻に似た姿を探し求めてゐる哀れな自己を寫し出し、最後には妻の名を呼び別れの合圖の袖を振つてゐる。緩かな調子に始まつて、感情が高まると共に聲調が迫つて來て、最後に高潮に達した時に、激越な感情を投げ出すやうに歌つてゐるのは、人麻呂が抒情歌に於て常に執る手段である。更に修辭を見ると、枕詞

對句を頻繁に用ゐ、巧みな序や譬喩を挿入して、作者の技巧の才を遺憾なく發揮して居る。なほ結句の「妹が名喚びて袖ぞ振りつる」は、かの石見國から妻に別れて上京する時に詠んだ歌の、「妹が門見む靡け此の山」(一三一)や、「丈夫と思へる吾も敷妙の衣の袖は通りて沾れぬ」(一三五)などと共に、人麻呂の抒情歌中の名句であつて、彼の强烈な情熱が遺憾なく現れてゐる。

短歌二首

(二〇八) 秋山の　黄葉を茂み　迷ひぬる　妹を求めむ　山道知らずも
秋山之　黄葉乎茂　迷　流　妹乎將　求　山道不　知母

【釋】○黄葉を茂み　黄葉が餘り繁つてゐるので。○迷ひぬる　原文の「迷流」を流布本にマドヒヌル(童蒙抄・攷證・美夫君志・新釋・全釋同訓)、考にマドハセル(略解・古義・檜嬬手・講義同訓)、拾解にマヨヒヌルと訓んでゐる。「まよふ」は集中に「風の音の遠き我妹が著せし衣袂の行麻欲比來にけり」(三四五三)の如く用ゐてゐる動詞で、和名抄にも「紕(漢語抄云、萬與布、一云迴流)繒欲レ壞也」とある通り、今日謂ふ迷ふの意ではない。且類聚名義抄にも「迷」にマヨフの訓は無く、マドフと訓んでゐるから、拾解の訓は妥當でない。考の如くマドハセルと訓めば、迷つて居られるの意となるが、妻は既に亡き人であるから、完了の助動詞を添へてマドヒヌルと訓むのが穩かである。迷つてしまつたと云ふ意。○妹を求めむ　最後の「む」は連體形で「山道」に續いてゐる。妻を搜しに行かうと思ふ其の山道をの意。

【譯】秋の山の紅葉が餘り繁つてゐる爲に、出る道を迷つてしまつた妻を尋ねに行きたいが、其の山道が分らないのが誠に悲しい。

【評】代匠記精撰本に述べてゐるやうに、此の歌は妻が身まかつて山に葬られたのを、折しも全山紅葉に色彩られてゐた頃であつたから、妻は紅葉を賞でて山に入り、道を迷つて歸つて來ないもののやうに、美的に且譬喩的に歌つたのである。卷七の挽歌に「秋山の黄葉あはれとうらぶれて入りにし妹は待てど來まさず」(一四〇九)とあるのは、此の歌と同じ趣向の作である。

(二〇九) 黄葉の　散りゆくなべに　玉梓の　使を見れば　逢ひし日思ほゆ
黄葉之　落　去　奈倍爾　玉梓之　使乎見　者　相　日所　念

【釋】○散りゆくなべに　原文の「落去」を考にチリヌル(略解・檜嬬手・古義・新考・新解・新釋同訓)と訓んでゐるが、下に「なべに」とあるから、流布本の訓チリユクに從ふべきである。「なべに」はと共に・につれて・折しも等の意を表す副詞。(既出)○使を見れば　妻の死を知らせた使は、妻の生前に喜ばしい音信を齎らした使と同じ人である。○逢ひし日思ほゆ　「相日所念」を童蒙抄にミシヒシノバル、考にアヘルヒオモホユ(略解・檜嬬手同訓)と訓んでゐるが、流布本の訓のアヒシヒオモホユが妥當である。妻の生前に逢ひに行つた日の事が思ひ出されるの意。

【譯】紅葉した木の葉が頻りに散り行く折しも、妻の死を知らせに來た使を見ると、嘗て妻に逢つた樂しかりし日の事が思ひ出されて悲しい。

【評】長歌には「黄葉の」を單に枕詞として用ゐてゐるのに對して、此の反歌には敍景に用ゐてある。前の反歌も此の反歌も共に山の紅葉を敍して、晩秋の頃妻を喪つた寂しく悲しい氣持を冥想的に歌つてある。長歌の終に歌つ

てゐる昂奮的な感情に對して、是は餘程平靜に歸つた後の詠歎の聲であつて、長歌と相俟つて傷ましい哀愁の情がが現れてゐる。

二一〇　現身と　思ひし時に　たづさひて　吾が二人見し　走出の　堤に立てる　槻
打蟬等　念　之時爾　取　持　而　吾　二人見之　趍出之　堤爾立有　槻

の木の　こちごちの枝の　春の葉の　茂きが如く　思へりし　妹にはあれど
木之　己知碁智乃枝之　春　葉之　茂　之如久　念有　之　妹　者雖　有

憑めりし　兒らにはあれど　世の中を　背きし得ねば　かぎろひの　燃ゆる荒
憑有　之　兒等爾者雖　有　世　間乎　背　之不得者　蜻　火之　燎　流荒

野に　白妙の　天領巾隱り　鳥じもの　朝立ちいまして　入日なす　隱りにし
野爾　白妙之　天領巾隱　鳥自物　朝立　伊麻之弖　入日成　隱去之鹿

かば　吾妹子が　形見に置ける　綠兒の　乞ひ泣く毎に　取り與ふ　物し無け
齒　吾妹子之　形見爾置有　若兒乃　乞　泣　毎　取與　物之無

れば　男じもの　腋挾み持ち　吾妹子と　二人吾が寢し　枕づく　嬬屋の內に
者　鳥穗自物　腋挾　持　吾妹子與　二人吾　宿之　枕付　嬬屋之內爾

晝はも　うらさび暮らし　夜はも　息づき明かし　嘆けども　せむすべ知らに
晝羽裳　浦　不樂晚　之　夜者裳　氣衝　明　之　嘆　友　世武爲便不知爾

戀ふれども　逢ふよしを無み　大鳥の　羽易の山に　吾が戀ふる　妹はいます
戀　友　相　因　乎無見　大鳥　羽易乃山爾　吾　戀　流　妹者伊座

と　人の言へば　石根さくみて　なづみ來し　吉けくもぞなき　現身と　思ひ
等　人之云　者　石根左久見手　名積　來之　吉　雲　曾無寸　打蟬跡　念

し妹が　玉かぎる　ほのかにだにも　見えね思へば
之妹之　珠　蜻　髣髴　谷　裳　不　見思　者

【釋】○現身と思ひし時に　妻が此の世の人であつた頃にの意。前出(一九六)參照。○たづさひて　原文の「取持而」は流布本の訓にトリモチテとある。代匠記及び講義には此の訓を採用して、「取り持つ」の客語は下の槻の木の枝であると解釋してある。併し槻は高さ數十尺に達する喬木であるから、其の枝を執り持つと云ふ訓釋は穩當でない。童蒙抄には下の或本歌に此の句が「携手」とあるのを參考して、此處をタヅサヘテ(考・略解・檢囑手・古義・註疏・全釋同訓)と訓み、又攷證には「たづさへて」は自ら妻を携へ行く意になるから妥當でないとして、此處は「たづさはりて」の意であるから、それを約めてタヅサヒテ(美夫君志・新考同訓)と訓むべきであると言つて居る。思ふに「携ふ」の下二段に活用した確證は集中には見當らないから、タヅサヘテは穩當でない。今は姑く「携ふ」を四段活用と見て、攷證の訓に從つてタヅサヒテと訓んで置く。卷四の「吾妹子と携行而たぐひて居らむ」(七二八)の場合は、古くからタヅサヒユキテと訓む事に一致してゐる。妻と連れ立つての意。○吾が二人見し　「吾が」は吾吾がの意。此の句は下の「槻の木の云々」に懸るのである。○走出の　原文の「趍出之」を流布本にワシリイデノ、

考にハシリデノ（略解美夫君志・新考同訓）、攷證にワシリデノ（檜嬬手・古義・註疏同訓）と訓んである。これは日本書紀の歌謠に「隱國の泊瀬の山は出で立ちの宜しき山和斯里底能宜しき山」とあり、類聚名義抄にも「趨」をハシル・ウシルと二樣に訓んであるから、ここは攷證の訓に從つてワシリデノと訓むべきである。一體上古の國語に於ては、今日のハ行音のh音は無かつたのであつて、今のハ行音に相當する音は極めて古くは總てパ行（P）音であつた。是はハ行音を表すに用ゐた漢字の古音の研究や、朝鮮語及び琉球語と國語との比較研究の結果明かになつてゐる。而して奈良朝時代には、既に其のP音は一般にf音に變化してゐたやうであり、更に平安朝時代以後漸次其のf音の一部はw音に變り、一部はh音に變つて、今日のhana（花）kawa（川）の如き發音を生じたのである。要するに今日のハ行音は、p→f→h（又はw）の如き音韻變化を經て發生したのである。而して集中の「波奈」（花）「波流」（春）「比等」（人）などは、皆當時は fana, faru, fito の如く發音せられたのであらう。（『古代國語の研究』『國語史概說』參照）從つて本集卷五の「出で波之利」（八九九）の「波之利」（走り）の「波」は、fa と發音せられたのであらうが、此の場合は右の如き音韻變化の徑路によつて、wa と發音せられたのである。さて「走出の」は或本歌に「出立ちの」とあるのと同じ意で、一寸小走りして行き著く程の門邊近き所を云ふ。○堤に立てる　堤の上に植ゑ列べてあるの意。堤の上に樹木を植ゑたことは、營繕令に「凡堤內外並堤上、多種二榆柳雜樹一充二堤堰用一」とあるのに據つて明かである。○槻の木の　槻は楡科欅屬の落葉喬木で、欅に頗る類似してゐるが葉の鋸齒が深い。一名を「つきげやき」と云ふ。和名抄に「唐韻云、槻音規、岐乃岐都木名、堪レ作二弓者一也」とあり、記紀の歌謠に「槻弓」と歌はれてゐる通り、槻の材は上古に於ては丸木弓を造るに用ゐたのである。○こちごちの枝の　守部の『山彥冊子』に、「こちごち」は彼此の意ではなくして、物を二つ擧げた場合に、一方を指して「こち」と云ひ、又一方を指して「こち」と云ふのであると解いてゐる。尙講義の說に、當時は方向を示す第三人稱の遠稱に當る「あち」或は「そち」といふ語が發生してゐなかつたので、「こち」を二つ重ねてあちこちの意を表したのであると云ふ。此の句は彼方此方に差出てゐる樹の枝のといふ意である。なほ「こちごち」の用例には「日下部のこちの山と疊薦平郡の山の許知碁知能山の峽に」（雄略記）「なまよみの甲斐の國打ち寄する駿河の國と己知其智乃國のみ中ゆ出で立てる」（三一九）「許智期智乃花の盛に」（一七四九）などがある。○春の葉の茂きが如く　春は若葉が繁り榮えるから、若葉の繁りを、思ひの繁く濃かな事の譬喩に用ゐたのである。なほ此の譬喩は下の「思へりし云々」と「憑めりし云々」とに懸る。○思へりし妹にはあれど云々　「思へりし云々」は「憑めりし云々」と對句であつて、畢竟「思ひ憑めりし云々」の意である。「兒ら」の「兒」は「妹」と同じ意で、「ら」は音調を整へる爲の接尾語的な助詞である。○世の中を背きし得ねば　「背きし」の「し」は語調を强める助詞。生者必滅の世の中の道理に背くことは出來ないからといふ意。○かぎろひの　原文の「蜻火」は流布本の訓にカゲロフ（童蒙抄同訓）とあるが、考の訓にカギロヒとあるのが正しい。古事記の歌謠に「迦藝漏肥の燃ゆる家群妻が家のあたり」（履仲記）とあるやうに、古くはカギロヒと言ひ、平安朝以後にカゲロフと轉訛したのである。「かぎろひ」は此處では陽炎卽ち遊絲を云ふ。（四八）參照。長閑な春日に陽炎が野の面にちら〳〵と立ち昇る樣が、火の氣に似てゐるので「燃ゆる」と云つたのである。なほ「かぎろひの」は陽炎の燃ゆる春の意で單に「春」の枕詞ともなるが、ここは實景である。○白妙の　白布の總稱であつて、「領巾」の修飾語である。（既出）之を「領巾」の枕詞と見る攷證の說には從ひ難い。○天領巾隱り　「天

領巾隠」を流布本にアマヒレコモリ、管見にアマヒレガクレ（代匠記童蒙抄同訓）と訓んでゐるが、考にアマヒレガクリと訓んだのが妥當である。先づ「領巾」に就いて説明する。領巾は和名抄に「領巾 日本紀私記云比禮 婦人項上飾也」、天武天皇紀に「膳夫采女等之手繦肩巾（肩巾、此云比例）」と見えてゐるから、これは上古の婦人が今の肩掛の如く、肩に懸けて胸の所に垂らした布である。其の形や地質は皇太神宮儀式帳に「生絹御比禮八端（須麻長各五尺弘二幅）」延喜縫殿寮式の中宮春季御服の條に、「領巾四條料、紗三丈六尺（別九尺）云々」、又萬葉に「蜻蛉領巾」等と見えてゐるから、紗や羅などの薄い絹布で造つた細長い布で、色は「栲領巾乃白濱浪の」（二八二二）と歌はれてゐるやうに、純白であつたのである。領巾を歌つた作に「韓國の城の上に立たし大葉子は比禮振らす見ゆ難波へ向きて」（欽明紀）「遠つ人松浦佐用比賣夫戀ひに比例振りしより負へる山の名」（八七一）「濱菜採む海人處女ども纓せる領巾も照るがに」（三二四三）等があるから、上下貴賤を通じて婦人の裝飾に用ゐたのであつて、之をひら〳〵と振る事もあつたのである。蓋し「領巾」の名義は魚の「鰭」と同じく、ひら〳〵と振るものの意であらう。さて此處の「天領巾隠り」の意義に關しては從來諸説があつて未だ確定してゐない。次に代表的な數説を紹介しよう。（イ）代匠記には「秋風の吹き漂はす白雲は織女の天つ領巾かも」（二〇四一）とあるのに據つて、ここは白雲隠れの意であらうと云ひ、考は此の説に從つて、天雲隠れて遠きを云ふと解いてゐる。（ロ）略解所引の宣長の説には、柩の前後左右に立てて持つて行く葬送の旗を云ふとある。（ハ）檜嬬手には凡てひら〳〵するものを「ひれ」と云ふのであつて、ここは天蓋の類で、柩を覆ふ蓋であらうと述べてゐる。（ニ）古義には葬禮の際に柩の周圍に歩障を立て圍らして行く樣を、領巾に見做して歌つたのであらうとし、「天つ領巾」とは天人が天路を往來する領巾の意であるから、ここは葬を天に上る事と見做して斯く歌つたのであると解いてゐる。（ホ）攷證には、人は死んで後天に上るといふ事が集中に屢歌はれてゐるから、ここも身まかつた妻を天女に擬して歌つたのである。而して領巾は長さも幅も相當に大きいので、之を振り覆へば顔なども隠れるから「天領巾隠り」と歌つたのであると云つてゐる。（ヘ）講義には攷證の説を補つて、「天領巾」は天女が空を飛ぶ際に纏うてゐる天衣卽ち比禮衣であつて、普通の領巾ではないとし、而して天女の比禮衣は五彩あるべきであるが、ここは葬儀の事であるから白布を用ゐる故、「白妙の」と言つたのであると説かれてゐる。以上の諸説を見渡すに、「天領巾」を白雲の譬喩と見、或は旗・天蓋・歩障等の葬具と見る説は、何れも領巾とは異なる物を指してゐるから從ひ難い。思ふにこれは攷證の説の如く、身まかつた妻が天に昇る樣を想像して「天領巾隠り」と歌つたのであつて、「天領巾」は講義の説のやうに、天女の比禮衣の意であらうと思はれるが、實際に用ゐる領巾は純白の薄絹である爲に、「白妙の」と言つたのである。「隠り」は當時四段に活用した「隠る」の連用形。○鳥じもの　鳥の如くの意で「朝立つ」の枕詞である。鳥は朝早く塒を立つて飛び行くからである。「―じもの」に就いては（五〇）の「鴨じもの」の條參照。○朝立ちいまして　此の「いまして」は行くの敬語動詞である。妻の葬儀が朝立つた事を、妻を主格にして斯樣に歌つたのである。○入日なす　「隠る」の枕詞。「なす」は名詞或は動詞の終止形を承けて、何々の如くの意を添へる接尾語。（五〇）參照。○隠りにしかば　流布本を始め童蒙抄・考・略解等に、カクレニシカバと訓んでゐるが、攷證にカクリニシカバと改めたのが正しい。「隠る」の四段に活用した例證は（一七）に掲げた。此の世から去つてしまつたのでの意。○形見に置ける　流布本に「形見爾置」とあるが、金澤本・類聚古集・神田本等には此の下に「有」があるから、カタミニオケルと訓むべきである。○綠兒の

「若兒」を流布本を始め諸註にミドリゴと訓んでゐるが、代匠記にはワカコ、古義にはワカキコ（新解同訓）と訓んでゐる。集中に「綠兒の泣くをも置きて」（四八一）「彌騰里兒の乳乞ふが如く」（四一二二）等の例があり、又日本靈異記に「嬰」を、新撰字鏡に「阿孩兒」を、和名抄に「嬰兒」を、それぞれミドリゴと訓んでゐるから、此處の「若兒」も義訓によつてミドリゴと訓むべきである。「綠兒」は乳飲み兒を云ふ。○乞ひ泣く毎に　赤兒が乳などを求めて泣くのをいふ。○取り與ふ物し無ければ　「與ふ」は後世では下二段に活用するが、古くは四段に活用した。其の例證には古事記に「御所阿多波しつ」の如きがある。此の「あたは」は「與ふ」の未然形で、「し」は敬語の助動詞である。「物し」の「し」は強く指示する助詞。童蒙抄に「取りあたふもの」を抱きはぐくむ者と解き、考に「もの」を人と解したのは何れも誤である。子供を慰める爲に取つて與へるべき物も無いからの意である。○男じもの　原文に「鳥穗自物」とある。之を流布本にトリホシモと訓み、童蒙抄にトボシモノと訓んで、乏しものの意と解いて居るが、意味がよく通じない。これは考に「鳥」は「烏」、「穗」は「德」の誤と見て、ヲトコジモノと訓んだのに從ふべきである。此の句は或本歌にも「男自物」とある。「男じもの」の用例には「面形の忘るとならばあぢきなく男士物や戀ひつつ居らむ」（二五八〇）の如きがある。此の「じもの」は前に解いた「鴨じもの」「鹿じもの」などのそれと同じであつて、此の場合は男たるものがの意である。○腋挾み持ち　腋の下にかき抱いて。古語拾遺に「天照大神育二吾勝尊一、特甚鍾愛常懷二腋下一、稱曰二腋子一。」とあるのを參考すべきである。○枕づく　「嬬屋」の枕詞。冠辭考の說に夫婦は閨に枕を附け並べて寢るから懸けたのであると云ふ。○嬬屋の内に　「嬬屋」は「嬬隱る屋上の山の」（一三五）とあるのによつても知られる通り、妻の部屋即ち夫婦の寢室である。攷證に「嬬」は借字で「つま屋」の「つま」は、「衣のつま」「つま木」「爪」などの「つま」で端の意であるから、家の端の方にある屋をいふと解いたのは穩かでない。○畫はも　既出（一五五）參照。○うらさび暮らし　原文の「浦不樂」を流布本にウラフレと訓んでゐるが、代匠記初稿本にはウラサビ（童蒙抄・考同訓）と訓み、小琴にはウラブレを可としてゐる。　卷三に「梶棹毛無而不樂毛」（二五七）とあつて、或本歌に此の二句を「竿梶母無而佐夫之毛」（二六〇）としてゐるから、「不樂」はサブシと訓むべき事が知られる。又「今よりは城の山道は不樂牟」（五七六）の「不樂牟」もサブシケムと訓むべき例である。從つて此の場合はウラサビと訓むのが妥當である。「うらさび暮らし」は、心淋しく樂しまずして日を暮らすこと。既出（一五九）參照。○息づき明かし　溜息をつきながら夜を明かしの意。因みに「息づく」を形容詞に轉成した「息づかし」は歎かはしの意である。「あな伊伎豆加思見ず久にして」（三五四七）の用例がある。○大鳥の「羽」の枕詞。冠辭考に「大鳥」は鶴・鷲などで、鷲は羽を易へるのを待つて矢に使ふから「羽易」に懸けたのであると解いてゐるが、これは只鳥の羽の意で「羽易」の「羽」に續けたのである。○羽易の山に　此の山の所在は詳かでない。『大和志』には「春日山、在二南都東一、一名蓋山有二三峯一、曰本宮峯又名浮雲、曰水屋峯又名羽買、曰高峯又名香山、三峯層疊松杉蔭翳、青蒼碧翠能耐二秋冬一。」とあつて、春日山の一峯であると記してゐる。なほ稱名院右府三條西公條の『吉野詣記』にも、「これより高圓のかたはら羽買の山の下に、客養寺とて志深き人住みけり」とあるから、高圓山の近くである事が知られる。集中には他に「春日なる羽買之山ゆ佐保の内へ鳴き行くなるは誰喚子鳥」（一八二七）と歌はれてゐる。一說に『大和名所圖會』には「三笠山・高圓山・若草山の三つをいふとぞ」とある。○石根さくみて　原文に「左久見乎」とあるが、「乎」は類聚古集に「手」とあるから、代匠記の說に從つて「左久見手」の誤

と見る。「石根」は前に出た「石が根」（四五）と同じく單に岩のこと。「さくむ」の意義は必ずしも明確にされてゐない。先づ用例を見ると、「山河を磐根左久美て履み通り」（四四六五　「五百重山い行き割見」（九七一）「磐根木根履み佐久彌て」（祝詞新年祭）等がある。又「さくむ」と同義の語と思はれる「さぐくむ」の用例には、「浪の上をい行き左具久美」（五〇九）「波の間をい行き佐具久美」（四三三一）等がある。「さくむ」「さぐくむ」と同系統の語に「さくる」がある。「さくる」は刳り穿つ意、又は吃逆をする意であつて、「しやくる」とも云ふ。又「さくむ」の轉訛と思はれる「しやくむ」は中が窪む意で、「しやくみ面」などと用ゐる。此等を併せ考へると、「さくむ」「さくる」の系統の語は、皆圓滑平穩を缺く動作を表してゐる。從つて「さくむ」「さぐくむ」は共に凹凸のある道を難澁しながら蹈み行く意であらうと思ふ。○なづみ來し　「なづむ」の用例には「淺小竹原腰那豆牟」（古事記）「雪消する山道すらを名積ぞ吾が來し」（三八二）「夏野の草を榮積來るかも」（三二九六）等がある。「なづむ」と同根の語に、「なづさふ」「なづさはる」「なづく」「なつかし」等がある。此等の語には何れも拘泥する、又は滯る意味がある。「なづむ」は右の用例によつて知られる通り、行き惱み停滯する意である。「來し」の「し」は連體形であるが、文は此處で終止してゐる。連體形で結んだのは、下に感動の意を籠めたのである。○吉けくもぞなき　「吉けく」はよきことの意。「も」は感動の助詞であり、「ぞ」は意味を強める係助詞である。來た甲斐もないことであるの意。此の句は最後の「見えぬ思へば」の後に置いて解くべき句である。○玉かぎる　「ほのか」の枕詞。原文の「珠蜻」を流布本にカゲロフノ（童蒙抄同訓）、考にカギロヒノと訓んでゐるが、前の長歌の「玉蜻」と同樣タマカギルと訓むのが正しい。〔四五〕參照。○見えぬ思へば　見えねばの意。「思ふ」といふ動詞は輕く添へたのである。

【譯】妻が此の世に居た頃に、自分と二人で互に手を携へて眺めた、門邊から程近くの堤の上に生ひ立つてゐる楸の木の、彼方此方に差出てゐる枝の、春の若葉が繁つてゐるやうに、繁く濃かに思つてゐた妻ではあるが、深く頼みにしてゐた妻ではあるが、死といふ世の中の習はしには背くことが出來ないので、遂に陽炎の燃えてゐる荒野原に、眞白い比禮衣を覆ひ纏うて、朝に家を出立つて、此の世から姿を隱してしまつたので、妻が形見として遺して行つた乳飲み兒が、物を欲しがつて泣く度毎に、取つて與へる物とては何も無いので、男ながらも自分が腋の下にかき抱いて、我が妻と二人で寢た閨の中で、晝は終日心を痛めながら淋しく暮らし、夜は歎息を放ちながら歎き明かしてゐるけれども、如何ともすべき方法も判らず、戀ひ慕つても妻に逢ふ術も無いので、羽易山に自分の戀ひ慕つてゐる妻はゐると人が言ふから、岩の多い山道を蹈み分けて、行き惱みながらやうやく辿つて來たことである。然しながら此の世にゐた妻の姿は、仄かにさへも見えないから、折角尋ねて來た甲斐も無く悲しいことである。

【評】冒頭から「春の葉の」までは、序に相當する部分であつて、作者の家の門邊の光景が敍景的に描き出されてゐる。「かぎろひの」以下「隱りにしかば」までは、妻の葬儀の事を敍したのであるが、直接に葬儀の模樣を寫さずして「天領巾隱り」と言つた所に、上代人の死に對する觀念が頗る美的に表現せられてゐる。而して「吾妹子が形見に置ける」以下は、只獨り幼兒を擁して涙に暮れてゐる樣を歌つたもので、亡き妻に對する愁歎追慕の情、遺兒に對する愛情、孤獨のわびしさ等の悲劇的情景が、頗る簡潔に力强く寫し出されてゐる。「大鳥の羽易の山に」以下最後までは、妻を葬つた山を訪れた事を歌つたのであつて、前の長歌に輕の市に出立つて妻を探す事を歌つた部

分と同じく、亡妻を追慕する熱情が溢れてゐて、人を感動させる所である。概して前の挽歌に比して、此の歌には内容に變化があり、表現が簡潔であり、而も愁歎煩悶の情が切實に歌はれてゐる。要するに今講じた長歌二首は、前に講じた石見國より妻に別れて上り來る時の長歌二首と合せて、人麻呂が妻に熱情を濺いだ四大雄篇である。

短歌二首

二一　去年見てし　秋の月夜は　照らせれど　相見し妹は　いや年さかる
去年見而之　秋乃月夜者　雖照　相見之妹者　彌年放

【釋】○去年見てし　「去年」をコゾと言つた事は、「許序の秋相見しままに」(四一一七)の例があるので明かである。「こぞ」は「きぞ」「きす」などと關係のある語であつて、昨年或は昨夜の意に用ゐる。「見てし」の「てし」は過去完了を表す助動詞。○秋の月夜は　「月夜」は流布本の訓にツキヨとあるが、假名書の例に「都久欲」とあるから、略解にツクヨと訓んだのが正しい。「月夜」は集中には唯月の意に用ゐた場合が多い。○照らせれど　原文の「雖照」を流布本にテラセドモ(新考講義同訓)、考にテラセレドと訓んでゐる。略解以下諸註は考の訓に從つてゐる。何れでも差支ないが今は後者に從ふ。○相見し妹は　「相見し」は互に逢つた意ではなくして、二人で月を眺めた其の妻はの意である。同樣の例に「鞆の浦の磯の室の木見む毎に相見し妹は忘らえめやも」(四四七)がある。○いや年さかる　「いや」はいよ〳〵ます〳〵の意の副詞で、「さかる」に懸る。「年さかる」は年月を隔てて行く意。

【譯】去年の秋共に眺めた月は、今年も相變らず照らしてゐるけれども、共々に月を眺めた妻は、だん〳〵と年月を隔てて行くことである。

【評】代匠記初稿本に、此の歌に據れば、此の反歌二首は一周忌に詠んだのを類聚して一所に收めたのであらうと云ひ、又古義にも此の長歌短歌は妻の一周忌の時の作であると述べてゐるが、此等の說は穩當でない。長歌の方は內容から見て、妻が陽炎の立つ頃に死んだのを、其の後間もなく詠んだものであり、此の反歌は妻の死んだ年の秋に月を見て、在りし日に妻と共に同じ秋の月を眺めたのを想ひ起して詠んだのである。拾遺集卷二十には此の歌に、「妻にまかりおくれて又の年の秋月を見侍りて」と詞書を添へて收めてある。

二二　衾道を　引手の山に　妹を置きて　山路を行けば　生けりともなし
衾道乎　引手乃山爾　妹乎置　而　山徑往者　生　跡毛無

【釋】○衾道を　「衾道を」を「引く」の枕詞とする說と、「衾道」を地名と見る說とがある。代匠記には「衾」は地名で其處に通ずる道を「衾道」と云ふのであつて、延喜諸陵式に「衾田墓、手白香皇女、在大和國山邊郡、兆域東西二町、南北二町云々」とある其の「衾田」へ通ふ道であると說べてゐる。又枕詞と見る冠辭考の說に據れば、「ち」(「道」は借字)は幕などの手を「ち」といふのと同じで、夜具卽ち衾には紐を著けて、それを執つて引き擴げて覆ふから、其の紐を引く手の意で、「引手」に冠したのであらうと云つてゐる。思ふに右の地名說に於ては、「衾田」を單に「衾」とも言つたものと見てゐるのが穩かでなく、又「衾道を」の「を」の意が明瞭にされてゐない。衾田墓は今山邊郡朝和村大字中山に在るから、若し「引手山」を前の羽易山卽ち高圓山附近の山とすれば、衾田墓は羽易山より三里餘も南に當るから、地理上から見ても此の說は妥當でない。さすれば「衾道を」は枕詞とすべきであつて、語義は攷

證や古義に述べてゐるやうに、衾の乳(乳は幕や幟の乳に同じ)を執つて引き寄せる意で、「引手」の「引く」に冠したものと解すべきであらう。○引手の山に　引手山の所在は未詳。『大和名所圖會』に「引手山中村の東にあり。龍王と呼ぶ。山高く聳え眺望あり。衾道此ほとりなり。」と記してゐる。此の龍王山は今の山邊郡朝和村大字藤井附近(柳本町の東方約三十町)の山である。なほ『大日本地名辭書』にも「按するに引手山卽釜口山の一峯ならん、南は纒向弓月岳に連る」とある。歌の上では此の山に妻を葬つたものと思はれる。さすれば長歌に見える羽易山と同一の山か、或は近接の山でなければならぬ。「羽易山」「引手山」共に猶研究を要する。○生けりともなし　原文の「生跡毛無」に就いては從來三種の訓が現れてゐる。卽ちイケリトモナシ(流布本)、イケルトモナシ(代匠記)、イクルトモナシ(講義)の三訓である。先づイケリトモと訓むか、イケルトモと訓むべきかは、「と」を助詞と見るか又は名詞と見るかによつて、說が岐れるのである。代匠記精撰本には卷十九の「伊家流等毛奈之」(四一七〇)を證として、イケルトモナシと訓むべきであらうと云ひ、宣長は小琴及び『玉勝間』卷十三に於て、代匠記の說を敷衍して次のやうに述べてゐる。此の「生跡毛無」は集中の「生刀毛無」「生戸裳名寸」「生跡文奈思」「生跡文無」等と共に、總て假名書の「伊家流等毛奈之」に倣つてイケルトモナシと訓むべきであつて、其の「と」は助詞ではなく、「燒太刀の利心」(四四七九)「心神もなし」(三九七二)等の「と」と同じ名詞で、「生けるともなし」は「心のはたらきもなく、はれて生る如くにもなき」意であると解いてゐる。(檜嬬手古義・同說)此の說に對して攷證には、流布本を始め童蒙抄・考・略解等の訓に從つて猶イケリトモと訓んで、「と」は助詞と見るべきであると敍べ、又美夫君志別記には卷十九の「伊家流等毛奈之」の「流」は、ルではなくリの假名に用ゐたのであると論じ、ここもイケリと訓むべきであるとしてゐる。又講義には體言の「と」は通例時所の意であるから、此の歌の場合も點の意であらうとし、又用字法の上から見て「生」一字をイケリ・イケル等訓むのは穩當でなく、斯かる動作存在詞の場合は通例下に「有」或は「流」があるべきであると云つて、從來の訓を斥けイクルトモナシと訓むべきかと述べて居られる。思ふに「生跡毛無」は「と」の上代特殊假名遣の上から見て、イケリトモナシと訓んで「とも」を助詞として解くのが正しいのである。集中に「とも」といふ助詞の「と」を表す假名としては、「等」「登」「得」「跡」「杼」「騰」などが用ゐられてゐるが、此等は皆トの乙類に屬する假名である。然るに「燒太刀の刀其己呂」(四四七九)「利心の失するまで思ふ」(二四〇〇)「君に戀ふるに許己呂度もなし」(三九七二)「吾が情利の生けりともなき」(二五二五)等の、「と心」「心ど」のトを表す假名の「刀」「度」は、何れも甲類のトの假名であり、「利」も「刀禰河泊」(利根川)の例によつて、甲類の假名である事が知られる。よつて助詞の「とも」のトと、名詞「利心」「心神」のトとは、上代に於ては假名遣の上で區別されてゐた事が明白である。此の歌の「生跡毛無」と同じ句の用例は、他に「生友奈重二」(九四六)「生戸裳名寸」(二五二五)「生友名師」(二九八〇)「生跡文奈思」(三〇六〇)「生跡毛奈思」(三一〇七)等がある。此等の句の「とも」のトを表す假名の「友」「戸」「跡」は、皆乙類に屬してゐるから、「とも」は助詞であつて、一句はイケリトモナシと訓むべきである。尤も「生刀毛無」(二一五・二二七)の「刀」のみは甲類で例外である。さて「生けりともなし」は、生きてはゐても生きてゐるやうに思はれないといふ意である。

【譯】引手山に最愛の妻を葬つて山路を辿つて行くと、自分はまるで生きてゐるやうな心地もしないことである。

【評】此の反歌の詠まれた時期に就いて從來兩樣の見解が現れてゐる。卽ち一は妻を山に葬つて歸る時の作と見る

説であり、一は墓參の時の作と見る説である。全釋には此の反歌は長歌の最後に歌つてゐるのと同じ意味で、墓所を尋ねた時の作と見てある。要するに歌の上では孰れとも決し難いが、今は葬送の時の作として解いて置く。

吉備津采女死時、柿本朝臣人麻呂作歌一首幷短歌

二一七　秋山の　したべる妹　なよ竹の　とをよる子らは　いかさまに　思ひ居れか
秋山　下部留妹　奈用竹乃　臈遠依　子等者　何方爾　念居可

栲縄の　長き命を　露こそは　朝に置きて　夕は　消ゆと言へ　霧こそは　夕
栲縄之　長命乎　露已曾婆　朝爾置　而　夕者　消等言　霧已曾婆　夕

に立ちて　朝は　失すと言へ　梓弓　音聞く吾も　おほに見し　事悔しきを
立而　明者　失等言　梓弓　音聞　吾母　髣髴見之　事悔敷　乎

敷妙の　手枕まきて　劍太刀　身に副へ寐けむ　若草の　その夫の子は　さぶ
布栲乃　手枕纏　而　劍刀　身二副　寐價牟　若草　其　嬬　子者　不怜

しみか　思ひて寐らむ　悔しみか　思ひ戀ふらむ　時ならず　過ぎにし子らが
彌可　念　而寐良武　悔　彌可　念　戀　良武　時不　在　過　去　子等我

朝露のごと　夕露のごと
朝露乃如也　夕霧乃如也

【釋】○吉備津采女　キビノツノウネメと訓む。「吉備津」に就いて代匠記には、「吉備」を氏「津」を名とし、童蒙抄には「吉備」「津」を共に地名とし、考には「吉備津」を采女の氏であるとしてゐる。然るに小琴には采女は凡て其の出身地の名を以て呼ぶのが例であつて、而も此の歌の反歌に「志我津子」とも「凡津子」とも歌つてあるから、此の采女は近江の志我の津から出仕した采女であつて、此處の「吉備」は「志我」の誤であらうと言つてゐる。（略解・攷證・檜嬬手・古義・美夫君志同説）一體采女が其の出身の國名或は郡名、又は國名及び郡名を以て呼ばれた事は、古事記に「伊勢國之三重婇」、日本書紀に「吉備上道采女大海」「伊賀采女宅子」、又集中に「因幡八上采女」「駿河采女」などとあるので明かである。因つて講義には「吉備津」の「吉備」は國名、「津」は郡名であらうとして、「津」は「都宇郡」（元「津」一字の郡名であつたのを、和銅の頃勅命により二字としたもの。今の都窪郡に屬してゐる。）であると敍べて居られる。講義の説に從ふべきである。

○秋山の　考以下諸註に之を「したべる」の枕詞と見てゐるが、これは古事記に「秋山之下氷壯夫（アキヤマノシタビトコ）」とあるのと同じで、講義の説の通り「したべる」の主格である。○したべる妹　原文の「下部留妹」を流布本にシタヘルイモ（代匠記考・古義同訓）と訓んでゐるが、古事記傳にシタブルイモと訓み、略解の一訓に之を採用して以來、攷證・檜嬬手・註疏・美夫君志・新考・新釋・講義等は何れも記傳の訓に從つてゐる。此の訓を決定する爲には、先づ其の動詞の活用形を決定しなければならない。是と同じ語の用例は古事記に、前掲の通り「秋山の下氷壯夫（シタビトコ）」があり、集中に「秋山の舌日（シタビ）が下に鳴く鳥の」（二二三九）がある。此等の「下氷」「舌日」は何れも其の動詞の連用形から轉成した名詞である。因つて此の動詞はハ行（若しくはバ行）の四段活用か、上二段活用（上代にはハ行上一段活用の動詞は存在しない）でなければならぬ。新考に之を下二段活用としたのは誤である。記傳を始め美夫君志・新釋・全釋・講義

等には之を上二段活用の動詞と見て、「下部留」をシタブルと訓んである。一體上代の特殊假名遣の上から見ると、ハ行上二段活用動詞の連用形の語尾に用ゐる假名はヒの乙類の假名であり、四段活用動詞の連用形の語尾に用ゐる假名は、ヒの甲類の假名に屬してゐる。(『國語と國文學』第八十九號所載橋本進吉博士論文參照)然るに「下氷」「舌日」の「氷」「日」は共にヒの甲類に屬する假名であるから、此の動詞は「したば」「したび」「したぶ」「したべ」と四段に活用したものと認むべきである。因つて「下部留」をシタブルと訓む說は妥當でない。「部」はフとも訓むが、ここはへと訓むべきである。而して最後の「留」は活用語尾ではなくして、動作の存續を表す完了の助動詞の「り」の連體形である。上代に於ては四段活用動詞に此の「り」が接續する場合には、命令形(卽ち活用語尾は甲類の假名である)に附くのが通則である。然るに此の「部」は特殊假名遣の上ではへの甲類の假名であるから、此の點から見てもシタベルと訓むのが妥當である。斯くて「したぶ」は四段活用の動詞であり、此の歌の「下部留妹」はシタベルイモと訓む流布本の訓が正しいのである。さて「したぶ」の語義及び語原に關しては、考に「したべる」は萎べるの意で、秋の木の葉は萎び枯れる頃に紅葉するから、萎べるは紅葉するのを云ふと解き、又古事記傳には「したび」は「朝び」の意で、秋山の紅葉の匂へる樣が、朝の東天の色づくが如くであるから、「朝」に「び」といふ活用語尾を添へたのであると解き、攷證美夫君志等は之に從つてゐる。考の說は同韻相通の原理を濫用したものであり、記傳の說も穩當を缺いてゐて從ひ難い。思ふに此の語は凡て秋の山に關して用ゐられてゐる點から見て、秋山の樹木の色に就いて言ふ語と思はれる。而も此の歌の場合はそれを采女の容姿の譬喩に用ゐてある。從つて「したぶ」は樹木が紅葉して照り映える意であつて、此の二句は秋の山が紅葉して匂ふ如く色艶の美しい處女の意であらう。○なよ竹の　流布本にナユタケノと訓んでゐるが、代匠記以下諸註にはナヨタケノと訓んでゐる。集中に「名湯竹乃とをよる皇子」(四二〇)とあるのと同じである。「なよ竹」はなよ〳〵としたしなやかな竹の意で、俗に「めだけ」(女竹)又は「しのめだけ」と云ふものである。「なよ竹」の「なよ」は「なゆ」(萎)「しなゆ」(撓)「しなやか」「なよぶ」「なやむ」(惱)等の語根である。從來此の句を次の「とをよる」の枕詞と見たのであるが、講義の說の通り「なよ竹のとをよる」は采女の容姿の譬喩であつて、「なよ竹の」は「とをよる」の主格と見るのがよい。○とをよる子らは　「とをよる」の「とを」は、「たわむ」(撓)「とをむ」「たわわ」「とをを」等の「たわ」「とを」と同じく撓む意で、「よる」は寄り靡く意である。「子ら」の「ら」は接尾語。○いかさまに思ひ居れか　原文の「念居可」にはオモヒヲリテカ(流布本の訓、代匠記・童蒙抄・考同訓)、オモヒテヲレカ(攷證・美夫君志)、オモヒヲレカ(略解・檜嬬手・註疏)、オモヒマセカ(古義・新考)等の訓がある。今は略解の訓に從つて置く。此の二句はどのやうに思つて居るのであらうかといふ意。「か」は疑問の係助詞であつて、此の句は下の「栁縄の長き命を云々時ならず過ぎにし」に懸るのである。○栁縄の　「長き」の枕詞。「栁縄之」を考及び略解にはタクヅヌノと訓んでゐるが、「たくづぬの」は「多久豆怒能白き腕」(神代記)の如く、「白」(轉じて「新羅」)の枕詞として用ゐられて居り、「長き」又は「千尋」に懸けた場合には何れも「栁縄」と記してあるから、ここはタクナハノと訓むべきである。栁綱・栁縄何れも同じ物で、楮又は穀の樹皮の纖維を採つて綯つた白い縄を云ふ。(一九九)の「木綿花」參照。栁縄の長きが如くの意を以て枕詞としたのである。○長き命を　景樹は此の下に一二句脫句があると云つてゐるが、此の說には從ひ難い。文脈は此の句を以て一時中止し、以下二十數句の挿入句を經て「時ならず過ぎにし云々」に續くのである。長い人

生であるのにといふ意。○露こそは　此の句以下八句は露と霧とを以てした四句對句である。○夕は　原文の「夕者」(下の「明者」も同様)を流布本にユフベニハ(童蒙抄・考・略解・攷證・檜嬬手・美夫君志・講義同訓)と五音に訓み、古義にユフベハ(註疏・新考・全釋・新釋同訓)と四音に訓んでゐる。思ふに大麻呂の長歌には、完全な五七調に統一せられてゐない部分が屢あつて、例へば(二一三)の「日者(ひんへ)うらさび暮らし夜者(ほんへ)息づき明かし」の如く三音句も用ゐられてゐるから、ここも必ずしも五音に訓む必要はない。○消ゆと言へ　「消等言」を流布本にキエヌトイヘ(童蒙抄・攷證・美夫君志同訓)、考にケヌルトイヘ、古義にケヌトイヘと訓んでゐるが、略解にキユトイヘ(檜嬬手・註疏・新考等同訓)と訓んだのがよい。「言へ」は上の係助詞の「こそ」に對する結である。「消ゆと言へ」は「消ゆれ」の意味であつて、「言ふ」は輕く添へた語である。○失すと言へ　流布本の訓にウセヌトイヘとあるが、略解の訓にウストイヘとあるのに從ふ。以上の八句は、露や霧ならば時の間に消え失せるが、人の生命はさやうに短いものではないのに、采女が露霧のやうにはかなく身まかつたのでといふ意である。○梓弓　「音」の枕詞。(既出)○音聞く吾も　「音」は采女が亡くなつた噂を云ふ。○おほに見し　原文の「髣髴見之」を流布本にホノニミシ(代匠記・童蒙抄同訓)と訓み、考には反歌に「於保(オホ)爾見しかば」(二一九)とあるのに據つてオホニミシ(攷證・檜嬬手・古義・美夫君志等同訓)と訓み、略解にはホノミシ(註疏・新訓同訓)と訓んでゐる。假名書の例に「吾が王(おほきみ)天知らさむと思はねば於保(オホ)爾ぞ見ける」(四七六)「佐保山を於凡(オホ)爾見しかど」(一三三三)等があるから、ここもオホニミシと訓むべきである。「おほに」の「おほ」は(一八九)に解いた「おぼほし」(「おぼおぼし」の約)の「おぼ」と同じで、「おぼろ」「おぼめく」「おぼつかなし」「おほろか」等の語根である。「おほに」は原文の「髣髴」の字義の通り、疎かに或はぼんやりとの意。○事悔しきを　此の「を」は感動助詞で、形容詞に附く場合には連體形を承ける。采女の生前にはしみじみと見る事もなくして、ぼんやりと見過してゐたのが悔しいのにといふ意。○敷妙の　「枕」の枕詞。(既出)○手枕まきて　采女の腕を枕にしての意。「まく」は枕にするといふ意の古い動詞である。(八六)參照。○劍太刀　こは「身にそふ」の枕詞である。冠辭考に劍は人の身に副へて佩くものであるから、夫婦寄り添ふ意の譬喩的枕詞にしたのであると言つてゐる通りである。一說に刀劍の最も重要な部分は身であるから、「身」に冠したのであると云ふ。(なほ此の句は「名」其の他の枕詞にも用ゐられる。)○若草の　「夫(つま)」の枕詞。既出(一五三)參照。○その夫の子は　「その」は采女ではなく、其の夫を指してゐる。「夫の子」の「子」は、「我妹子」「我が背子」などの「子」と同じく親しみを表す接尾語。○さぶしみか思ひて寐らむ　「不怜」を流布本にサビシと訓んであるが、考にサブシと改訓したのに從ふべきである。「左夫思」「佐夫斯」「佐夫之」などサブシといふ假名書の例は數多あるが、サビシの方は(三七三四)の一云に「左必之佐」といふ一例があるだけであるから、古くはサブシと言つた事が知られる。「さぶしみ」は「さぶし」の語幹に副詞的修飾語を造る接尾語の「み」を添へた形であつて、「思ふ」に懸つてゐる。「か」は疑問の係助詞で、結は下の「寐らむ」である。淋しく思つて寢ることであらうかの意。○悔しみか思ひ戀ふらむ　流布本には此の二句は無いが、類聚古集・神田本・西本願寺本・細井本等の古寫本に「悔彌可念戀良武」の七字があるのに據つて、これを補つたのである。前の二句と對句を成してゐて、語形は全く同一である。○時ならず　此の句は流布本の訓にトキナラヌ、西本願寺本・細井本・大矢本等の訓にトキナラズ(代匠記以下諸註同訓)、考の訓にトキナラデとある。「すて」と同じ意の「で」は平安朝時代に發生したのであるから、考の訓には從ひ難い。死

ぬべき時にあらずしての意であつて、采女が夭折したことを云ふ。代匠記の説に、上の「いかさまに思ひ居れか」や此處の「時ならず過ぎにし」及び下の反歌の趣などを併せ考へると、此の采女は川に身を投げたのであらうと云ふ。これは參考の爲に掲げて置く。○過ぎにし子らが　古義には「子等我」の「我」を「香」などの誤であらうとして、スギニシコラカと訓み「か」を「かな」の意の感動助詞と見てゐる。（新考同説）併し今は原文を尊重してコラガと訓み、「が」を主格を表す助詞と見て置く。○朝露のごと夕霧のごと　此の二句の「如也」を流布本にゴトヤと訓んであるが、小琴には「也」は漢文の「焉」などの如く、單に添へた文字であると言つて、「如也」をゴトと訓み（略解・古義・新考・講義等同訓）、又攷證には（美夫君志同説）小琴の説に反對してゴトヤと訓み、「や」を感歎の助詞と見てゐる。集中には此の外、「細谷川の音乃清也」（一一〇二）「思ひは過ぎず戀許增益也」（二三六九）「君乎社待也」（二三四九）等の例があるから、ここも小琴の説に從つてゴトと訓むべきである。「ごと」は既述の通り如しの意。此の二句は前の「露こそは云々」「霧こそは云々」を承けて、再び露と霧の對句を以て結んだのである。

【譯】秋の山の紅葉のやうに、紅顏美しく匂つてゐた少女であり、なよ竹が撓み靡くやうに、しなやかな容姿をした采女は、一體何と考へたからであらうか、長かるべき命であるのに、――露ならば朝に置いて、夕にははかなく消えもしよう、霧ならば夕に立つて、朝には消え失せもするけれども、（人の命はそんなにはかないものではないのに）――あの美しい女が亡くなつたといふ噂を聞いた自分までも、采女をしみじみと見た事がないのが殘念で堪らないのに、況して手枕を交して身に添へて寢たであらう其の夫なる人は、さぞ淋しく思つて寢ることであらう、悔しく思つて戀ひ慕つてゐることであらう。まだ死ぬる時でもないのに、思ひもかけず逝つてしまつたあの女は、朝露のやうに夕霧のやうに、はかなく哀れなことである。

【評】佳人の譽れ高き吉備津采女の夭折を傳へ聞いた人麻呂が、其の死を哀悼した歌である。前に講じた（二〇七）及び（二一〇）の挽歌に見るやうな、泣血哀慟といつた情緒は歌はれてゐないが、美人の薄命を惜しむ心持と、其の采女の夫に寄する同情は、遺憾なく現れてゐる。對句や枕詞などによる技巧も見遁し難く、又表現の樣式や內容の上にも曲折變化があつて、彼の非凡なる才藻は此の作にも窺ひ知ることが出來る。なほ中間に朝の露夕の露をはかなきものの例に引き、最後に之を承けて「朝露の如、夕霧の如」と結んだのは、前後照應の妙を得て巧みである。

## 短歌二首

二一八　樂浪の　志我津の子らが　罷道の　川瀨の道を　見ればさぶしも
樂浪之　志我津　子等何　罷道之　川瀨　道　見　者不　怜毛

【釋】○樂浪の　「樂浪」は近江國滋賀郡を中心とする湖西一帶の地の古名である。既出（二九）參照。○志我津の子らが　「志我津」は滋賀郡の津卽ち大津を云ふ。次の短歌に「凡津」とあるのと同一地である。「志我津の子ら」は采女を指す。代匠記に采女の名の「津の子」を導く爲に、「樂浪の志我」を冠したのであらうと云ひ、童蒙抄に此の采女は近江の志我津に居て朝勤したのであらうと云つてゐるが、其の他の諸註には題詞の「吉備津」を「志我津」の誤と見て、志我津を采女の出身地としてゐる。なほ講義には代匠記・童蒙抄等の説を否定して、此の女は長歌に據れば、現任の采女ではなくして既に夫があつたのであつて、其の夫の家が滋賀津に在つたのであらうと述べて居ら

れる。○罷道の　此の句を流布本にユクミチノと訓み、小琴には原文の「道」を「邇」の誤と見て、マカリニシ（檜嬬手古義・新考同説）と訓んでゐる。併し古葉略類聚鈔等の旁訓を始め、童蒙抄以下諸註にマカリヂノと訓んでゐるのが妥當である。「まかりぢ」の用例は、續日本紀所收の藤原永手薨去の際の宣命に「美麻之大臣乃罷道母宇之呂輕久、心母意太比留念而、平久幸久罷止富良須倍之止詔大命乎宣」とある。「罷道」の「罷る」は「身まかる」の意で死ぬることをいふ。右の宣命にある「罷道」は黄泉に赴く道の意であるが、此の歌のは次の「川瀬の道」を指すのであつて、葬送の途次を云ふ。○川瀬の道を　新考の説の通り、川の瀬を渡つて行く道。○見ればさぶしも　「さぶし」は心の樂しますして、慰めやうもない狀態を云ふ。「も」は感動助詞。

【譯】樂浪の志賀の津の采女が葬られて行つた、川瀬を渡つて行く道を見ると、慰めやうもなく淋しい心持になることである。

【評】采女の葬列が通つたといふ川瀬の道に立つて、感慨の情にふけつた時の歌である。助詞の「の」とサ行音を反復してあるので、詠歎の聲にふさはしい調を得てゐる。

二一九　天數ふ　大津の子が　逢ひし日に　おほに見しかば　今ぞ悔しき
天數　凡津　子之　相　日　於保爾見數　者　今敍悔

【釋】○天數ふ　「天數」に就いては種々の訓がある。流布本にアマカゾフ（講義同訓）、代匠記精撰本にアメノカズ、童蒙抄にアマツカズ、考にソラカゾフと訓み、又古義には「天」を「左左」或は「樂」等の誤字と見てササナミノと訓み、檜嬬手には「按に佛説の天數にて、兜卒の三十三を思へるなるべし。さらば三三並ぶ意にて、三三並とよまする義訓とすべし。」と解いてゐる。略解攷證・註疏・美夫君志・新考等は考の訓に從つてゐる。今は姑く流布本の訓に從つて置く。其の語義に就いても諸説があつて未だ定説を見ないが、從來一般に行はれたのは冠辭考の説であつて、「物をさだかにせで、凡にそら量りをするをそら數へといふを以て、大津の大を凡の意にとりなして冠らせたり。」と云ふのである。又攷證には「何にまれ天なる物をかぞふるは凡なるものなれば、そらかぞふ凡とはつゞけし也。」と解いてゐる。なほ講義には「天」は天の星などを指すのであつて、星の數は多いから之をオホの枕詞としたのであると解かれてゐる。要するに訓釋共に猶考究を要する枕詞である。○逢ひし日に　流布本の訓にアヒシヒニに從ふべきである。「大津の子が逢ひし日に」は、大津の采女が自分に逢つた日にの意。古代では人に出會ふ意を表す時に、相手を主格にして云つた。例へば「黄葉の過ぎぬや君が逢はぬ夜多き」（六二三）「うらぶれて夫は逢ひきと人ぞ告げつる」（三三〇三）の如きである。

【譯】滋賀の大津の采女に生前嘗て逢つた時に、しみじみと見なかつたので、今となつては口惜しくて堪らない。

【評】長歌に「おほに見し事悔しきを」と歌つたのと全く同一の作者の主觀を、短歌に繰返したのである。佳人の死に對する多感な人麻呂の性格が表れてゐる。初句と第三句の句頭にアの母音が響き、第二句と第四句の句頭にオの母音が現れてゐて、麗しい音調をなしてゐる。

讃岐狹岑島視石中死人、柿本朝臣人麻呂作歌一首幷短歌

二二〇　玉藻もよし　讃岐の國は　國からか　見れども飽かぬ　神からか　ここだ貴き
玉藻　吉　讃岐　國者　國柄　加　雖見不飽　神柄　加　幾許貴寸

天地　日月と共に　足り行かむ　神の御面と　繼ぎ來る　中の水門ゆ　船浮け
天地　日月與共　滿　將行　神乃御面跡　次來　中乃水門從　船浮

て　吾が榜ぎ來れば　時つ風　雲居に吹くに　沖見れば　しき浪立ち　邊見れ
而　吾　榜來者　時風　雲居爾吹　爾　奥見者　跡位浪立　邊見

ば　白浪さわぐ　鯨魚取り　海を恐み　行く船の　楫引き折りて　彼方此方の
者　白浪散　動　鯨魚取　海乎恐　行　船乃　梶引　折而　彼方此之

島は多けど　名ぐはし　狹岑の島の　荒磯面に　廬して見れば　浪の音の　茂
島者雖　多　名細　之　狹岑之島乃　荒磯面爾　廬作而見者　浪音乃　茂

き濱邊を　敷妙の　枕にして　荒床と　より伏す君が　家知らば　行きても告
濱邊乎　敷妙乃　枕爾爲而　荒床　自伏君之　家知者　往而毛將

げむ　妻知らば　來も問はましを　玉桙の　道だに知らず　おぼほしく　待ち
告　妻知者　來毛問　益乎　玉桙之　道太爾不知　欝悒久　待

か戀ふらむ　愛しき妻らは
加戀　良武　愛　伎妻等者

【釋】○讃岐狹岑島　「狹岑」はサミネと訓む。狹岑島は一にサミノヤマとも云つたのであつて、反歌には「佐美乃山」と歌つてある。（新考の說に「ね」は峯の意で、「さみ」を「さみね」とも云ふのは、「つくば」を「つくばね」とも云ふのと同類であると云ふ。）此の島は今は「砂彌島」と言ふ。香川縣仲多度郡（古くは那珂郡）に屬する鹽飽諸島中の一島であつて、坂出町の海岸を去る西北二十七八町の沖にある、長さ十町幅三四町の小島である。三二頁の地圖參看　○視ニ石中死人一　考にイソノチニミマカレルヒトヲミテと訓んである。磯邊の小石の間に横たはつてゐる屍を見ての意。これは行き斃れになつてゐる行旅者を云ふのであらう。

○玉藻よし　「讃岐」の枕詞。「よし」を良しの意味に見る說は妥當でない。これは「麻裳よし」「青丹よし」「眞菅よし」等の「よし」と同じ助詞である。讃岐の國一帶の海濱に美しい海藻が採れるので、此の枕詞を生じたものと思はれる。○國からか　「國から」の「から」は、今も「家がら」「人がら」「品がら」「日がら」等と用ゐる位格品等を表す「から」で、これは又「神から」「神ながら」（「な」は「の」の意の助詞）などのそれと同じく、元來は故にの意を表す語である。「國から」は國の品格をいふ。最後の「か」は疑問の係助詞で、下の「飽かぬ」が其の結である。一句の意は國柄が優れてゐる爲であらうかといふ意。「國から」と同類の語に「山から」「川から」等があつて、「み吉野の芳野の宮は山可良し貴くあらし水可良し清けくあらし」（三一五）の如く用ゐられてゐる。○神からか　「神柄」を流布本にカミカラ（代匠記・童蒙抄・考・古義同訓）と訓んでゐるが、攷證の訓のカムカラが正しい。「玉くしげ二上山は（中略）可牟加良やそこば貴き」（三九八五）「立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず加武賀良ならし」（四〇〇一）などの用例がある。「神から」の「から」は前に說明した通りである。さて既に一言した通り、上代人は國土そのものに神靈が宿つてゐると考へたのであつて、古事記に「次生二伊豫之二名嶋一。此嶋者身一而有二面四一。毎レ面有レ名。故伊豫國謂二愛比賣一。讃岐國謂二飯依比古一。粟國謂二大宜都比賣一。土左國謂二建依別一。」とあるのも、此の思

想に基づくのである。此の外集中にも山川國土を直ちに神として歌つた作が幾らもある。從つて此處に「神から
か」と歌つたのは、前の「國からか」が國土そのものを指すのに對して、國土の神靈を指したのである。○ここだ貴
き　流布本に「幾許貴寸」をココバカシコキと訓んであるが、管見に「幾許」をココダ、代匠記精撰本に「貴寸」をタ
フトキと訓んだのがよい。「ここだ」の假名書の例には「許許陀(ココダ)も亂(まが)ふ梅の花かも」(八四四)「何ぞこの兒の己許太
愛(かな)しき」(三三七三)などがある。「ここだ」は如何ばかりの意であるが、轉じて甚だしく數多などの意に用ゐる。
なほ「ここだ」の系統に屬し、それと同じ意を表す副詞に「ここだく」があり、また其の轉訛と認められる「こきだ
く」がある。「ここだ」の「だ」は類似音の「ら」又は「ば」に轉訛して、「ここら」(用例は平安朝以後に見える)或は「こ
ここば」となつた例があり、更に「ここば」の系統の副詞に「ここばく」、又其の轉訛の「こきばく」「こくばく」がある。
次に右に擧げた一類の副詞と略同じ意を表すものに、「ここら」に對する「そこら」、「ここば」に對する「そこば」と
いふ語があつて、「そこら」の系統に「そこらく」、又「そこば」の系統に「そこばく」がある。此の外「そきだく」とい
ふ語もあるから、其の源には「そこだく」「そこだ」等の副詞があつた事と想像せられる。以上擧げた如き語の假名
書の例は、殆ど全部集中又は祝詞等の奈良朝の文獻に見えてゐる。○足り行かむ神の御面と　「足る」は「望月の
滿(タレル)有面(おも)わに」(一八〇七)又「面足尊(オモダル)」等の例によつて知られる通り、整備する意である。「神の御面」は前に掲げた
古事記の國生神話の中に、「此嶋者身一而有二面四一」とあるのと同じであつて、此處では其の四つの面の一つ即ち
讃岐國を指してゐる。「天地」以下四句の意は、天地・日月と共に、いよ〳〵益足り整うて榮え行くであらう國とし
ての意。○繼ぎ來る　原文の「次來」を流布本にツギテクル(代匠記以下諸註是に從ふ)、攷證にツギテコシ(美夫

君志同訓)と訓み、古義には此の句の上に「云」を加へてイヒツゲルと訓み、新訓には原のままをツギキタルと訓
んでゐる。今は新訓に從つた。語義に就いては諸說がある。代匠記には「中(なか)」は「上」又は「始」に次ぐといふ意で、
此の句を「中」の枕詞にしたのであらうと云ひ、童蒙抄の一說には、作者が行路を引續けて來た所のといふ意であ
るとし(攷證講義同說)、考には神代より言ひ繼ぎ來るの意であると言つてゐる。(檜嬬手・古義・美夫君志同說)思
ふに考の說が最も穩かである。以上は讃岐國を稱讃した詞である。○中の水門ゆ　古の那珂郡(今は多度郡と合
併せられて仲多度郡に屬してゐる)の湊を云ふ。『西讃府志』に「中津は丸龜市の西南楠無川(○今は金倉川と云ふ。)の東畔に在
り。下金倉を中津とも稱す。謂はゆる中水門なるべし。」とある。是に據れば「中の水門」は、今の中津即ち仲多度
郡豐原村大字下金倉(多度津町の東方十餘町)附近の海濱であつて、砂彌島は此所から東北二里餘の海上に當る。
(三二頁の地圖參看)最後の「ゆ」はより の意。○時つ風　時の風の意で、考の說の通り、潮の滿ち來る時に吹き起る風を云ふ。
集中に「時風(トキツカゼ)吹くべくなりぬ」(九五八)「時風(トキツカゼ)吹かまく知らに」(一一五七)などと歌はれてゐる。○雲居に吹くに
「雲居」はここでは空を云ふ。既出(五二)參照。作者は雲脚の只ならぬ有樣を眺めて斯く歌つてゐるのであらう。
○しき浪立ち　原文の「跡位浪」を流布本にアトヰナミ、代匠記にアトクラナミ、新訓にトヰナミと訓んでゐるが
何れも意味が通じない。考に「跡位」は敷坐(しきゐる)の意であるとし、集中に「跡座浪」(三三三五)「敷浪」(三三三九)「腫浪」
(同上)等と記してあるのは、何れも同一語を表したものと認めて、此等をシキナミと訓んで以來、諸註はこれに
從つてゐる。尙講義には「跡位」「跡座」などは「足を下してそを載する所の義」で、和名抄に謂ふ「屧」卽ち「くつの
しき」を云ふのであつて、ここは其の音シキを借りたのであらうと解いて居られる。さて「しき浪」の「しき」は「し

く」「しきる」(頻)「しげし」(繁)等と關係があつて、動作の繰返される意を表す。卽ち「沖つ白浪立ち之久らしも」(三六五四)「大野に小雨降り敷」(二四五七)などの「しく」の連用形である。從つてこれは新撰字鏡に「淹渚、波浪相重之貌、志支奈美」とあるやうに、頻りに寄せ來る浪を云ふ。○白浪さわぐ　原文の「散動」を流布本にトヨミ、童蒙抄にサワギと訓んでゐるが、考にサワグと訓み改めたのがよい。(攷證に「とよむ」は主に音に就いて云ひ、「さわぐ」は形に關して云ふと述べてゐる。)○鯨魚取り　「海」の枕詞。(前出)○海を恐み　海上の有樣が恐ろしいので。○楫引き折りて　「かぢ」は今の舵ではなくして、船を漕ぐ具卽ち和船の艪に當るものである。〔一五三〕の「沖つ櫂」參照。「引き折り」は「引きをり」の約まつた形で、引き撓めること。○島は多けど　「多け」は「多し」の古い已然形であるから、「多けど」は多けれどの意である。○名ぐはし　名も麗しいの意で、地名に冠する枕詞となる。前出〔五一二〕參照。○荒磯面に　流布本にアライソモニと訓み(考・略解同說)、古義に「荒磯回」をアリソミニ(檜嬬手・註疏・新考同說)と訓んでゐるが、攷證に原のままをアリソモニと訓んだのが妥當である。荒き磯邊の上にの意。○廬して見れば　「廬作而」を流布本にイホリツクリテ、童蒙抄にイホリシテ(考・攷證・講義等同訓)又はヤドリテと訓み、略解にイホリテ(檜嬬手・古義・新考同訓)と訓んでゐる。名詞の「いほり」は元來名詞の「いほ」をラ行四段に活用させた「いほる」といふ動詞の連用形であるが、「いほる」といふ動詞の用ゐられた確證は集中に見當らないから、姑く童蒙抄の一訓のイホリシテに從ふべきである。假名書の例に「いづれの島に伊保里世む我」(三五九三)「晩蟬の鳴く島かげに伊保利須流かも」(三六二〇)などがある。○敷妙の　「枕」の枕詞。(前出)○枕にして　流布本の訓を始め諸註にマクラニナシテと訓んでゐるが、今は新考の訓マクラニシテに從つた。○荒床と　「荒」は「荒野」「荒山」などのそれと同じく、人氣のない淋しい意である。荒磯邊に死人が横たはつてゐる所を床と見做して斯う云つたのである。「と」はとしての意。○より伏す君が　「自伏」を流布本の訓並に從來の諸註に、コロフスと訓んであるが、山田博士の所說の通り、古來「ころふす」といふ語の用例は無いから、これは「自」を「寄」の借字と見てヨリフスと訓むのが正しい。此の句は寄り臥してゐる人がある、其の人の云々と云ふ意を簡單に敍べたのである。○玉桙の　「道」の枕詞。(前出)○道だに知らず　主語は下の「愛しき妻ら」である。夫の在處を尋ねて行くべき道さへも知らずしての意。○おぼほしく　心晴れやらず氣懸りに思つての意。(前出)○愛しき妻らは　「愛しき」はいとしいの意。「ら」は接尾語。

【譯】讃岐國は國柄が優れてゐる爲であらうか、いくら眺めても見飽きがしない。又國の神柄が貴い爲であらうか、いとも貴く思はれる。天地や日月と共に、愈益榮え行くべき神樣の御面として昔から語り傳へて來た、此の國の那珂の港から船を浮べて漕ぎ出して來ると、潮時の風が吹きつのつて空を吹くので、沖を眺めると浪が頻りに立つて居り、岸邊を眺めると白波が打ち寄せて騷いでゐる。餘り海の模樣が恐ろしいので、進み行く船の艣を引き撓めて力一杯に漕いで、彼方此方に島は數多あるけれども、中でも殊に名の麗しい狹岑の島の、荒い磯の上に廬を結んで邊を見ると、浪の音が絶えず聞えて來る濱邊を枕にして、人氣の無い荒濱を床として打ち臥してゐる人がある。此の人の家を知つてゐたら、自分は行つて家人に告げてもやらうに、又妻なる人が斯くと知つたならば、尋ねても來るであらうに、尋ねて行くべき道さへ知らずして、心もとなく思ひながら待ち焦れてゐるであらう、此の人のいとしい妻は。

【評】此の長歌の中心は言ふまでもなく、孤島砂彌島の荒磯に行き斃れてゐる行旅者に對して、作者が熱い同情の涙を濺いで歌つた部分、卽ち「名ぐはし狹岑の島の」以下である。而して此の後半の抒情的部分に先立つ前半の敍事的部分は、更に二小段から成立つてゐる。卽ち冒頭から「神の御面と繼ぎ來る」までの、讃岐國の讃美の部分が第一小段であり、「中の水門ゆ」以下作者が荒浪にもまれつつ、島傳ひに西から東へ航行する事を歌つた部分が第二小段である。荒浪の中を難航する事を歌つた部分は、描寫が簡潔で而も力强く且印象的である。此の大自然を背景として、一小島の濱邊にふと屍を發見した所に、作者と共に讀者も亦强く胸を打たれるのである。當時の行旅者の中には饑餓病苦などの爲に、山野でかやうな不慮の慘めな死を遂げる者が多かつたのであらう。日本書紀にも聖德太子の御歌として傳へてゐる「級照る片岡山に、飯に飢て臥やせる、その旅人あはれ、親無しに汝成りけめや、さす竹の君はや無き、飯に飢て臥やせる、その旅人あはれ」の如き歌がある。さて此の長歌は多感な人麻呂が此の不幸な旅人と其の妻の上に、篤い同情を寄せて歌つたのであつて、內容に變化があり而も整然としてゐて、敍景抒情相俟つて優れた作品となつてゐる。

反歌二首

二三一　妻もあらば採みてたげまし佐美の山野の上のうはぎ過ぎにけらずや

妻毛有者採而多宜麻之佐美乃山野上乃宇波疑過去計良受也

【釋】○採みてたげまし　此の句を流布本にトリテタキマシ、童蒙抄にトリテタゲマシ（略解・檜嬬手同訓）と訓んでゐるが、考にツミテタゲマシ（攷證・古義・美夫君志・新考等同訓）と訓んだのに從ふべきである。此の句の意味を童蒙抄には、「此死人をとりて、いだきもたげましといふ義也」と解き、略解には宣長の說を引いて、「たげ」は「髮たぐ」などいふ「たぐ」であつて、死骸を取り上げる意であるとし、其の屍體を時過ぎるまで採る人もないうはぎに譬へたのであると云つてゐる。（檜嬬手・攷證・美夫君志同說）然し髮を揚げる意の「たく」は〔一二三〕の條に說いた通り四段活用であり、此處の「たげ」は下に未然形所屬の「まし」が附いてゐるから下二段活用であつて、兩者は明かに別語である。此の「たぐ」は古義の說の通り、飲食する意の古い動詞である。其の用例には「岩の上に小猿米燒く米だにも多礙て通らせ山羊の老翁」（皇極天皇紀）「神の御酒を多義と言ひけばかもよ我が醉ひにけむ」（常陸風土記）「班鳩の富の井の水生かなくに多義てましもの」（上宮聖德法王帝說）等がある。なほ雄略天皇紀の「共食者」をアヒタケヒトと訓んでゐるのを參考すべきである。さて一句の意は、摘んで食べさせもしようにといふのである。○野の上のうはぎ　「野の上」の訓は略解に據つた。意味は野邊に同じ。「うはぎ」は外にも「春日野に煙立つ見ゆをとめらし春野の菟芽子採みて煮らしも」（一八七九）と歌はれてゐる。和名抄に「七卷食經云、薺蒿菜、一名莪蒿（和名於波岐）崔禹曰、狀似艾草而香、作羹食之。」とあるから、ウハギは又オハギとも言つたのである。「うはぎ」は今謂ふ「よめな」のことで、春の嫩葉を食用に供するのである。○過ぎにけらずや　「過ぐ」はよめなが成長して、摘んで食べるべき時期を過ぎたことを云ふ。「けらずや」の「けら」は過去を表す助動詞の「けり」の未然形で、平安朝以後此の活用形は亡びた。外にも「緩にすべく成りに家良ずや」（八一七）の如き用例がある。食べるべき時期が過ぎてしまつたではないかの意。

【譯】妻でも居たならば、此の佐美の山の野邊のよめ菜を摘み取つて、食べさせた事であらうに。其のよめ菜は、

もうこんなにたけてしまつたではないか。

【評】最早夏である。屍のあたりを見ると、よめ菜が伸びて蓬々と生ひ茂つてゐる。此の旅人はこれを食べて、一時の飢を凌ぐ事もしなかつたと見える。かやうに作者は想像したのである。「妻もあらば採みてたげまし」の二句の裡には、死者に對する作者の深い同情が籠つてゐる。此の歌の情景を描いて見ると、言ひ知れぬ淋しさが涌いて來る。

二二二　沖つ波　來よる荒磯を　敷妙の　枕とまきて　寢せる君かも
奥波　來依　荒磯乎　色妙乃　枕等卷　而　奈世流君香聞

【釋】○枕とまきて　枕としての意。「まく」に就いては前に説明した。○寢せる君かも　「ぬ」(寢)といふ下二段活用動詞に敬語の助動詞の「す」が附くと、母音變化が起つて「なす」となる。其の用例には「股長に寢をし那世」(神代記)の如きがある。此の「なす」の命令形に助動詞の「り」の連體形が添つたのが「なせる」である。

【譯】沖の浪が押し寄せて來る此の荒磯を枕として、打ち臥してゐる人のいたはしさよ。

【評】長歌の終の方に歌つた「浪の音の茂き濱邊を云々」の意味を更に短歌形式に歌つたのである。

柿本朝臣人麻呂在二石見國一臨レ死時、自傷作歌一首

二二三　鴨山の　磐根しまける　吾をかも　知らにと妹が　待ちつつあらむ
鴨山之　磐根之卷　有　吾乎鴨　不　知等妹之　待　乍　將　有

【釋】○臨レ死時　考にミマカラントスルトキと訓んでゐる。喪葬令に「凡百官身亡者、親王及三位以上稱レ薨、五位以上及皇親稱レ卒、六位以下達二於庶人一稱レ死」とあるから、人麻呂は六位以下の微官であつた事が知られる。○自傷作歌　考にカナシミテヨメルウタと訓んでゐる。○鴨山の　此の地名は現在は遺つてゐない。其の位置に關しては從來諸説が現れてゐる。(イ)岡熊臣の『柿本人麻呂事蹟考辨』には、古傳説に基づいて、石見國美濃郡高津村の湊口に在つた鴨島のことで、此の島は萬壽三年の海嘯の爲に海中に沒したので、今は無いと云つてゐる。(『石見八重葎』『柿本人丸事跡考』『石見海底廼伊久里』及び古義・檜嬬手等同説)(ロ)藤井宗雄の『石見國名跡考』には、『石見國風土記』に「加茂山、高一百丈又周一里十歩磯也。有二松枯木雜木篠笹藥草一、少去有二石神一云々」とあるのを引いて、加茂山卽ち鴨山で、那賀郡濱田町(二四五頁地圖參看)の城山(今は「龜山」と云ふが、是は古の「鴨山」の訛つたものである)がそれであると云つて居る。(ハ)『大日本地名辭書』には那賀郡神村(○今は二宮村に屬す。都濃村都野津村の南に隣る村である。)の山を指したのであらうと云ふ。(ニ)齋藤茂吉氏の著『柿本人麿』には、『石見由來記』並に石見の古地圖(慶安年間及び享保年間のもの)に邑智郡龜村なる地名があつて、(現在の邑智郡濱原村字龜に其の名を傳へてゐる)其の「かめ」は古くは「かも」(加茂・鴨)と呼ばれたもののやうであるから、龜の西に聳ゆる粕淵村の津目山が鴨山であらうと推定して居られる。(同書三四一―八六頁所載「鴨山考」參照)嘗て濱田中學校に在職した知人神木亮氏は、右の第二説を妥當として居るが、なほ最近現れた第四説は注目すべき説であると思ふ。邑智郡の津目山は江ノ川に沿うて河口より溯ること十二三里の山間に在る。○磐根しまける　磐を枕にしてゐるの意。新解に「まける」は手を廻らして卷き抱へるやうにする意であると解かれたのは穩かでない。〔八六〕の「磐根しまきて」參照。此の句を攷證・美夫君志・全釋

に、死んで後山に葬られる様を想像して歌つたのであると解いてゐるのは誤である。新考に述べてある通り、こ
こに「まける」とあつて「まかむ」とは歌つてないから、これは現に磐を枕に臥してゐるのであつて、鴨山で行斃れ
になつた事を意味してゐる。○吾をかも　「か」は疑問の係助詞で最後の「あらむ」に懸る。○知らにと妹が　流布
本に「不知等」をシラズトと訓んでゐるが、小琴にシラニトと訓み改めたのがよい。「窺はく斯良邇登御眞木入日
子はや」（崇神天皇記）の例がある。知らずして妻がの意。
【譯】此の鴨山の磐を枕にして死に瀕してゐる自分を、それとは知らずして妻は、何時歸るかと自分を待つて居る
ことであらう。
【評】瀬戸内海の一小島なる砂彌島で、見知らぬ旅人の哀れな最期の姿を見て、深い同情を寄せた歌聖人麻呂も、
亦これと同じ運命に遭遇して、都を遙か隔つた石見國の山中で、看取る妻子も無くして、妻の心情を思ひ遣りつ
つ最期を遂げたのである。斯様な哀れな夫の死を傳へ聞いた、都なる妻の悲歎の情は、以下講ずる挽歌によつて
窺ひ知られる。

柿本朝臣人麻呂死時、妻依羅娘子作歌二首

二三四　今日今日と　吾が待つ君は　石川の　貝に交りて　在りと言はずやも
且今日且今日　吾　待　君者　石水　貝爾交　而　有　登不　言八方

【釋】○妻依羅娘子　前に講じた「柿本朝臣人麻呂妻依羅娘子與二人麻呂一相別歌」（一四〇）の條に述べた通り、依羅
娘子は人麻呂が石見國で亡くなつた時大和にゐた妻である。○今日今日と　原文に「且今日且今日」とある。同様
の例に「吾が背子を且今且今と待ち居るに」（二八六四）の如きがある。「且」は漢文に於ける助字としての用法に基
づいて用ゐたのであると講義に解かれてゐる。今日か今日かとの意。○石川の　金澤本・類聚古集・古葉略類聚鈔・
神田本等には、「水」の下に「之」があるから、流布本には脱したのであらう。さて「石川」を前述の「鴨山」に關する
四説の（イ）の説では、高津川であるとし、（ロ）の説では濱田川であるとし、（ハ）の説では津目山の麓を流れる江ノ
川上流を指したのであるとして居る。要するに鴨山の所在が明確でない爲、何れの川を指すものか知り難いが、
鴨山の附近を行き廻る川である事は想像出來る。○貝に交りて　此の句の意義を解いて、代匠記には川邊に葬つ
たのであると云ひ（攷證・新考・新解同説）、檜嬬手及び註疏には「貝」は「峽」の借字であつて、山間の峽谷に立ち入
つての意である（『萬葉集講義』『柿本人麿』同説）と云つてゐる。思ふに此の句の「貝爾」は註に「一云谷爾」とあるか
ら、檜嬬手や註疏の説も捨て難いが、併し字面通りに河原の貝や石の中に交つて斃れてゐる意に解する方が趣が
深い。○在りと言はずやも　此の句の主語は死を報ずる人である。「や」は反語、「も」は感動助詞。これと同じ句
が、山前王が石田王の薨去を哀悼した長歌の反歌「隱口の泊瀬をとめが手に纏ける玉は亂れてありと言はずやも」
（四二四）にも用ゐられてゐる。
【譯】今日は歸るか今日は歸るかと、私が待ち焦れてゐる背の君は、石川の河原の貝の中に斃れてゐると云ふでは
ないか。いとほしいことである。
【評】「石川の貝に交りて」と歌つたので、如何にも荒涼たる河原の上に行斃れになつてゐる悲慘な姿が印象的に表
れてゐる。最後の句が八音の字餘りになつてゐるのも、作者の歎きを深からしめてゐる。

二三五　直に逢はば　逢ひもかねてむ　石川に　雲立ち渡れ　見つつ偲ばむ
直相者　相不勝　石川爾　雲立渡礼　見乍將偲

【釋】○直に逢はば　小琴に此の句をタダノアヒハと訓み、「逢」を體言として取扱つて居る。（檜嬬手・新考・新解・全釋等同說）然し今は流布本の訓に從つて右の如く訓んで解く。直接に逢はうとすればの意。○逢ひもかねてむ　新考にアヒガツマジと訓んである（新解・全釋同說）が、「不勝」は通例カテヌ又はカヌと訓むべき文字であるから、流布本の訓のアヒモカネテムに從つて置く。逢ふことは出來まいといふ意。同樣の句法を用ゐた例に、「手ごしに越さば越しかてむかも」（崇神天皇紀）がある。

【譯】今はもう直接にお逢ひしようと望んでも、お逢ひすることも出來ないであらう。せめて石川に雲なりとも立ち靡いてほしいものだ。それを眺めて夫を偲ぶよすがとしたいから。

【評】空に浮ぶ雲を眺めて別れた人を偲ぶ歌は、萬葉に屢見えてゐる。例へば「春日なる三笠の山にゐる雲を出で見るごとに君をしぞ思ふ」（三一〇九）の如きがあるが、なほ挽歌の中には、雲を亡き人の面影と見做して歌つた作が多い。右に講じた歌も其の一例であるが、此の外にも「隱口の泊瀨の山に霞立ちたな引く雲は妹にかもあらむ」（一四〇七）の如きがある。

## 寧樂宮

靈龜元年歲次乙卯秋九月、志貴親王薨時作歌一首幷短歌

二三〇　梓弓　手に取り持ちて　丈夫の　得物矢手挿み　立ち向ふ　高圓山に　春野燒く
梓弓手取持而　大夫之　得物矢手挿　立向　高圓山爾　春野燒

野火と見るまで　燎ゆる火を　如何にと問へば　玉桙の　道來る人の　泣く涙
野火登見左右　燎火乎　何如問者　玉桙之　道來人乃　泣涙

霧霧に降れば　白妙の　衣ひづちて　立ち留り　吾に語らく　何しかも
霧霧爾落者　白妙之　衣漬而　立留　吾爾語久　何鴨

もとな言へる　聞けば　音のみし泣かゆ　語れば　心ぞ痛き　天皇の　神の御
本名言　聞者　泣耳師所哭　語者　心曾痛　天皇之　神之御

子の　御駕の　手火の光ぞ　幾許照りたる
子之　御駕之　手火之光曾　幾許照　而有

【釋】○寧樂宮　元明天皇の和銅三年三月に藤原から寧樂へ遷都せられて以後、桓武天皇の延曆十三年に平安京に奠都せられるまで、前後八十餘年間が寧樂宮の時代である。寧樂宮の地に關しては（七八）の條に一言したが、尙後に詳しく說明するであらう。さてこれまでの例によれば、斯樣に時代を示した標目の下には、「……宮御宇天皇代」の五字があるのであるが、寧樂宮の場合のみは卷一・卷二及びそれらの目錄にも、單に上の三字を記してあるのみである。これは講義に述べてある通り、「某宮御宇天皇代」の如きは過去の時代を標示する方法であつて、此の卷の記された時代は當代卽ち寧樂宮時代であつたので、單に宮號のみを揭げたのであらう。○靈龜元年歲次乙

卯秋九月志貴親王薨時「志貴親王」と記してあるのは大寶令以後「皇子」を「親王」と改稱した爲である。さて「志貴皇子」といふ御名の皇子は同時代に二方ある。卽ち天智天皇の第七皇子にまします志貴皇子（志紀親王・施基皇子・磯城皇子とも記す。前講〔五一〕參照）と、天武天皇の皇子にまします磯城皇子（志貴皇子とも記す）とである。志貴皇子の薨去に就いては、續日本紀元正天皇の靈龜二年の條に「秋八月甲寅、二品志貴親王薨、（中略）寶龜元年追稱御二春日宮一天皇」と見えて居て、此の歌の題詞に記した干支年月と約一年の相違があり、又天武天皇の皇子磯城皇子の薨去の年月は續日本紀に記載が無い爲に、此の歌に見える志貴親王に就いては從來二樣の見解が現れてゐる。考には此の歌の詞書の記載を誤とし、之を續日本紀に據つて「靈龜二年丙辰秋八月」と改めて居る。攷證（美夫君志同說）には、ここに「靈龜元年九月」とあるのが正しいのであつて、之を續日本紀に二年八月と記したのは、元年九月に元正天皇の御卽位が行はれたので、薨去の事を忌み憚つて、翌年八月まで薨奏の事を延期した爲であると云つてゐる。然るに一方代匠記精撰本の一說及び古義には、此の詞書に見える志貴親王は、續日本紀に薨去の年月の記されてゐない、天武天皇の皇子磯城親王であると述べ、卷十三に「志貴島」とも「磯城島」とも記してゐる事を旁證として、志貴親王は磯城皇子であると云つてゐる。要するに遽かには決定し難いが、志貴皇子の御陵卽ち田原西陵（田原東陵は光仁天皇の御陵）は、延喜諸陵式に「田原西陵、春日宮御宇天皇、在二大和國添上郡一、兆域東西九町、南北九町、守戸五烟」とあつて、今添上郡田原村大字矢田原（高圓山の東南方約半里の地）に在り、尙志貴皇子の尾上宮址が東市村古市の東方高圓山の麓に傳はつて居るのも、此の歌の內容とよく一致するから、此の歌は天智天皇の皇子なる志貴皇子の薨去の時の作と見るべきであらうと思ふ。なほ左註に此の歌は笠朝臣金村歌集に出づとある。

紀橡姫
越道君娘 ─ 白壁王（光仁天皇）四九
　　└ 志貴皇子 ─ 皇子（芝基皇子とも記す）
三八 天智天皇
四〇 天武天皇
　　└ 忍壁皇子
　　└ 磯城皇子
　　└ 磯城皇子
　　└ 蟻媛娘

○得物矢手挿み立ち向ふ　「丈夫の得物矢手挿み立ち向ふ」の三句は既に講じた。〔六一〕參照。初から「立ち向ふ」までの五句は、「高圓山」の「まと」（的）に懸けた序詞である。○高圓山に　「高圓」は集中の假名書の例に「多可麻刀」「多加麻刀」などと記してあるのに據つて、タカマトと訓むべきは明かである。此の山は元來「高圓」の字面通りにタカマロと呼ばれたのであるが、古代に於てはラ行音とダ行音とが屢混同せられてゐるから、タカマロが後にタカマド、更にタカマトに訛つたのであらうと云ふ。（奧里將建氏著『國語史の方言的研究』參照）高圓山は奈良市の東方に、嫩草山・春日山・高圓山の順序に北から南へ並び立つてゐる山で、集中に屢歌はれてゐる。八〇八頁地圖參看　○春野燒く野火と見るまで　春先に野に火を放つて枯草を燒き拂ふ、其の野火かと思はれるほどにの意。○燎ゆる火を如何にと問へば　高圓山に燃える火が見えるのは、一體何事であるのかと問うた所が。○道來る人の　文脈は此の句から四句を隔てて「立ち留り」に續く。○霺霖に降れば　原文の「霺霖」は金澤本・溫故堂本・大矢本・京大本には「霧霧」とある。流布本を始め古寫本にはコサメと訓み、代匠記初稿本にはヒサメと

高圓山

訓んでゐる。一體「霈」は和名抄にヒサメと訓んで「大雨也」と註し、又「霖」はナガアメと訓み「三日以上雨也」と註してある。然るに多くの古寫本に見える「霽霖」は、代匠記精撰本に「霽霖」の誤であらうと云つてゐる。集中には「霽霖」を類似の文字に誤り記した例があるから、（『國語國文の研究』第三十六號所載澤瀉氏の「詞章研究」參照）此處も「霽霖」の誤と見るべきである。訓は和名抄に「霽霖」を註して「兼名苑云、細雨一名霽霖（小雨也、麥木二音、和名古佐女）」とある通り、コサメ（小雨）と訓むべきである。此の句は小雨の降るやうに流れるのでの意。○白妙の　之を「衣」の枕詞とする說もあるが、ここは葬儀の際の事であるから、〔一九九〕に於ける用法と同じく、白布のといふ意の修飾語とするのがよい。○衣ひづちて　「ひづち」の用例は「朝露に裳の裾比都知（ヒヅチ）」（三六九一）「こいまろび泥土打（ヒヅチ）泣けどもせむすべも無し」（四七五）等がある。此の語を代匠記以下諸註に、濡れる意味の「ひづ」と同義語であると解いてゐるが、考別記には次の如く述べてゐる。「此言を集中に湿打（ひづち）と書し多かれど、打は借字にて此卷の末に湿漬と書たるぞ正しきなり。且此二字を比豆知（ヒヅチ）と訓ことは、下に假字にても有なり。言の意は物の湿（ひち）に漬（つき）てぬるゝを本にて、雨露泪などにぬるゝにもいへり。かくて比豆知は右の湿漬の字の如く、比治都伎（ひちつき）なり云々」とある。又講義には集中の「ひづち」の用例から歸納して、次のやうな說を發表せられてゐる。――「ひづち」の行はれる所は衣服の中でも下部の裳で、而も其の裾である。又これは野外の道路で起るのであつて、其の原因は雨露である。此等を綜合して見ると、此の語は雨天にぬかるみを行く時、衣の裾が泥土に汚れ染（しみ）がつく事を云ふのである。其の語原は「湿打」「土打」などの文字の示す通り、ヒヂウチの約まつたものである。――と云ふのである。而して此の歌の場合は涙の落ちるのを雨に譬へたので、其の涙に濡れるのをわざと「ひづち」と云つたのであると解いてある。

講義の說に從ふべきである。○吾に語らく　自分に語ることには の意。以下此の歌の最後までが其の答である。○何しかも　何故にの意味を強く表したのである。前出〔一九六〕參照。○もとな言へる　流布本にモトノナトヒテ、代匠記にモトナイヒシヲ、童蒙抄にモトナイヒテ、考にモトナイヒツルと訓んであるが、小琴及び略解以下諸註にモトナイヘルと訓んだのが穩當である。「もとな」の用例は「別れなば毛等奈（モトナ）や戀ひむ逢ふ時までは」（一五二六）「何せむに命を本名（モトナ）永く欲りせむ」（二三五八）「ぬばたまの夢（いめ）には母等奈（モトナ）相見れど」（三九八〇）「君をぞ母等奈（モトナ）生の緒に思ふ」（四二八一）等がある。此の語の語原並に語義は從來明確にせられてゐなかつたが、山田博士の「母等奈考」（『奈良文化』第十二號所載）によつて明かになつた。卽ち山田博士は「もとな」は「もと」と形容詞の「なし」の語幹「な」との合成語であつて、其の「もと」は根元・根據の義に當る。從つて「もとな」は理由なく根據なくといふのが原義で、わけもなく・よしなく・みだりに等と譯すべき語であると述べて居られる。よつて此の二句は、何故にそんなよしない事を聞いてくれるのかといふ意味である。○音のみし泣かゆ　此の句を流布本にネノミシゾナク、代匠記にネノミシナカル、童蒙抄にネノミゾナカルと訓んでゐるが、考にネノミシナカユと訓んだのが妥當である。「音泣く」又は「音を泣く」「音に泣く」は、聲を上げて泣くのを云ふ。「のみ」「し」は共に「音泣く」を強く表す爲の助詞。「泣かゆ」の「ゆ」は後世の「る」と同じく自然的可能を表す助動詞。一句の意は聲を上げて泣かれるばかりであるの意。○語れば心ぞ痛き　事の次第を話せば心は苦痛に堪へられないといふ意。○天皇の　以下は上の「野火と見るまで燎ゆる火」の說明である。○神の御子の　「神の」は上の「天皇の」と同格である。天皇卽ち現つ神の御子の。○御駕の　此の句を流布本にオホムタノ（代匠記・童蒙抄同訓）と訓んでゐるが、考にイデマシノと

訓んだのに從ふ。此處では志貴親王の御葬送をいふ。○手火の光ぞ　「手火」は手に執る火の意で、葬送の時人々が手に持つてゐる炬火をいふ。日本書紀の訓註に「秉炬、此云二多妣一」とある。「ぞ」は強く指示する意の係助詞。○幾許照りたる　「ここだ」は前に說明した通り、甚だしく又は數多の意。

【譯】高圓山に春の野を燒き拂ふ野火かと思はれる程に、澤山に燃えてゐる火を、「あれは一體何か」と道を來る人に尋ねた所が、其の人は泣く淚を小雨のやうに零して、白い衣を濡らしながら、さて立ち留つて私に話すことには、「一體どうしてそんなによしない事を聞いてくれるのか。聞かれると悲しくて聲を上げて泣かれるばかりだ。話さうとすれば胸が苦しくて堪らない。あの火は神にましますの天皇の皇子の、御葬りに從つてゐる人々の手にしてゐる松明の光が、夥しく照つてゐるのである。」と語つたことである。

【評】志貴親王の御陵は既述の通り、高圓山の東南方に當る田原村矢田原に在る。此の歌は夜間に炬火を點して、御葬列が高圓山の西南麓を廻つて、矢田原へ向ふ樣を見て歌つたのである。同じ挽歌であつても、此の歌は人麻呂の作に見る如き敍事抒情の二段組織から成る類型的な作風に比して、極めて異彩に富んでゐる。志貴皇子薨去の事も、作者の悲歎の情も直接には表現せずして、これらを總て客觀的に而も劇的に寫し出してゐるのが、此の歌の最も著しい特長である。夜の高圓山を背景にして、先づ野火かと思はれる程の炬火の光を寫し出し、次いで道行く人と作者との問答體を以て、闇路を行く御葬列と人々の哀愁悲歎に暮れてゐる樣を敍した構想は、極めて印象的であつて卓越してゐる。又形式の上では三音・四音・六音等の句を挿入してゐるのが、咽び泣くが如き調を傳へてゐて頗る有效である。情景相俟つて勝れた作である。

短歌二首

二三一　高圓の　野邊の秋萩　いたづらに　咲きか散るらむ　見る人無しに
高圓之　野邊　秋芽子　徒　開香將散　見　人無　爾

【釋】○高圓の野邊の秋萩　「秋芽子」の「芽」は流布本には「茅」とあるが、多くの古寫本に「芽」とあるのが正しい。「高圓の野邊」は高圓山の西麓、卽ち今の東市村大字白毫寺、鹿野園の邊の野邊を指したのであらう。志貴皇子の御殿であるといふ尾上宮の址に就いては、『大和名所圖會』に「高圓山にあり。倭路記に曰く、尾上宮の跡は古市の上の岡にあり云々」とあるから、鹿野園の附近に在つたものと思はれる。八〇八頁地圖參看　此の地は當時萩の名所として知られたのであつて、集中に屢歌はれてゐる。○いたづらに　流布本に「從」とあるが多くの古寫本に「徒」とあるのが正しい。○咲きか散るらむ　「か」は疑問の係助詞。此の句は「咲き散るらむか」と同じ意である。咲いて散ることであらうか。○見る人無しに　「見る人」は萩を賞美する人、卽ちここでは志貴親王を指してゐる。

【譯】高圓山の麓の野邊の秋萩は、今は空しく咲いては散ることであらう、愛でる人もなしに。

二三二　御笠山　野邊行く道は　許多(こゞだく)も　繁く荒れたるか　久にあらなくに
御笠山　野邊往　道者　己伎太雲　繁　荒　有　可　久爾有　勿國

右歌笠朝臣金村歌集出

【釋】○御笠山　高圓山の西北方に連なる山で、春日神社の背後に當る。今の嫩草山を一に三笠山と呼んでゐるのとは別の山である。○野邊行く道は　御笠山の麓の野邊を往來する道、卽ち春日野を指したのである。（或本歌に

此の句は「野邊從遊久道」とある。これは野邊を通つて往く道の意である。）○こきだくも　「こきだく」は「ここだく」の轉訛で、甚だしく・ひどくの意。既出（一二〇）參照。○繁く荒れたるか　原文の「繁荒有可」を流布本にシケクアレタルカ（古義・註疏・美夫君志・講義同訓）、童蒙抄にシゲクアルルカ、略解にシジニアレタルカ（攷證・檜嬬手同訓）、新考にシゲリアレタルカ（新訓・新釋・全釋同訓）、又シゲミアレタルカと訓んでゐる。「繁」は集中にシゲシ又はシジニと訓むべき所に用ゐてあるから、今は流布本の訓に從つて置く。「か」は詠歎を表す助詞。草が生ひ茂つて荒れ果てたことであるといふ意。○久にあらなくに　「ひさ」は「ひさし」の語幹を名詞に用ゐたのであつて、久しい間の意である。「君が目を見ず比佐ならば術なかるべし」（三九三四）などの用例がある。「あらなくに」は前に說明した。久しい時を經たのでもないのに、卽ち薨去遊ばされてから未だ日も淺いのにといふ意。

【譯】御笠山の麓の野邊を往き來する道は、雜草が生ひ茂つてひどく荒れたことである。薨去遊ばされてから未だ多くの日も經ないのに。

【評】志貴親王の御在世中には、御殿に通ふ人々が頻繁に往來してゐた春日野の野道が、薨去後は頓に人跡も絕えて、早くも雜草が蔓つてゐる樣を見て、驚きと悲しみとの中に歌つた作である。前に講じた日並皇子尊の殯宮の時、舍人が歌つた（一八一）と相似た趣の作である。

# 萬葉集卷第三

## 解說

【組織】卷第三は雜歌・譬喩歌・挽歌といふ部立になつてゐて、此の卷では「相聞」に代るに新たに「譬喩歌」なる部立の名稱が用ゐられてゐる。譬喩歌は作者の感情を直接に詞の上に表現せずして、總てを隱喩又は諷喩によつて表出した歌であつて、內容は相聞と共通する點があるが、表現態度は全く異なつてゐる。作品の排列法は、各部類の中を更に作歌年代の前後に從つて、大體時代順に並べてあるが、卷一・二のやうに天皇の御代々々を標記してはゐない。【時代】雜歌・譬喩歌・挽歌各作品の時代の範圍は多少異なつて居る。卽ち雜歌は持統天皇の御代から、聖武天皇の天平五年頃までの四五十年間に亙つて居り、譬喩歌は持統・文武天皇朝の作を最古とし、天平の初年から十年頃までの作を最も多く集錄してある。次に挽歌は聖德太子の御歌を最古とし、天平十六年までの作を採つてある。尤も聖德太子の御作一首は、日本書紀に太子の御作として揭げてある歌謠一首と共に、太子の御歌として傳誦せられてゐたものであるから、これを除けば挽歌は持統天皇の朱鳥元年から天平十六年まで、凡そ六十年間の作といふことになる。要するに卷第三に收めた歌は、卷一・二の歌よりも時代を降り、藤原朝から奈良朝の天平年間の作までに及んで居る。【作者】作者の主なるものは、持統天皇を始め皇族に大津皇子・志貴皇子・弓削皇子・

紀皇女・春日王・長屋王・長田王・安貴王・門部王・湯原王があり、又臣下には柿本人麻呂・高市黒人・山上憶良・山部赤人・大伴旅人・春日老・沙彌滿誓・笠金村・大伴百代・大伴駿河麻呂・大伴家持等があり、なほ女流には坂上郎女・笠女郎等がある。卷一・二に比して皇室の方々の御作が少くなり、新たに旅人・赤人・家持等の萬葉代表歌人の作が此の卷から見えて居り、又大伴家一族の人々の作が、比較的多く載せられて居る事が注意せられる。此の卷で歌數の比較的多いのは旅人の長歌一首短歌二十八首、人麻呂の長歌二首短歌二十首、家持の長歌三首短歌十八首などである。

【歌數】歌數は雜歌が長歌十四首(異傳の歌一首を含む)短歌百四十四首(異傳の歌四首を含む)であり、譬喩歌が短歌のみ二十五首、挽歌が長歌九首短歌六十首であつて、卷三の總歌數は長歌二十三首短歌二百二十九首となる。

【編纂】卷三は卷四と相俟つて一部を成すべき卷で、此の兩卷は共に卷一・二の體裁に倣つて、其の續撰として編纂せられたものであらうと云はれてゐる。而も此の卷は一時に編纂せられたものではなく、二度に撰ばれたものであつて、雜歌と挽歌の中の天平以前の作は第一次の編纂に係るもので、譬喩歌と雜歌及び挽歌の天平以後の歌とは、第二次の編纂に係るものであらうとする說がある。而して少くとも此の第二次の編纂を行つた者は大伴家持であらうと云ふ。【用字法】用字法は卷一・卷二と略同樣で、正訓を主とし、正音・略音・借訓・略訓をこれに混へて居る。【歌風】長歌に比して短歌が多く採られてゐる卷であつて、短歌に注意すべき作品が多い。先づ雜歌では、人麻呂及び黑人の羈旅の歌が何れも勝れて居り、又旅人の筑紫に在つて詠んだ多くの作品、殊に讃酒歌十三首は最も注意を惹く作である。譬喩歌は概して表現法が知巧的で、內容が單純である爲に、感動を與へる力に乏しく、歌としての價値は高くない。挽歌では旅人が亡妻を慕つて詠んだ一群の歌、及び家持が亡妻を悲しんで詠んだ彼の初期の歌などが注意すべき作である。

## 雜歌

天皇御遊雷岳之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首

二三五　大君は　神にしませば　天雲の　雷の上に　廬せるかも
皇者　神二四座　者　天雲之　雷之上爾　廬爲流鴨

【釋】○天皇御遊雷岳之時　此の歌の作者人麻呂は、文武天皇の大寶年間には石見國に下つたやうである。此の歌は彼が未だ大和にゐた頃の作である。而して人麻呂が、持統天皇の御代の從駕の作を多く遺してゐる點から見ると、玆に「天皇」とあるのは持統天皇であらう。「御遊」を童蒙抄にミアソビ、考にアソバシシと訓んでゐる。「雷岳」の「雷」は古くカミともイカヅチとも言つたから、「雷岳」はカミヲカ又はイカヅチノヲカと訓まれるのである。集中には「神岳」と記した例が屢あるが、ここは或本の歌に「雲隱る伊加土山に宮敷きいます」とあるのに據つて、イカヅチノヲカと訓むべきである。雷岳の位置に就いては前に說明した。〔一五九〕の「神岳の」參照。

○大君は　「皇者」を流布本にスメロギハと訓んでゐるが、考にオホキミハと訓み改めたのが妥當である。久老の槪落葉別記に、「おほきみ」は當代の天皇を始め諸王までを申す語であり、「すめろぎ」は皇祖及び代々の天皇を申す語であると云つてゐる。大君は此の歌に見るやうに、もと天皇の稱であるが、親王及び諸王をも指すやうになり、後には專ら諸王の稱となつた。○神にしませば　「し」は意味を强める助詞。現つ神であらせられるからの意。

○天雲の雷の上に　童蒙抄に「天雲の」は、雨雲と空の雲とを兼ねてゐるのであつて、雷が鳴る時は雨雲が起るから、詞の縁で「雷」に言ひ續けたのであると云ひ、新考には「天雲の」を「雷」の枕詞と見てある。思ふに雷は天雲の中で鳴り轟くものであるから、「天雲の」を「雷」の修飾語に置いたのである。「いかづち」の「いか」は、「嚴し」「怒る」等の「いか」であり、「つ」は「の」の意の助詞であり、最後の「ち」は「大蛇」「鮫龍」「父」「舅」などの「ち」と同じく、威力あるものを指す語である。さて「雷」は岡の名であるが、此處に「雷の上に」とあるのは、現つ神なる天皇が、常人の爲し難い事を遊ばされてゐるもののやうに歌つたのである。○廬せるかも　流布本にイホリスルカモ（代匠記・童蒙抄・考・新訓同訓）と訓み、槻落葉にイホリセルカモ（略解・攷證・古義・註疏同訓）と訓み、略解所引の或人の說に「流」を「須」の誤と見て、イホリセスカモ（檜嬬手・新考同說）と訓んでゐる。今は槻落葉の訓に從ふ。「いほ」又は「いほり」は、和名抄に「廬、毛詩註云農人作レ廬伊奉以便二田事一」「營伊保利軍營也」と註してゐる。此所は御野立所として假に設けた宮を云ふ。

【譯】天皇は現つ神でいらせられるから、天雲の中で轟く雷といふ名を有つた雷岡の上に、假宮を營み給うていらせられる。

【評】上代人が天皇を現つ神として尊崇し奉つた國民的感情を、率直に且敬虔な態度で歌つた作である。雷岳を直ちに雷そのものとして歌つた奇拔な著想が、此の一首の生命であつて、調も亦それに應じて極めて莊重森嚴である。此の歌の次には「右或本云獻二忍壁皇子一也。其歌曰」と題して、「大君は神にしませば雲隱る雷山に宮敷きいます」といふ類歌が載せてある。

天皇賜二志斐嫗一御歌一首

二三六　否と云へど　強ふる志斐のが　強語り　この頃聞かずて　朕戀ひにけり
不聽跡雖云　強流志斐能我　強語比者不聞而　朕戀爾家里

【釋】○天皇　これも持統天皇である。○志斐嫗　「志斐」は氏であつて、志斐連は新撰姓氏錄・續日本紀等に見えてゐる。「嫗」は老女の意。新撰字鏡に「娘奈（於編反）」とある通り、古くはオミナと言つた。（女はヲミナであつて是とは別語である。）和名抄に「說文云、嫗（於屢反、和名於無奈）老女稱也」又日本靈異記に「嫗奈子」とあるから、晉便によつてオミナがオムナとなり、更にオウナともなつたのである。志斐嫗の傳は明かでない。蓋し「志斐嫗」は攷證の說の通り、强語りをするので、其の「强」の音に通ふ「志斐」の名を賜うたのであらう。新撰姓氏錄卷二に「阿倍志斐連。大彥命八世孫、稚子臣之後也。自二（孫）臣一八世孫名代謚天武御世、獻二之楊花一。勅曰何花哉。名代奏曰辛夷花也。群臣奏曰、是楊花也。名代猶强奏二辛夷花一。因賜二阿倍志斐連（姓）一也。」とある。此の傳說を參考すべきである。○否と云へど　原文の「不聽」は「不欲」「不許」などと記したのと同類で、義訓によつてイナと訓む。いやもう聞くまいと言ふけれどもの意。○强ふる志斐のが　「志斐の」の「の」に就いて、代匠記には志斐の嫗がの意であると解き、槻落葉には「の」は親しみ呼ぶ時に添へる詞で、集中の「背な能が袖もさやに振らしつ」（三四〇二）「妹能らに物言はず來にて思ひかねつも」（三五二八）などの「の」と同じく、「な」の轉訛した語であると解いてゐる。又『奈良朝文法史』には一種特別の間投的助詞とせられてゐる。思ふに「志斐の」「背なの」などの「の」は、「背な那と二人さ寢て悔しも」（三五四四）「妹な根が作り著せけむ」（一八〇〇）などの例と對照して見ると、此等の「な」「ね」と同じ

用ゐ方であるから、元來は槻落葉の說の通り「な」から轉じた接尾語と見るべきである。强ひて聞かせようとする志斐のといふ意。○强語り　「强語」を流布本にシヒゴトヲ（童蒙抄・考同訓）、槻落葉には此の下に「登」を補つてシヒゴトト（攷證同說）と訓んでゐるが、小琴以下諸註にシヒガタリと訓んでゐるのがよい。○この頃聞かすて　流布本の訓にコノゴロキカデ（考・槻落葉・攷證同訓）とあるが、代匠記にコノゴロキカズテと訓んだのに從ふべきである。「聞かすて」は聞かすしての意である。○朕戀ひにけり　「にけり」は所謂過去完了の助動詞であるが、ここの「けり」は詠歎の意を表してゐる。「朕戀ひぬ」の意である。

【譯】いやもう聞くのは厭だと言ふけれども、なほ强ひて聞かせようとする志斐の嫗の無理强ひの物語を、此の頃暫く聞かないので戀しくなつて來た。

【評】此の御製と次の歌とは、天皇と志斐の嫗の間に贈答せられた、諧謔に富んだ歌として興味がある。前に掲げた新撰姓氏錄の記載に據れば、「志斐」なる氏と强ひ言とは深い關係があつたものと思はれる。其のシヒといふ音が、第二第三句に三度繰返されてゐるのも、此の歌の諧謔的內容に相應しい輕快な調を成してゐる。

志斐嫗奉レ和歌一首　嫗名未詳

㊂七　否と言へど　語れ語れと　詔らせこそ　志斐いは奏せ　强語りと宣る
不聽雖　謂　話禮話禮常　詔　許曾　志斐伊波奏　强話　登言

【釋】○詔らせこそ　「詔許曾」を流布本にノレバコソ（童蒙抄・考同訓）と訓んでゐるが、槻落葉にノラセコソと訓んだのが妥當である。「詔らせ」の「せ」は敬語の助動詞「す」の已然形。意味は「詔らせば」と同じであるが、既述の通り當時は斯樣な場合に、接續助詞の「ば」を必ずしも添へなかつた。「こそ」は係の助詞。○志斐いは奏せ　此の「い」は體言又は準體言の下に附いて、主格を表す助詞であつて、通例下に「は」「し」等の助詞を伴なふ。（詳しくは『奈良朝文法史』三一一―三二四頁參照）用例は日本書紀の歌謠・萬葉・宣命などに散見する。例へば「近江のや毛野の若子伊笛吹き上る」（繼體天皇紀）「一日だに君伊し無くば忍び敢へぬもの」（五三七）「紀の關守伊留めなむかも」（五四五）「此乎持伊波稱乎致之捨伊波謗乎招都」（宣命）の如き用例がある。「奏せ」は前の「こそ」に對する結である。○强語りと宣る　「强話登言」を流布本にシヒゴトトノルと訓み、考に「話」は「語」、又「言」は「告」の誤かと云ひ、槻落葉に「話」を「語」に改めてシヒゴトトチフと訓み、古義に「言」を「詔」又は「告」の誤と見て、シヒガタリトノルと訓んでゐる。今は原文の儘を古義の訓に據つてシヒガタリトノルと訓む。此の句は、上に「然るにそれを」の如き語を補つて見ると、よく通じる。

【譯】いゝえもう申し上げますまいと言つても、話せ話せと仰せになりますからこそ、此の志斐は申し上げるのです。御座います。それを無理强ひの物語と仰せられますのはちと聞えません。

【評】これは諧謔的な御製に對して、すかさず答へ奉つた當意卽妙の歌である。初句に御製の第一句を其の儘用ゐたのは、贈答歌に屢見受ける常套手段であるが、第二句及び第五句に「語る」といふ語を三回繰返してゐるのは、此の歌の內容に適當した技巧である。なほ第四句までに、天皇が頻りに物語を御催促になつた事を歌つたのは、自己を有效に辯護するものであり、更に結句に「强語りと宣る」と歌つたのは、戲れに天皇の仰言を如何にも迷惑に思ふ意を表したのであつて、巧みな表現である。

長忌寸意吉麻呂應レ詔歌一首

二三八　大宮の　内まで聞ゆ　網引すと　網子調ふる　海人の呼聲
大宮之　内二手所聞　網引爲跡　網子調流　海人之呼聲

【釋】○長忌寸意吉麻呂　傳未詳。○應レ詔歌　童蒙抄にミコトノリニコタフルウタ、古義にミコトノリヲウケタマハリテヨメルウタと訓んでゐる。此の歌は行幸に陪從して詔に應じて詠んだ作である。其の行幸に就いて、代匠記に「難波宮にみゆきしたまひける時の歌なるべし」と云ひ、考に持統天皇の行幸の時の作であらうと云つてゐる。持統天皇が難波に行幸し給うた事は日本書紀には明記が無い。然し萬葉集卷一の「藤原宮御宇天皇代」の下に收むる〔六六〕以下四首の題詞に、「太上天皇幸二于難波宮一時歌」とあつて、其の太上天皇は卽ち持統天皇である。これに據れば持統天皇は、文武天皇の御代に難波に行幸になつたのである。更に續日本紀の文武天皇の條を見ると、「三年春正月癸未、是日幸二難波宮一。二月丁未、車駕至レ自二難波宮一。」とある。古義に、右の續紀の文には「太上天皇」の四字を脫したのであらうと云ひ、又井上通泰博士は、文武天皇と太上天皇と御同列であつたのを、天皇を主にして太上天皇を略したのであると云つて居られる。（『萬葉集雜攷』六五―七三頁參照）此等によつて、此の歌は文武天皇の三年正月に、兩帝御同列で難波の長柄豐碕宮に行幸せられた時の作と見るべきである。○大宮の　大宮は長柄の豐碕宮を云ふ。既出〔六四〕參照。○網引すと　「あびき」は「網引」の約であつて、「網子」を「あご」、「網代」を「あじろ」と云ふのと同類である。神樂歌に「あさくらやおめの湊にあびきをれば」とある。地曳網を引くことを云ふ。最後の「と」は目的を表す助詞で、とての意。○網子調ふる　「網子」は網を曳く者を云ふ。此の「子」は「水夫」（機子の意）「舟子」「田子」「馬子」などの「子」と同じである。「ととのふ」は從來一般に呼び集める意と解かれたが、既述の如く「調」の字義に從つて整頓する意に解くべきである。〔一九九〕參照。卽ち網子をそれぞれ持場に配置するのをいふ。○海人の呼聲　「海人」は漁業に携はる者を一般に云ふのであつて、網子も其の中に含まれてゐるが、ここは新考の說の通り、網子に對して稍頭だつた者を云ふ。此の句は上の「大宮の内まで聞ゆ」の補語になつてゐる。

【譯】網引をするとて、網子を整理してゐる漁師の掛け聲が、あのやうに此の御所の内まで聞えて參ります。

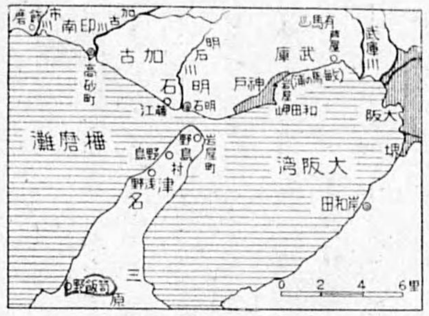
【評】四面青垣山に取り圍まれた大和平野に住み馴れてゐる大宮人が、難波の漁村の情景に興味と親しみとを覺えて歌つた作である。「大宮の内まで聞ゆ」といふ句に、漁師の掛け聲を珍らしげに聞き入つてゐる樣が窺はれると同時に、豐碕宮の地が今とは違つて海濱であつた事が知られる。第三四・五句の句頭にアの音が繰返されてゐるのが、輕快な調を成してゐる。

柿本朝臣人麻呂羇旅歌六首（○原八首の中）

二五〇　玉藻苅る　敏馬を過ぎて　夏草の　野島が埼に　舟近づきぬ
珠藻苅　敏馬乎過　夏草之　野島之埼爾　舟近著　奴

【釋】○玉藻苅る　既出。此の句は海濱の固有名詞の枕詞としても用ゐるが、ここは「敏馬」の修飾語と見る方がよい。○敏馬を過ぎて　「敏馬」は地名であつて、仙覺萬葉抄所引の『攝津國風土記』逸文に、「美奴賣松原、今稱二美奴賣一者神名。其神本居二能勢郡美奴賣山一。（下略）」とあり、又赤人の長歌に「御食向ふ淡路の島に直向ふ三犬女の

浦の」(九四六)と歌はれてゐる地である。今の神戸市灘區石屋(いはや)附近一帶の海濱に當る。一説に折口信夫博士は、こは敏馬の崎を云ふのであつて、神戸港の西南の和田岬を指すのであらうと言はれてゐる。(『短歌講座』所收「萬葉集講義」參照)○夏草の　「野島」の「野」に懸けた枕詞。冠辭考や古義に夏草の萎(な)ゆるの意で、ナユの約まつた「野(ぬ)」に續けたのであると云つてゐるが、これは管見の説の通り、夏は特に野に草が繁茂するから、此の枕詞を置いたものと見るべきである。○野島が埼に　「野島が埼」を童蒙抄にヌジマガサキ、槻落葉にヌジマノサキと訓んでゐる。今は童蒙抄の訓に從つて置く。「野島」は淡路國津名郡野島村(淡路島の北端西部)である。「野島が埼」に就いて『萬葉地理研究』兵庫篇には、地形の上から見て同郡岩屋町(淡路島の北端東部)の北部、松帆崎の東南十一町許りの龍松(りゅうしょう)の岬であらうと云はれてゐる。參考の爲に掲げて置く。



淡路島附近略圖

【譯】自分の舟は、美しい藻を刈る敏馬の浦を漕ぎ過ぎて、やがて淡路の野島の埼に近附いて來た。

【評】唯海路の道筋を説明した單純平明な作とも見えるが、船中の作者が眺めてゐる景色の變化や、それに對する氣分なども窺ひ知られるやうな作である。此の歌の表現上注意すべきは、第一句と第三句の枕詞の效果的な用法である。卽ち「玉藻刈る」によつて、今の船舶輻輳した神戸港とは全く趣を異にした、上古の長閑な海濱の光景が想像せられ、「夏草の」によつて、草木の青々と茂つた淡路島が、海上に浮んでゐる樣が想像せられる。又此等の枕詞によつて、美しい景色を眺めながら、長閑な航海を續けてゐる作者の喜びも自ら表現せられてゐる。

## 二五　淡路の野島が埼の濱風に妹が結びし紐吹きかへす

淡路之野島之前乃濱風爾妹之結紐吹返

【釋】○淡路の　「淡路」は此の島が阿波國へ渡る途上に在る島であるから、生じた名であると云ふ。○濱風に　濱風が紐を吹き返すのであるから、語法上「に」は「の」とあるべき所であるにも拘らず「濱風に」とあるのは、濱風に吹かれて心淋しく思つてゐると其の濱風が、の意を含めたのである。これに就いて古義に、「もし濱風之といひたらむには、かいなでの歌よみの詞なるべし。爾といひたるに深き味はあり。濱風に吹かれてもの心ぼそきだにあるを、その濱風が妹が結べる紐を吹翻すといへる、深き情をもたせたるにあらずや。」と云つてゐる。○妹が結びし紐　「妹之結」を槻落葉にイモガムスベル(小琴古義・檜嬬手・註疏同訓)と訓んでゐるが、流布本の訓のイモガムスビシに從ふべきである。「紐」は衣の紐で、上衣の領を左衽に合せ、胸の上部と腰の所とで結んだのである。當時は夫が家を出る際には、妻が其の紐を結んだのである。此の事に就いてはなほ評の條下に説明する。

【譯】淡路の野島の埼の濱風に、心細い思ひをしながら吹かれてゐると、其の潮風が家を立つ時妻が結んでくれた旅衣の紐を、心なく吹き翻すことである。

【評】上代の夫婦生活に於ては暫し別れる場合にも、其の妻が夫の上衣の紐や下紐を結ひ堅め、夫は再び妻に逢ふまで之を解かない風習があつた。これはかの結び松や草結び(一六六頁參照)と同じく、再會を祈請する爲に行ふ一種の呪術である。例へば集中に「吾妹子が結ひてし紐を解かめやも絶えは絶ゆとも直(ただ)に逢ふまでに」(一七八九)

「二人して結びし紐を一人して吾は解き見じ直に逢ふまでは」(二九一九)の如き歌が多數あり、又古事記の垂仁天皇の段に、天皇が御后の沙本毘賣命に對つて、「汝の堅めし瑞の小佩は誰かも解かむ」と仰せられた事が見えて居る。其の他集中には、結び堅めた紐を他し女の爲に解いた事を悔いて、「筑紫なるにほふ兒故に陸奥のかとり處女の結ひし紐解く」(三四二七)と歌ひ、又妻が結んでくれた旅衣の紐が、道中で斷ち切れたのを不安に思つて、「難波道を往きて來までと吾妹子が著けし紐が緒絶えにけるかも」(四四〇四)と歌つた例などが散見する。さて此の歌は人麻呂が淡路島の北端野島が埼に立つて、遠く大和の方を懷かしさうに眺めてゐると、心なき濱風が旅衣の紐をひらり〳〵と弄んだので、其の紐を見るにつけて、忽ち別れを悲しんだ妻の顏や、其の時言つた言葉などが、まざ〳〵と思ひ浮べられた時の作である。かゝる場合の作歌である事を念頭に置いて此の歌を誦んで見ると、西に傾いた夕陽の光を浴びて、砂濱に長く孤影を引いて立つ作者のわびしげな姿が、目のあたり見えるやうな感がする。さて前の「玉藻刈る」の歌は、自己を中心として自然を眺める態度で歌つてゐるが、此の作には自然を背景とする自己の感情を歌つて居る。人麻呂の羇旅の歌には、此の二つの態度があるのであつて、下に講ずる(二五三)(二五六)は前者に屬し、(二五四)(二五五)は後者に屬して居る。

二五三　稲日野も　行き過ぎかてに　思へれば　心戀しき　可古の島見ゆ

稲日野毛　去過勝爾　思有者　心戀敷　可古能島所見

【釋】○稲日野も　「稲日」は「いなみ」とも言はれたのであつて、集中に「伊奈美」「稲見」「稲南」などとも記されてゐる。「稲日野」は(一四)に述べた「印南國原」と同じく、明石川流域から西の加古川(印南川とも云ふ)流域に至るまでの平野を指す。(前掲地圖參照)○行き過ぎかてに　「かてに」の「かて」は、堪ふ・敢ふ又は得の意の動詞の連用形で、「に」はナ行に活用した否定の助動詞の連用形である。(九四)の「ありかつましじ」參照。通り過ぎることが出來ずの意。○思へれば　思つてゐるとの意。「思へれ」は「思ふ」の命令形に、完了の助動詞「り」の已然形が添つたのである。「ば」はここでは既定事實を順接條件としてゐるのではなく、上の句を輕く切つた接續助詞である。(一九九)の「憶ひも未だ盡きねば」參照。此の二句は行き過ぎ難く思つてゐるとの意。新解に第二句と第三句とを切離して、「漠然と思ふと云つてゐるのは、種々のことが思はれるのである。」と解かれたのは妥當でない。○心戀しき　流布本及び諸註に「心戀敷」をココロコヒシキと訓んでゐるが、古義には「百鳥の聲の古保志枳春來るらし」(八三四)「いかばかり故保斯苦ありけむ」(八七五)等を旁證として、ココロコホシキと訓んでゐる。(註疏・新解・全釋・新釋同訓)「こひし」を「こほし」と云ふのは、コの母音がヒを同化したのである。ここはオの母音の重なれる「こころ」といふ語が上にあるから、コホシキと訓む方が音調が佳い。「心戀しき」は心に戀しきの意。參考となる句に「おほろかに心思ひて」(四四六五)がある。○可古の島見ゆ　可古の島に就いては從來種々の說が現れてゐる。卽ち(イ)槻落葉には「可古」は「阿古」の誤で、攝津の名子と同じ地であると云ひ、又「阿古」は「吾兒」に通じるので、此處に詠み込んだのであると云つて居る。尤も此の說は妥當でない。(ロ)攷證には播磨國加古郡の地を、海上から望み見てかく歌つたのであると云つて居る。(ハ)『大日本地名辭書』及び新考には、此の島は加古川卽ち印南川の河口に生じた堆洲であつて、中世以來高砂(今の加古郡高砂町四三八頁地圖參看)と呼んでゐるのが、其の變形したものであると見てある。要するに可古の島の名は現存しないので、所在不明であるが、思ふに最後の說の如く、昔加古川の河口に

あつた島で、後世陸地になつたのであらう。

【譯】印南野の美しい景色に見とれて、行き過ぎ難く思つてゐると、やがて見たい〳〵と思つてゐた可古の島が見えて來た。

【評】此の歌を播磨灘を東行する時の作と見る說と、西行する時の作とする說とがある。今は前の歌と同樣に、難波を出て明石海峽を通過し、瀨戸內海を西へ舟行する時の作として解いて置く。なほ花田氏の『萬葉集私解』には、は、稻日野を人麻呂が行き過ぎ難く思つたのは、其の風景の爲ではなく、中大兄皇子の御歌「香具山と耳梨山と會ひし時立ちて見に來し印南國原」一四〇を思ひ浮べ、又天智天皇を憶ひ起したからであると云はれてゐる。一說として參考の爲に揭げて置く。

二五四　ともし火の　明石大門に　入らむ日や　榜ぎ別れなむ　家のあたり見ず

留火之明大門爾入日哉榜將別家當不見

【釋】○ともし火の　燈火の明しといふ意味で、同音の「明石」に冠した枕詞である。○明石大門に　原文の「明大門」を流布本にアカシノナダ、拾穗抄にアカシノセト、考にアカシノオホト、略解にアカシノオドなどと訓んであるが、今は槻落葉の訓に據つた。「大門」は「瀨戸」（迫門の義）に對する語で、「門」は「水門」「石門」「島門」などのそれと同じく、門戸の形を成した所を云ふ。卽ち「大門」は海峽の事である。明石海峽は僅か一里の海門であるから、ここを西へ通過すれば、大和の方の陸地は見えなくなるのである。○入らむ日や　「入日哉」を流布本にイルヒニヤ（童蒙抄・考同訓）と訓んでゐるが、槻落葉にイラムヒヤと訓んだのが妥當である。「や」は疑問の係助詞で、第四句に懸る。やがて海峽にさしかかるであらうが、其の日にはの意。○榜ぎ別れなむ　「榜ぎ別る」は「行き別る」などと同じ意味であるが、海路の事であるから斯う歌つたのである。○家のあたり見ず　「家當不見」を略解には宣長の說によつてイヘノアタリミエズと訓み、古義に引く中山嚴水の說では、「不」を「所」の誤としてイヘノアタリミユと訓んでゐるが、今は拾穗抄を始め諸註の訓に從つて置く。故鄕の邊も見えなくなつての意である。

【譯】此の船がやがて明石の瀨戸には入る日には、家鄕のある邊の陸地も見えなくなつて、いよ〳〵遠く漕ぎ離れてしまふ事であらうか。

【評】これまで幾度となく振返つて眺めた懷かしい大和島根が、やがて見えなくなる日が迫つて來た時、其の後に感ずる心細さを豫め想像して歌つた作である。旅人の家鄕に對する惜別の情がしみじみと詠まれてゐる。「ともし火の」は「夏草の」などと共に、人麻呂が新たに造つた枕詞であらうと思はれるが、斯かる點にも彼の才藻が窺はれる。

明石海峽を隔てて淡路島を望む

二五五　天離かる　鄙の長道ゆ　戀ひ來れば　明石の門より　倭島見ゆ

天離夷之長道從戀來者自明門倭島所見

【釋】○天離かる　「鄙」の枕詞。（旣出）○鄙の長道ゆ　原文の「長道從」を流布本にナガヂヲと訓み、又槻落葉には

「國遠き道の長手を」(八八四)「君が行く道の奈我氐を繰り疊ね」(三七二四)などの例に倣つて、ナガテユと訓んでゐるが、代匠記精撰本にナガヂユと訓んでゐるのに從ふべきである。「鄙の長道」は田舍から都までの長い道のりを云ふ。「ゆ」は……を通つての意。○戀ひ來れば　故郷を戀ひ慕ひつつ上つて來るとの意。古義に此の歌を前の短歌と同じく、西下の時の作と見てゐるのは穩かでない。○明石の門より　「門」は前に說明した「大門」と同じく海峽を云ふ。○倭島見ゆ　「倭島」は大和地方の國々、卽ち攝津・河內・和泉邊の陸地を指してゐる。「倭島」の「島」は「秋津島」「大八島」「大和島根」などの「島」と同じで、ここは海上から陸地を指して云つたのであつて、必ずしも島嶼の意ではない。古事記傳に島は凡て或限られた區域をいふので、海中には限らないと云ひ、又金澤庄三郎博士の『國語の研究』には、シマのシは住むの義で、マは間であつて、住む場所を云ふと解いて居られる。さて此の「倭島」を淡路國津名郡岩屋町の東南端の一小島なる、大和島(大綸島とも云ふ)であるとする說は妥當でない。(此の淡路の「大和島」なる名稱は、後世石の人麻呂の歌に附會して生じたものである。)

【譯】遠い田舍から長い道中を經て、故郷を慕つて上つて來ると、明石の海峽から遙かに大和の山々が見えて來た。

【評】右に講じた二首を對照して見ると、同じ明石海峽を西へ向つて通過する時と、東へ向つて通過する時の、作者の感情の相違が如實に窺ひ知られて興味がある。前者に於ては故郷の大和の方を振返りながら、名殘を惜しみつゝ西へ漕ぎ行く時の、淋しい心持があはれ深く感じられ、又後者に於ては、家郷を慕ひつゝ遙々長途の航海を續けて來た時、明石海峽から遙かに模糊として前方に見える大和の山々を望見した時の、狂喜雀躍せんばかりの心持が表現せられてゐる。

二五六　飼飯の海の　には好くあらし　苅薦の　亂れ出づ見ゆ　海人の釣船
飼飯　海乃　庭好有之　苅薦乃　亂出所見　海人　釣船

【釋】○飼飯の海の　「飼飯」をケヒと訓むのは、卷十五に此の歌の類歌「武庫の海のにはよくあらし漁する海人の釣船浪の上ゆ見ゆ」(三六〇九)を掲げ、其の左註に「柿本朝臣人麻呂歌曰、氣比乃宇美能」とある事や、又集中に「此の頃は得飼飯(祈誓)て寢れど夢に見え來ぬ」(七六七)の用例があるのによつて明かである。さて飼飯の地は淡路國三原郡(淡路島の西南部)松帆村大字笥飯野である。四三八頁地圖參照「飼飯の海」は此の地一帶の海を指す。(「飼飯」を越前國の笥飯、卽ち今の敦賀とする舊說には從ひ難い。)○には好くあらし　「には」は古くは庭園のみに限らず海面をも云つた。海面の意に用ゐた例には「いざ兒どもあへて榜ぎ出む爾波も靜けし」(三八八)「庭淨み沖へ榜ぎ出る海人舟の」(二七四六)などがある。此の句の「有之」は、前掲の卷十五の類歌に「安良之」とあるから、アラシと訓むべきである。「好くあらし」は浪風も立たず穩かであるらしいの意。○苅薦の　「亂る」の枕詞。「こも」は菰席を造る菰、卽ち沼澤に自生する高さ四五尺の禾本科植物である。刈り取つて未だ編まぬ菰は亂れ易いので、「亂る」の譬喩的枕詞としたのである。○亂れ出づ見ゆ　原文の「亂出所見」を考にミダレヅルミユ、略解にミダレイヅルミユと訓んでゐるが、攷證にミダレイヅミユと訓んだのが語法上正しい。尤も「亂る」は古くは四段に活用したやうであるから、ミダリイヅミユと訓んでも差支ない。中古文法では斯樣な場合には、「見ゆ」は動詞の連體形を承けるから「亂れ出づる見ゆ」と言ふのであるが、上代に於ては一般に終止形を承けたのである。同樣の例に「沖つ浪恐き海に船出爲利所見」(一〇〇三)「海人榜ぎ久見由浪立つなゆめ」(三四四九)「海人の漁火は點し安敝里見由」

（三六七二）等がある。

【譯】飼飯の海の海上は穩かに風いでゐるものと思はれる。漁夫の釣船があんなに入り亂れて、沖の方に出てゐるのが見える。

【評】鏡のやうに穩かな海の上に、漁船が算を亂して浮んでゐる平和な、而も賑かな漁村の光景が偲ばれる歌である。此の歌は二句目と四句目で切れてゐて、格調が素朴であり遒勁である。

鴨君足人香具山歌一首幷短歌

二五七　天降りつく　天の香具山　霞立つ　春に至れば　松風に　池浪立ちて　櫻花
天降付　天之芳來山　霞立　春爾至　婆　松風爾　池浪立　而　櫻花

木の闇茂に　沖邊には　鴨妻喚ばひ　邊つ方に　味鴨群さわぎ　百磯城の　大
木晩茂爾　奥邊　波　鴨妻喚　邊津方爾　味　村左和佐　百磯城之　大

宮人の　退り出て　遊ぶ船には　楫棹も　無くてさぶしも　榜ぐ人無しに
宮人乃　退　出而　遊　船爾波　梶棹毛　無　而不　樂毛　已具人奈四二

【釋】○鴨君足人　傳未詳。「君」は姓である。○天降りつく　「あまおり」を約めて「あもり」と云ふ。其の假名書の例は（一九九）にあり、又「高千穗の嶽に阿毛理しすめろぎの」（四四六五）等がある。此の句は「香具山」の枕詞である。『釋日本紀』所引の『伊豫國風土記』逸文に、「伊豫郡自二郡家一以東北在二天山一。所レ名二天山一由者、倭在二天加具山一、自レ天降時二分而、以二片端一者天二降於倭國一、以二片端一者天二降於此土一。因謂二天山一本也。」とあるやうに、香久山は天から降つた山であるといふ古傳說があつたので、此の枕詞を生じ、又「天の香具山」とも云ふのである。○天の香具山　此の句の下には助詞の「に」を補つて解くべきである。○霞立つ　流布本にカスミタチ、代匠記精撰本にカスミタツと訓んでゐる。此の句は「可須美多都長き春日」（八四六）「可須美多都春の初を」（四三〇〇）等の場合と同樣、「春」の修飾語であるからカスミタツと訓むのがよい。○春に至れば　「春爾至婆」を攷證にハルニイタレバニシナレバと訓み、又考に或本歌の「春去來者」を採つてゐるが、原文の儘を流布本の訓によつてハルニイタレバと訓んで置く。○池浪立ちて　此の池は古香久山の麓に在つた埴安池である。○櫻花　萬葉集で櫻を詠んだのは此の歌を以て初見とする。○木の闇茂に　流布本には「木」の下に「乃」は無いが、類聚古集・神田本・溫故堂本等には「乃」がある。訓は流布本及び童蒙抄以下の諸註にコノクレシゲニ、神田本にコノクレシゲミとあり、又古義には「爾」を「彌」の誤としてコノクレシゲミと訓み、新訓は原の儘をコノクレシジニと訓んでゐる。今は新訓に從つた。「木の闇」は樹木が繁つて小暗くなつてゐる所を云ふ。さて「櫻花木の闇茂に」を解いて、槻落葉に「櫻は花咲き、若葉は萌出て木暗くなるをいふ」と述べ、また攷證には櫻は花も葉も同時に出るもの故、斯く歌つたのであると解き、檜嬬手・古義等は槻落葉と同樣に解いて居る。併し此等の說は訓義共に從ひ難い。思ふに「茂爾」はシジニと訓んで、繁くの意の副詞と見るべきであつて、此の二句は「櫻花は木の闇に茂に咲き」の如く語を補つて解くべきであらう。卽ち櫻の花は鬱蒼たる樹木の蔭に、繁く一杯に咲き亂れの意である。是と相似た意味の句に、「櫻花木のくれ隱り」（一〇四七）とあるのを參考すべきである。以上の四句は下の或本歌に「櫻花木晩茂松風丹池浪颯」

とあるので、考(攷證・檜嬬手同説)には「櫻花木の闇茂に」の二句と、「松風に池浪立ちて」の二句を置き換へてゐる。以下の句への續きは、或本歌の句の順序に從ふ方が穩當である。○沖邊には　考・攷證にオキベハと四音に訓んでゐるが、今は流布本の訓に從ふ。池の沖の方にはの意。○鴨妻喚ばひ　原文の「鴨妻喚」を流布本にカモメヨバヒテ、代匠記精撰本にカモツマヨバヒ、童蒙抄の一訓にカモノツマヨビ、考にカモメヨバヒ、槻落葉にカモメツマヨビと訓んでゐる。而してカモメと訓む説にも二説があつて、考には「鴨め」の「め」を「群」の約言であると云ひ、又攷證には「かもめ」は鷗であると云つてゐる。卷一の「天皇登二香具山一望國之時御製歌」には鷗を歌つてあるが、それには「加萬目」とあつて、古くは鷗をカマメと言つたやうであるから、攷證の説には從ひ難い。此の一句は代匠記の訓に從つて、カモツマヨバヒと訓むべきである。鳥が妻を喚んで鳴く事を歌つた例には、「浦渚には千鳥妻呼」(一〇六二)「白鶴の妻呼聲は」(一〇六四)「雁が音の嬬呼聲の」(一五六二)等がある。「喚ばひ」は頻りに呼んで鳴く意。○邊つ方に　流布本にヘツカタニ、考にヘツベニ、古義にヘツヘニ、檜嬬手には「波」を補つてヘツベニハと訓んでゐる。考の訓がよい。○味鴨群さわぎ　「味鴨」は雁鴨科に屬する味鳧のことで、今「あぢ」とも「ともゑがも」とも云ふ。鴨に似て小く、頭は青色に褐色を帶び、翼は灰色で脊は灰色に暗赤色の毛を混へ、胸は黄赤に黒點があつて腹は白色である。常に群棲する習性があるから、此處に「群さわぎ」と歌つてゐる。○百磯城の　「大宮」の枕詞。(既出)○退り出て　「まかる」は「まゐる」に對する語で、尊貴の所から退出すること。ここは大宮から退出しての意。○遊ぶ船には　埴安池に浮べて遊んだ其の船にはの意。これは過去の事を歌つたのであるから、「遊びし船には」

もがぢあ

と云ふべき所であるが、過去を現在形で歌つた例は幾らもある。略解や攷證に遊ぶべき船にはと解いたのは穩かでない。○楫棹も　「楫」は前に説明した。(一二〇)參照。「棹」は和名抄に「釋名云、在レ旁撥レ水曰レ櫂(字亦作棹、楊氏漢語抄云、加伊)云々」とある通り櫂を指す事もあるが、ここは「篙(佐乎)棹竿也。方言云、刺レ船竹也。」とある「篙」の義で、水棹を云ふ。卽ち此の歌の「棹」は或本歌に「竿梶母」とあり、又集中に「河の瀨ごとに佐乎さし上れ」(四〇六二)とある「さを」と同じ物である。○無くてさぶしも　流布本に「不樂」をサビシと訓んでゐるが、神田本の訓のサブシが正しい。或本歌には「佐夫之」とある。「も」は感動助詞。○榜ぐ人無しに　上の「楫棹も無くて」と略同じ意味を追加したのであつて、「さぶしも」に懸る句である。此の句は或本歌に「榜與雖思」とある。

【譯】天の香具山に霞が立ちこめる春になると、松を訪れる風に埴安池の面には波が立ち、櫻の花は小暗い木蔭に繁く咲き亂れ、又池の沖の方には鴨が妻を呼び立てて鳴き頻り、岸の方には味鳧の群が騷いでゐるが、嘗て大宮仕への人々が御所から退出して、船遊を催した其の船には、今は櫂も棹も無くて誠に心淋しいことである。其の船を漕ぐ人の姿も見られないで。

【評】左註に據れば、此の歌は藤原宮から寧樂宮に遷都せられた後、故鄕の荒廢を悲しんで詠んだ歌であらうと云ふ。代匠記精撰本には、高市皇子尊が造らせ給うた香具山の宮を詠んだのではなくして、藤原宮の榮えた當時を懷古して歌つた作であるとして、略左註の儘を信じてゐる。然し考には、此の歌は持統天皇の十年に高市皇子尊が薨去遊ばされて後、香具山宮がさびれたので、其の荒涼たる有樣を詠んだのであるとし、此の左註を誤と見て削除してゐる。集中の左註には、往々にして後世の人が加へたものがあつて、信じ難い場合が尠くない。此の歌

も奈良遷都卽ち和銅三年以後の作とは見難いのであつて、前後の歌の製作時代を對照して見ると、寧ろ藤原朝の作と見るべきであるから、(『國語國文の研究』第四十號所載澤瀉氏の「詞章研究」參照)考の說に從ふべきものと思はれる。

さて此の歌は冒頭の四句に、神代以來悠久に聳えてゐる天の香具山に、昔の儘の春が訪づれて來た事を歌ひ、「松風に」以下の四句には、長閑ではあるが冥想的な春の池の情景を敍して、懷古的氣分を歌ふ前提としてゐる。而して「沖邊には」以下四句に、其の池の面に群れ遊ぶ水禽の樣を動的に寫したのは、最後の七句に歌つた、靜寂にして物古りた情景と巧妙な對照をなしてゐる。かくて「百磯城の」以下七句は此の作の眼目であつて、作者は岸に引き上げられてゐる捨小舟を凝視しながら、嘗て大宮人が船遊を催した華やかであつた過去と、現在の荒涼たる光景とを比較して、懷舊の情に堪へられないでゐる事を歌つてゐる。尤も此の作者は直接懷古の情を歌つてゐるのではなく、敍景の中に氣分感情を漂はしてゐるのである。從つて此の歌は、人麻呂が近江の荒都に立つて歌つた作(二九)と恰好の對照をなしてゐる。卽ち人麻呂のかの作が、敍事的抒情詩であるのに對して、是は敍景的抒情詩となつてゐるのであつて、兩歌人の特徵の相違を明白に示してゐるのである。此の作者の特色は、なほ次の反歌二首にも表れてゐる。

反歌二首

二五八　人榜がず　在らくも著し　潛きする　鴛鴦と鵠と　船の上に住む

人不榜有雲知之潛鴛與高部共船上住

【釋】○在らくも著し　「在らく」は「在る」に語尾の「く」を添へて體言の資格に轉じたもので、在ることの意。「しるし」は「いちじるし」(いとしるしの意)の「しるし」と同じであつて、名詞の「標」「驗」や動詞の「記す」等と同系統の語である。「しるし」は顯著なり又は明白なりの意。○潛きする　潛く所のといふ意。「潛く」は水中に潛ること。○鴛鴦と鵠と　「をし」は今「をしどり」と云ふ。和名抄に「崔豹古今注云、鴛鴦和名乎之雌雄未嘗相離人得其一則其一思而死、故名匹鳥也。」とある。又「たかべ」は和名抄に「爾雅集注云、鵠漢語抄云多加倍一名沈鳧、貌似鴨而小、脊上有文。」とある通り、雄は背に美しい文彩がある。今俗に小鴨と云ふが、奥州ではなほ「たかぶ」と云ひ、關東關西では「たかべ」と呼んでゐる。

【譯】近頃はあの船を人が漕ぐ事もなくなつた事がよく判る。水中を潛る鴛鴦と鵠とが、共に船の上に棲んでゐるから。

【評】長歌に取扱つた捨小舟を中心に、あたりの物淋しさを歌つたのである。卽ち水中を潛つて盛に活動してゐた水禽が、今しも舟の上につくねんと止つてゐる情景を捉へて、周圍の寂寞を想像せしめた手法は、極めて效果的であると言つてよい。尤も此の歌の表現は說明的であり、格調も散文的であつて、內容にふさはしくないのは缺點である。

二五九　何時の間も　神さびけるか　香具山の　鉾榁が本に　苔生すまでに

何時間毛神佐備祁留鹿香山之鉾榁之本爾蒙生左右二

右今案、遷二都寧樂一之後、恰レ舊作二此歌一歟。

【釋】○何時の間も　「何時間毛」を流布本にイツシカモと訓んでゐるが、代匠記精撰本にイツノマモと訓んだのが穏かである。何時の間にの意。「も」は感動助詞。第二句の終の「か」も感動を表す助詞である。○鉾椙が本に　此の句を代匠記にホコスギガモトニ、考に「木」を「末」の誤としてホコスギガウレニ、古義にホコスギノモトニと訓んでゐる。今は代匠記に從ふ。なほ原文の「椙」は元來は類聚古集・神田本に「榲」とあるのが正字であるが、我が國では古くから通用せられてゐる。「椙」は直の義であつて、其の形が鉾を立てたやうに見えるので、「鉾椙」と云つたのである。「木」を幹とする說があるが、集中の用例によれば是も根本を云ふ。○苔生すまでに　「こけ」を考槻落葉攷證等に松蘿卽ち「ひかげのかづら」であると云つてゐるが、「こけ」は木毛の義で普通の苔を云ふ。此の句は初の二句に立歸つて敍述を完うしてゐる。

【譯】何時の間にまあこんなに神々しく物古りた有樣になつてしまつたのであらう。香具山の鉾杉の根元に青い苔が生すまでに。

【評】香具山に茂つてゐる樹木の中で、特に亭々と生ひ立つてゐる鉾杉を眺め、次いで其の根元一面に生えてゐる青苔を見て、時の經過をしみ〴〵と感じた作である。これも亦裏面に、懷古の情を籠めてゐる事は言ふまでもない。序に一言して置く。右に講じた長歌及び第一の反歌に、四種の水鳥を歌つてゐるのを見ても、當時の帝都附近が極めて平和にして靜寂な天地であつた事が想像せられる。又右の長歌に、香具山の松の間々に櫻花が咲き滿ちた光景を歌ひ、更に此の反歌に鉾立する杉を歌つてゐるのを見ると、萬葉歌人の目に映じた香具山は、今日と全く異なつた姿であつた事が想像せられる。凡そ萬葉時代の作品を味はふに當つては、彼等の敍景歌を通して、

柿本朝臣人麻呂從二近江國一上來時、至二宇治河邊一作歌一首

二六四　もののふの　八十氏河の　網代木に　いさよふ波の　行方知らずも
物　乃部能　八十氏河乃　阿白木爾　不知代經浪乃　去邊白　不母

【釋】○もののふの　「八十氏」の枕詞。（既出）○八十氏河の　初句から此の句の「八十」までは、宇治河のウヂを導き出す爲の序となつてゐる。〔五〇〕參照。○網代木に　網代は急流の河瀨に杙を並べて打ち込み、それを力にして水中に簀を張り渡し、其の簀に流れ掛つた魚を、夜間に簀火を焚いて捕る仕掛のものである。其の杙を「網代木」と云ふ。此處に「網代」と言はずして「網代木」と言つたのは、杙の所が特に波立つからである。宇治河の網代は、冬期に琵琶湖特產の氷魚を捕る爲に設けられたのであつて、此の事は延喜內膳式に「山城國・近江國、氷魚、網代各一處、其氷魚始二九月一迄二十二月三十日一貢レ之。」とあるのによつて知られる。（此の氷魚の網代は弘安七年に停止せられた。）宇治河の網代を歌つた作には「宇治河は淀瀨無からし網代人舟呼ばふ聲をちこち聞ゆ」（一一三五）がある。○いさよふ波の　「いさよふ」は行きあへずして暫しためらふのを云ふ。ここは水が網代に堰かれて暫くためらふこと。○行方知らずも　これと同じ結尾句の用例は前に講じた〔一六七〕にもあるが、意味は異なつてゐる。水がやがて流れ去つて、其の行方が分らなくなることよの意。

【譯】宇治河の網代木に堰かれて暫したゆたふ波が、やがて流れ去つて行方知れずなるのは、まことにはかない事である。

【評】代匠記以下諸註に、此の作を逝く河の水に寄せて、人生の無常を歌つたものであると解釋してゐるが、古義は之に反對して、只實景を歌つたのみで寓意は無いと云つてゐる。思ふに此の歌の結句の「行方知らずも」には、深い詠歎の氣持が集注されて居り、又題詞に據れば、近江の荒都を見ての歸途の作と考へられ、而も作者は多感な性格の人であるから、單なる敍景の作とは考へられない。且又卷七の人麻呂歌集所出の作に「卷向の山邊とよみて行く水の水沫のごとし世の人吾は」(一二六九)といふ無常觀を詠じた作のある事を考へ合せるならば、此の作はやはり世の無常を詠じた歌とすべきである。然しそれは佛教思想などの外來思想の影響ではなくして、人麻呂の個性に基づくものである。卷七の作者不明の歌に、「大伴の三津の濱邊をうち曝し寄り來る浪の行方知らずも」(一一五二)とあるのは、人麻呂の此の作に基づいたのではなからうか。

長忌寸奥麻呂歌一首

(二六五) 苦しくも　降り來る雨か　三輪が埼　狹野の渡に　家もあらなくに
苦毛　零來雨可　神之埼　狹野乃渡爾　家裳不有國

【釋】○長忌寸奥麻呂　傳未詳。(前出)○降り來る雨か　「か」は感動助詞。○三輪が埼狹野の渡に　「神之埼」を流布本にミワノサキ、童蒙抄にカミノサキと訓んでゐるが、略解にミワガサキと訓んだのがよい。「三輪が埼」は紀伊國東牟婁郡(紀伊半島の南部に當る)の今の三輪崎町である。(二六六頁地圖參照)「狹野」は今の三輪崎町大字佐野に當る。大字三輪崎と佐野は、共に佐野灣に臨む地であつて、十數町を距てゐる。さて「わたり」を『萬葉集私解』に邊の意と解いてあるのは誤である。邊を「わたり」と云つた例は平安朝の物語には見えるが、上古には確證がない。集中に見える「わたり」は「宇治の渡のたぎつ瀨を見つつ渡りて」(三二四〇)の如く、總て「渡」即ち渡し場である。諸註に佐野附近を流れる川の渡しであると云つてゐるが、一說には往時は深く灣入してゐた岸に沿うて迂回する不便を避けて、佐農の岡から三輪崎へ灣を渡つた、其の渡しであつたであらうと云ふ。(日比野道男氏著『萬葉地理研究』紀伊篇『參照)○家もあらなくに　家もあらぬことなるに、即ち家も無いのにといふ意。

【譯】困つたことにもひどく降つて來た雨だ。三輪が埼の狹野の渡し場には、雨宿りする家もありはしないのに。

【評】最初の二句に、急に雨に降られて當惑した、旅行中の作者の感情を率直に表現したのが、極めて力强く實感的に響いて來る。次いで第三第四句に、今旅行してゐる土地を敍べて、最後の一句を八音の字餘り句で結んだのも、困惑の情をよく表してゐる。此の歌を本歌にして、鎌倉時代の代表歌人定家が詠んだ「駒とめて袖うちはらふ蔭もなし佐野のわたりの雪の夕暮」(新古今卷六)と右に講じた作とは、新古今と萬葉の歌風の一特質をそれぞれ代表してゐる。定家の作は素材が豐富であるにも拘らず、智巧的且作爲的な痕があるのに比して、萬葉のは素朴ではあるが、實感が流露してゐる事は、最も著しい相違である。なほ奥麻呂の作と相似た趣を詠んだ例には、舍人娘子雪歌「大口の眞神の原に降る雪はいたくな降りそ家もあらなくに」(一六三六)がある。

柿本朝臣人麻呂歌一首

(二六六) 淡海の海　夕浪千鳥　汝が鳴けば　心もしぬに　古思ほゆ
淡海乃海　夕浪千鳥　汝鳴者　情毛思努爾　古所念

【釋】○淡海の海　假名書の例に「阿布彌能彌」(神功皇后紀)とある。琵琶湖を云ふ。○夕浪千鳥　夕日の赤く照ら

してゐる波の上を、千鳥が飛び交ひ鳴いてゐる光景を、簡單に表現した人麻呂の新造語である。恐らく漢詩の影響を受けた造語であらう。千鳥は河海の水邊にゐる涉禽類に屬する小鳥で、嘴は蒼黑、背は青黑で腹は白い。○汝が鳴けば　「な」は上古に用ゐられた第二人稱の代名詞であつて、これに接尾語の「れ」を添へたのが「なれ」である。用例には「奈が名告らさね」(八〇〇)「奈が戀ふる」(四〇一一)「那は言ふとも」(神代記)「我が那勢の命」(同上)などがある。○心もしぬに　「しぬに」の用例には「秋の穗を之努爾押し靡べ置く露の」(二二五六)「心も之努爾君をしぞ思ふ」(四五〇〇)などがある。「しぬに」は既に述べた通り、「しなゆ」「しなふ」(撓)「しなぶ」(萎)「しぬぶ」(忍)「しぬぐ」(凌)などと關係のある語で、伏し靡いての意を表す副詞である。一句の意は心も愁ひしをれて。○古思ほゆ　天智天皇の御代に此所が大津宮であつた當時を懷古して、「古」と云つたのである。

千鳥

【譯】近江の湖水の、夕陽に赤く染まつた波の上を飛び交ふ千鳥よ、お前がそんなに鳴くのを聞くと、心も愁ひ沈んで昔の事が偲ばれてならない。

【評】夕映する湖上に千鳥の群れ飛ぶ靜寂な情景を二句に纏めた伎倆と、「夕浪千鳥」の巧妙な新造語とが先づ驚歎に値する。第三句以下は此の印象の鮮かな敍景を承けて、淋しく哀れな聲で鳴く千鳥に呼び掛けて、懷古の情の抑へ難さを沁み〴〵と訴へてゐる所に、多感な人麻呂の心境があり〳〵と窺はれる。此の歌を讀み味はつてゐると、湖畔に孤影を引いて立つ作者の姿が、はつきり思ひ浮べられるのであるが、再びこれを徐ろに口誦して見ると、作者の詠歎の聲を直接耳に感ずるのである。卽ち一首の上にナ行音とマ行音が頻繁に織り込まれてゐるので、調子が流麗であり、更に、上二句の悠揚迫らざる聲調から、第三句以下の母音のア・オ・イの連續による太い詠歎的な調に流れて行く所に、言ふべからざる格調の妙味がある。要するに此の作品は、敍景的抒情歌を得意とした人麻呂の歌風を代表するばかりでなく、萬葉調が有する殆どあらゆる長所を、一首に兼ね備へてゐるものと言へるであらう。

高市連黑人羇旅歌六首（○原八首の中）

一七〇　旅にして　物戀しきに　山下の　赤のそほ船　沖に榜ぐ見ゆ
客爲而　物戀敷　爾　山下　赤乃曾保船　奥　榜　所見

【釋】○高市連黑人　前出(五八)參照。○旅にして　旅にありての意。同樣の例は「家二四手」(六三四)「此處御思天」(三五三八)等幾らもある。○物戀しきに　流布本の訓にモノコヒシキニとあるが、古義にモノコホシキニと訓んだのに從ふ。(二五三)の「心戀しき」と同樣に、「もの」のオの母音がヒの母音を同化したのである。「物戀し」は何となく戀しく感ずるのを云ふ。○山下の　流布本の訓にヤマモトノとあるが、槻落葉にヤマシタノと訓んだのが妥當である。小琴に此の句を「赤」の枕詞であるとして下のやうに說明してゐる。――語義は「山したび赤」と續くのであつて、「したび」は古事記の「秋山之下氷壯夫」「秋山の舌日が下に」等の「したび」と同じく紅葉の意であつて、(既出の「したべる妹」參照)集中の「あしびきの山下光る黃葉の」(三七〇〇)「巖には山下耀り錦なす花咲きをり」(一〇五三)等の「山下」の「した」も赤の意に解すべきである。――と解いてゐる。宣長以後注意すべき異說が現れてゐないので、今も此の說が引用せられてゐるやうである。思ふに「山下の」の「した」は、「したび」とは關係

の無い語であり、又「山下光る」の「山下」とも稍趣を異にして、文字通り山の下卽ち山裾を指したものであらう。山の麓はとかく地崩れの爲に、赤い地肌が露出してゐるものであるから、「赤」或は「赤のそほ」を聯想して、其の修飾語的枕詞に置いたのであらうと思はれる。○赤のそほ船　「赤」は、「赤し」の語幹の「あか」が轉訛した名詞である。「そほ」は赭卽ち赤色の土をいふ。一に「そほに」或は「まそほ」とも云つた。「まそほ」の用例には「眞金吹く丹生の麻曾保の色に出て」(三五六〇)がある。さて赭は上古では塗料に用ゐられたのであつて、「そほ船」は赤土を塗つた所謂丹塗りの船である。集中に「さ丹塗りの小船」(一五二〇)「赤ら小船」(三八六八)などと歌はれてゐるのが、是と同じものである。さて槻落葉別記の考證に據れば、上古に於ては官私の船を彩色によつて區別したのであつて、官船は朱塗りとし、流罪の人を乘せる船は黃色に塗つたのであらうと云ふ。又吉田東伍博士の『日本文明史話』によれば、赤く塗り立てる目的の外に、小さい孔や隙間を塞ぐ爲にも、塗り込めたのであらうと云ふ。

○沖に榜ぐ見ゆ　攷證にオキベコグミユ、新考にオキヲコグミユと訓んでゐるが、今は流布本の訓に從つた。

【譯】旅に出てゐて何がなしに戀しく思はれる折から、京へ通ふ朱塗りの船が、沖の方を漕いで通るのが見える。

【評】青々とした海原に丹塗りの船の浮んでゐるのは、如何にも印象の鮮かな繪畫的光景である。旅愁に堪へかねてゐる折から、都へ通ふ船を眺めて羨ましく又なつかしく感じたのである。一首にナ行音とサ行音が比較的多く響くので、聲調が流麗である。

三七　櫻田へ　鶴鳴き渡る　年魚市潟　潮干にけらし　鶴鳴き渡る

櫻田部　鶴鳴渡　年魚市方　鹽干二家良之　鶴鳴渡

【釋】○櫻田へ　「櫻」は地名で、和名抄に「尾張國愛智郡作良」とある所である。今名古屋市南區笠寺町(熱田神宮の東南方三十町)に「櫻」なる字が遺つてゐる。「櫻田」は作良の地の田を云ふ。○年魚市潟　「年魚市」は「吾湯市村」(神代紀)ともある通り、古くはアユチと言つたのである。和名抄に「尾張國愛智(阿伊智)」とある地で、今も「愛知」は縣名及び郡名として遺つてゐる。年魚市潟の址は、今の鳴海町邊から西の熱田前新田(櫻の西方一里餘町)にかけての、名古屋港に臨む地域一帶に當る。今は此の邊一帶は田圃になつてゐる。更級日記に愛智潟を通過する時の事を「尾張の國鳴海の浦を過ぐるに、夕潮ただ滿ちに滿ちて、今宵やどらむも中間に、潮滿ち來なばここをも過ぎしと、ある限り走りまどひ過ぎぬ。」と記してゐる。これを見ると、奈良朝頃の旅人が滿潮の年魚市潟を通り過ぎる時にも、更級日記の作者及び其の一行と同じやうに、走りながら渡つた事が判る。○潮干にけらし　原文の「之」は流布本に「進」とあるが、今は類聚古集古葉略類聚鈔・神田本等に據つて改めた。「にけらし」は「にけるらし」の約言で、「にける」は過去完了の助動詞。潮が干てしまつたものと思はれるの意。○鶴鳴き渡る　鶴は櫻の田の方を指して行くのであるが、新考の說の通り、其の下りる先は愛智潟である。鶴は潮干時に潟に下りて餌を求める習性がある。私見によれば、此の作者はまだ潮の引いてゐない頃に愛智潟を走り渡り、やがて櫻の地を通過して、今は更に其の東方に來て居るのである。而して此の歌は、東へ向つて旅を續けて居る作者が、自分とは反對に西へ飛んで行く鶴の群を見て、先刻渡つた愛智潟が、今頃潮干になつてゐるものと想像して詠んだのであらうと思ふ。

【譯】櫻の田の方を指して鶴が鳴きながら飛んで行く。して見ると愛智潟は、もう潮が干でしまつたものと思はれ

る。鶴があんなに頻りに鳴いて通る。

【評】短歌の古格によつて第二句の「鶴鳴き渡る」を結句に繰返してあるので、鶴が群をなして頻りに翔り行く光景が、眼前に浮んで來るやうに感じられる。仰いで大空を見、遠く眼を放つて櫻の田の面を望んで、其の廣い眼界を鳴き渡る鶴の動きを中心に歌ひ、更に鶴の下りる地にまで想像を馳せて歌つてゐるので、場面の擴がりが極めて大きく感じられる。のみならず釋の條下に述べたやうに、此の歌の言外には、愛智潟を渡り櫻を通過して、今其の東まで來て居る旅中の作者の動きが窺はれ、又愛智潟の潮が干た事を想像してゐるのによつて、時間の經過も現れて來るのである。要するに此の歌の内容は、空間的にも時間的にも大きな擴がりがあるのであつて、一首の趣はかなり興味の深いものがある。なほ音調の上では、全體に夕行音やカ行音が頻繁に現れてゐて、爽かな快い調を成してゐる。

(七)　四極山　うち越え見れば　笠縫の　島榜ぎ隱る　棚無小舟

四極山　打越見者　笠縫之　島榜隱　棚無小舟

【釋】○四極山　此の山の所在地に就いては兩説がある。(イ)契沖の『勝地吐懷篇』に敍べた説に據れば、和名抄に「三河國幡豆郡磯泊之波」とある磯泊郷の山であらうと云ふ。其の根據は、高市連黑人の羇旅歌八首の中、此の歌の前に尾張國の歌があり、後に近江國の歌があるからである。(槻落葉攷證・檜嬬手・大日本地名辭書等同説)(ロ)是に對して考及び古事記傳・玉勝間等には、雄略天皇紀十四年正月の條に「泊三於住吉津一、是月爲三吳客道一、通三磯齒津路一、名三吳坂一。」とあるのに基づいて、住吉から東方の喜連に行く途中に在る低い岡が吳坂卽ち四極山であるとし、「喜連」は「吳」の轉訛であると云つてゐる。(略解・古義・新考等は此の説に贊同して居る。喜連町は大阪市住吉區に屬し、此の邊は今平地になつてゐる。)「四極」は集中に「茅渟回より雨ぞ降り來る四八津の海人網手網乾せり」(九九九)とも歌はれてゐて、其の左註に「右一首遊三覽住吉濱一還レ宮時云々」とあるから、上古に於ては今の住吉區邊を指したのであらうと思はれる。從つて四極山は後説に據つて、攝津に在つたものとすべきであらう。○笠縫の島　四極山を三河國と見る説では、此の島を磯泊郷の沖合(卽ち渥美灣)に在る島であるとしてゐる。然し攝津説に據れば下の如くである。――笠縫の島は古笠縫氏の人が住んだ島で、笠縫氏は延喜内匠寮式に「御輿・中子・菅蓋一具菅並骨料、材從三攝津國一、笠縫氏參來作。」とある通り、笠縫を業としたのである。而して東生郡深江村は古來菅の產を以て知られた所で、此の地は古くは島であつて、邊一面は沼澤であつたと傳へてゐるから、笠縫島は卽ち深江村に當る。――と云ふのである。此の説に從ふべきであらう。さて深江村は今の大阪市東成區深江町であつて、大阪城の東南三十町餘の地である。○棚無小舟　卽出(五八)參照。上の句に立戻つて、棚無小舟が島蔭に漕ぎ隱れるのが見える、と云ふ意である。

【譯】四極山を打ち越えて見ると、彼方の笠縫島の島蔭に漕ぎ隱れて行く柂も無い小舟が見える。

【評】此の作は、同じく高市連黑人が棚無小舟を詠んだ卷一の歌(五八)と略同樣の情景を歌つたものであつて、此の作にも島蔭に漕ぎ隱れて行く賴りなささうな小舟を見送つて、旅人の寂しさ心細さを感じた時の作者の主觀が窺はれる。此の歌は古今集卷二十の大歌所御歌の中に「しはつ山ぶり」と題して收められてある。尤も歌詞には多少の異同があつて、「しはつ山うち出でて見れば笠ゆひの島こぎかくる棚なし小舟」と歌ひ變へてある。

二七三　磯の崎　榜ぎ廻み行けば　近江の海　八十の湊に　鵠さはに鳴く
磯前　榜手回行者　近江海　八十之湊爾　鵠佐波二鳴

【釋】○磯の崎　原文の「磯前」を流布本にイソサキヲと訓んでゐるが、考にイソノサキと改めたのが妥當である。略解にはこれを地名と見て、近江國坂田郡にある磯崎村といふ湊（今の彦根町の北、入江村大字磯の地に當る）であると云つてゐる。（檜嬬手・地名辭書同說）然し攷證には「磯の崎」は、「打ち見る島の埼々かき見る伊蘇能佐岐落ちず」（神代記）「著き給はむ島の埼々依り給はむ磯乃埼前」（一〇二〇）などに於ける用例と同じく、磯の前の義であると云つてゐる。攷證の說に從ふべきである。卽ち岩石の突出した岬を云ふ。○榜ぎ廻み行けば　漕き廻つて行くとの意。「榜ぎ廻む」は前出。（五八）參照。○八十の湊に　略解・檜嬬手には之を地名と見て、八坂村（今の犬上郡磯田村大字八坂に當る）は卽ち其の轉訛であると云つてゐる。併しこれも「近江の海泊八十あり八十島の島の埼埼」（三三三九）などと同類で、數多くの湊を指したものと見るべきである。「湊」は「水門」の義で、河口若しくは陸地が兩方から突出して江灣を成してゐる處を云ふ。○鵠さはに鳴く　原文の「鵠」は元來「くぐひ」卽ち白鳥を指す文字である。代匠記に據れば『五雜俎』に「鵠卽是鶴」とあつて、支那でも「鵠」と「鶴」は通じて用ゐた文字であると云ふ。ここも「鵠」はタヅと訓んで、鶴を指したものとすべきである。

【譯】磯の岬を漕ぎ廻つて行くと、近江の湖水の諸處方々の湊に、鶴が澤山に鳴いてゐるのが聞える。

【評】此の歌は上の二句に、磯の岬を漕ぎ廻る自己の移動を歌ひ、次の二句に至つて、忽ち眼前に展開せられた湖上の全景を敍し、更に結尾句に群れ鳴く鶴を點出して、一首の上に爽快な氣分を漂はせてゐる。斯くの如く作者の實際經驗を率直に表現した作は、當時の羇旅の歌の中に類例が極めて多いのであつて、萬葉集の敍景に於ける一特色となつて居る。

二七四　吾が船は　比良の湊に　榜ぎ泊てむ　沖へな放り　さ夜ふけにけり
吾船者　枚乃湖爾　榜將泊　奥部莫避　左夜深去來

【釋】○比良の湊に　「比良」は流布本の本文に「牧」と記してあるが、類聚古集・古葉略類聚鈔等に「枚」とあるのに據つて改めた。比良は琵琶湖の西岸、比良山の麓の古い地名であつて、今は滋賀郡小松村及び木戸村に屬してゐる。○沖へな放り　「奥部莫避」を流布本にオキヘナユキソ、童蒙抄にオギヘナサケソと訓んでゐるが、今は代匠記の訓に從つた。沖の方へ離れるなといふ意。

【譯】吾々の船は今夜は比良の湊に漕ぎ著けて泊ることにしよう。餘り沖の方へ離れないでくれ。あゝもう夜もずゐぶん更けた。

【評】此の歌は作者が、舟を漕いでゐる水夫に言つた言葉の儘を歌つたやうな形式になつてゐて、夜更けの湖上を漕ぎ行く舟人の心細さがよく現れてゐる。卷七に見える「吾が舟は明石の湊に榜ぎ泊てむ沖へな放りさ夜更けにけり」（一二三九）と此の歌とは、詞句の類似が著しいから、何等かの關係があるものと思はれる。原本には此の歌の次に「何處にか吾は宿らむ高島の勝野の原に此の日暮れなば」（二七五）がある。

二七六　妹も我も　一つなれかも　三河なる　二見の道ゆ　別れかねつる
妹母我母　一有加母　三河有　二見自道　別不勝鶴

【釋】○一つなれかも　「一有加母」を流布本にヒトツナルカモ、攷證にヒトリナレカモと訓んでゐるが、槻落葉にヒトツナレカモと訓んだのが妥當である。「か」は疑問の係助詞で、最後の句の「つる」が結である。一句の意は一つなればかもと同じで、妻と自分とは一體であるからであらうかの意。攷證に別れては互に一人となるからであらうか、と解釋したのは妥當でない。○三河なる二見の道ゆ　三河國には「二見」といふ地名は無い。益軒の『吾妻路之記』及び新考の説に據れば、三河國から遠江國へ行くのに兩つの道筋があつて、一は御油町から豐橋・二川・白須賀・新居・舞坂を經て濱松に出る東海道筋で、他の一は御油町から本野原・嵩山・本坂越・氣賀・三方ヶ原の順序に、濱名湖の北を周つて濱松に出る山道である。前者には途中今切（濱名湖の湖口）の險があるので、女子は後者によつた爲、之を姫海道と云ふとある。而して此の歌に「二見の道」とあるのは、此の兩道を併稱したもので、黒人は東海道筋を行き、妻は姫海道を行つたのである。「ゆ」は……を通つての意。

【譯】妻と自分とは一體であるからであらうか、三河國の二見の道を通つて、別れ〳〵になるのが辛いことである。

【評】二句三句四句の頭に、「一つ」「三河」「二見」と數字が緣語的に用ゐてあるのが面白い。此の歌の次に一本云として「三河の二見の道ゆ別れなば吾が背も吾も一人かも行かむ」とあるのは、恐らく黒人の妻が此の作に和したものであらう。

春日藏首老歌一首

二八四　燒津邊に　吾が行きしかば　駿河なる　阿倍の市道に　逢ひし兒らはも

燒津邊　吾去鹿齒　駿河奈流　阿倍乃市道爾　相之兒等羽裳

【釋】○春日藏首老　此の人に就いては（五六）に説明した。○燒津邊に　「燒津」は流布本の訓にヤイツとあるが、考にヤキツと訓んだのがよい。今ヤイヅと云ふのはヤキツの音便である。燒津（古事記には「燒遣」とある）は今の駿河國志太郡燒津町で、靜岡市の西南三里餘の駿河灣に臨んだ漁港である。日本武尊が野火攻にお遇ひになつた地として、記紀の古傳説上著名な地である。燒津町には尊を祀れる燒津神社が在る。○吾が行きしかば　此の「ば」も此處では順接の條件を表すのではなく、前に講じた（一五三）の「思へれば」の「ば」と同じく、輕い接續助詞である。私が行つた時にの意。○阿倍の市道に　「阿倍」は今も「阿倍郡」「阿倍河」等の名に遺つてゐる。阿倍河の東畔に在る府中（現在の靜岡市）は、古駿河國府の置かれた地で、卽ち上古の阿倍の市に當る。「市道」は市へ通ふ道。○逢ひし兒らはも　「兒ら」は女子を親しんで云ふ語。次の「はも」は（一七一）で述べた通り、「は」は係助詞、「も」は感動助詞であつて、體言に添へて終止した場合には、深い感動詠歎の意を表す。逢つたあの女はまあどうしてゐるであらうかと云ふ意。

【譯】燒津地方へ自分が行つた時、駿河の阿倍の市へ行く道で逢つたあの美しい少女は、其の後どうしてゐる事であらう。

【評】旅路に在つて阿倍の市の雜閙した巷で、只一目見た少女の面影を、今髣髴として眼前に想ひ浮べて、此の歌を詠んだのである。內容は至つて單純であるが、純眞なる感情が結句の「逢ひし兒らはも」に集注せられてゐて、讀者に深い感動を與へる。卷十一の「うちひさす宮道に逢ひし人妻故に玉の緒の思ひ亂れて寢る夜しぞ多き」（二三六五）と略相似た想を詠んだ作である。

幸二志賀一時石上卿作歌一首　名闕

二八七　此處にして　家やも何處　白雲の　棚引く山を　越えて來にけり
此間　爲而　家八方何處　白雲乃　棚引　山乎　超　而來二家里

【釋】○幸二志賀一時石上卿作歌　志賀への行幸は何時の事であるか、又作者は誰であるか明確でない。これに就いて槻落葉・檜嬬手・攷證等には、續日本紀の大寶二年冬十月の條に、太上天皇（持統天皇）が參河國への行幸の時、尾張・美濃・伊勢・伊賀の諸國を經て、十二月に還幸になつた事が記されてゐるので、此の時近江へも行幸になつたのであらうとし、作者を石上麻呂公であらうと推定してゐる。然るに古義には、續日本紀元正天皇の養老元年九月の條に、「丁未天皇行二幸美濃國一、戊申行至二近江國一、觀二望淡海一（中略）甲寅至二美濃國一（下略）」とある時の作であらうとし、麻呂公は養老元年三月に薨じたのであるから、作者は麻呂の子乙麻呂卿であると云つて居る。蓋し續紀大寶二年の行幸の條には、近江へ行幸のあつた事は記されてゐないが、養老元年の條には明記があるから、古義の說に從ふべきである。乙麻呂は左大臣麻呂の子であつて、續日本紀に據れば天平四年丹波守となり、同十年從四位下となり左大辨となつたが、十一年久米連若賣に奸けて土佐國に配流された。其の後天平十三年の大赦に赦されたらしく、十六年に西海道巡察使、十八年に治部卿續いて常陸守を拜し、天平勝寶元年從三位中務卿となり、同二年九月中納言兼中務卿で薨じた。歌は集中に數首を傳へ、詩は懷風藻に收められてゐる。

○此處にして　此の句を槻落葉にココニキテと訓んだのは妥當を缺く。「にして」は前の「旅にして」のそれと同じである。此處にありての義。○家やも何處　「家」は都の我が家を云ふ。「やも」の「や」は疑問の係助詞であつて、結としての「ならむ」が「何處」の下にあるべきのが省かれてゐる。原文の「何處」は流布本の訓にイツコとあるが、假名書の例に「伊豆久」とあるから、槻落葉にイヅクと訓んだのが妥當である。

【譯】此處に來て見ると、我が家は一體何處らに當るであらうか。思へばあの白雲のたなびいてゐる山を越えて、遙々と來たことである。

【評】日數を重ね幾多の山河を越えて遠く近江に旅行した作者が、大和の方角を振り返つて、故郷の懷かしさをしみ〴〵歌つた作である。「白雲の棚引く山」の句によつて、作者の心細さ淋しさを印象的に表現してゐるのが巧妙である。後に講ずる大伴旅人の歌「此處に在りて筑紫や何處白雲の棚引く山の方にしあるらし」（五七四）は、此の歌を本歌にして歌つたものと思はれる。

間人宿禰大浦初月歌一首（○原二首の中）

二八九　天の原　振り放け見れば　白眞弓　張りて懸けたり　夜路は吉けむ
天原　振離見者　白眞弓　張而懸有　夜路者將吉

【釋】○間人宿禰大浦　傳未詳。流布本には題詞の下に「大浦紀氏見六帖」の七字があるが、これは「大浦見二紀氏六帖一」の誤である。後人の加へた註であつて、類聚古集・神田本其の他には無いから今は省いた。○白眞弓　漆を塗らない白木の弓を云ふ。「眞弓」を古義に檀の木で造つた弓であると云つてゐるが、是は只弓のことで、「眞」は美稱の接頭語と見るべきである。○張りて懸けたり　原文の「懸有」を流布本にカケタル、代匠記の一訓にカケタリ、童蒙抄にカカレルと訓んでゐる。今は代匠記の訓に從つて解く。○夜路は吉けむ　原文の「將吉」は一本に「將

去」とあり、京大本に之をユカムと訓んである。槻落葉古義等は一本に據り、前者にはユカナ、後者にはユカムと訓んである。今は流布本の本文及び訓に從ふ。「吉けむ」の「吉け」は「吉し」の未然形に當る古い活用形である。因みに「よし」を古くは「えし」とも云つたのであつて、日本書紀の歌謠に「何の傳言直にし曳雞武（つてごとただ　エケム）」（天智天皇紀）とある。此の「えけ」は「よけ」と同じ語形である。「吉けむ」はよからむの義。

【譯】大空を遙かに仰いで見ると、白木の弓を張つて懸けたやうな三日月が出てゐる。今宵夜道を歩くのはさぞ面白いであらう。

【評】廣々とした大空の一角に、銀色の弓張月が懸つてゐるのを見て歌つたのである。「白眞弓張りて懸けたり」の譬喩的表現は、如何にも上代人に相應しい巧みな著想である。最後の一句に、三日月に打興じた輕快な氣持が現れてゐる。古義に此の歌を「天の原に白眞弓を張りて懸けたれば、いかなる夜路をゆくとも、賊徒妖物などのおそれはあらじ、いざ夜路は行かむ」と解釋してゐるのは甚だしい誤解である。

田口益人大夫任二上野國司一時至二駿河淨見埼一作歌二首

二九六　盧原（いほはら）の清見が埼の見穂（みほ）の浦の寛（ゆた）けき見つつ物思（もの）ひもなし

盧原乃　清見之埼乃　見穂乃浦乃　寛　見乍　物念　毛奈信

【釋】○田口益人　續日本紀に據れば、文武天皇の慶雲元年に從五位下を授けられ、元明天皇の和銅元年三月に上野守となり、同二年十一月に右兵衛率となり、元正天皇の靈龜元年に正五位上を授けられた。○盧原の　「盧原」は和名抄に「駿河國盧原郡盧原（伊保波良）」とある地である。今は「庵原」と記しイハラと云つてゐる。和名抄に謂ふ盧原鄕は今の庵原郡庵原村を始め、袖師村・飯田村・江尻町邊を云つたのである。○清見が埼の　今の興津町の西端大字清見寺（せいけん）の磯の埼をいふ。三保の砂嘴眞崎と相對してゐる。作者は清見が埼に立つて、其處から清水灣を距てて南方の三保の浦を望んでゐるのである。新考に「埼の」の「の」は、「ゆ」の誤であらうと云はれたのは道理ある說である。○見穂の浦の　「見穂」は今「三保」と記す。「見穂の浦」は今の清水港の舊名で、三保の松原の砂嘴と、清水市とに抱かれた清水灣を指す。○寛けき見つつ　「寛見乍」を流布本にユタニミエツツと訓んでゐるが、槻落葉にユタケキミツツと訓んだのが妥當である。「海原の由多氣伎（ユタケキ）見つつ」（四三六二）の用例がある。「ゆたけき」は形容詞の「ゆたけし」の連體形。「ゆたけし」は「ゆたか」（豐）と關係のある語で、此の「ゆた」は「ゆたに」「たゆたふ」等の語根と同じである。「寛けし」は廣々としてゆつたりとした樣を云ふ。

【譯】盧原の清見が埼に立つて、三保の浦のゆつたりとした長閑な景色を眺めてゐると、旅の憂さも忘れて何の物思ひも無くなることである。

【評】任國の上野へは前途たほ遠い駿河路を、濱邊傳ひに辿つて行く途次、興津の海岸から三保の松原へかけての白砂青松の長汀を望み見て、旅の疲れも憂さも打忘れて詠んだ歌である。第四句までに助詞の「の」を反復して一直線に歌つて來て、結尾句に言ひ放つたやうな「物思ひもなし」の一句を据ゑた一首の格調は、悠揚として迫らぬ感じがする。

二九七　畫見（ひるみ）れど飽（あ）かぬ田兒の浦大君の命（おほきみ）かしこみ夜見（よるみ）つるかも

畫見　騰　不　飽田兒　浦　大王之　命恐　夜見鶴　鴨

【釋】○書見れど　「見れど」と已然形で歌つてあるが、實際は「見るとも」の意である。これと同類の例には、〔一〇六〕に「二人行けど」がある。○飽かぬ田兒の浦　田子の浦は今は富士河の河口以東、卽ち富士郡吉原町の南方の海濱一帶を云つてゐるが、古くは富士河の河口以西、卽ち庵原郡蒲原町の海濱（今は吹上濱と云ふ）を指したのである。『大日本地名辭書』に據れば、續日本紀の天平勝寶二年の條に「三月戊戌、駿河國守從五位下楢原造東人等、於二部内廬原郡多胡浦濱一獲二黃金一獻之。」とあつて、其の濱は今の蒲原町大字小金に當り、其の他十六夜日記や淨瑠璃十二段草子の記事に徵しても、今の吹上濱に當ると云ふことである。○大君の命かしこみ　勅命を畏まつての意。〔七九〕參照。此の下には「行く旅なれば」の如き意味の語が省かれてゐる。

【譯】書見てさへも見飽きのしない田子の浦の佳い景色を、君命を奉じて行く旅のことであるから、夜見たことである。

【評】東海道の絶景をしみじみと眺める事も出來すして、夜景を眺めつつ急ぎ下つた時の、心殘りの氣持を歌つたのである。「大君の命かしこみ」は集中に屢用ゐられてゐる慣用句であるが、此の歌に於ては此の二句によつて、君命を重んじた上代人の思想が明確に表現せられてゐる。

大納言大伴卿歌一首　未詳

二九九　奥山の　菅の葉凌ぎ　降る雪の　消なば惜しけむ　雨な降りそね
奥山之　菅葉凌　零雪乃　消者將惜　雨莫零　行年

【釋】○大納言大伴卿　此の歌の作者大納言大伴卿を、諸註に大伴旅人であるとしてゐるが、續日本紀に據れば、旅人の父安麻呂も大納言になつた人である。卽ち安麻呂は慶雲二年に大納言になり、和銅七年五月に大納言兼大將軍で薨じたのである。よつて澤瀉氏は、此の卷の雜歌の排列順序の上から見て、此の歌は大伴安麻呂の作と認むべき事を考證せられた。（『國語國文の研究』第四十五號參照）大伴安麻呂は右大臣大伴長德の第六子で、壬申の役には天武天皇の御軍に從つて功が有り、大寶二年に式部卿に任ぜられ、慶雲二年に大納言になり、和銅七年に薨じた。

んらぶや

○菅の葉凌ぎ　「すげ」又は「すが」と稱する植物に二種ある。卽ち一は莎草科植物に屬するおにすげ・あをすげ・かさすげ・なるこすげ・かはらすげ・はますげ・しらすげ等のすげ類の總稱である。此等は多く水田又は水邊の濕地に自生する植物で、葉の廣いものは編んで笠とし、又狹いものは蓑などを造るのに用ゐる。單獨に呼ぶ場合は多くスゲと云ひ、熟語になつた場合には、「菅枕」「菅疊」の如くスガと變化するのが常である。今一つの菅は山菅で、是も單に「すげ」或は「すが」と云ふ。山菅は百合科植物の麥門冬の異名で、これは陰濕の山地に自生する常綠草で、形は春蘭に似てゐる。卽ち長さ一二尺の細長い葉が根本から叢り生じ、夏花軸に淡紫の小花を開き、秋に南天の實のやうな球狀の黑い實を結ぶ。山菅は集中に屢歌はれてゐる。之を單に「菅」と歌つた例に「妹が爲菅の實採りに行きし吾」（一二五〇）「高山の巖に生ふる須我の根の」（四四五四）「奥山に磐本菅を根深めて」（三九七）等があり、又「山菅」と歌つた例に「眞木立つ山に靑く生ふる山菅の根の」（三一九一）「山菅の亂れ戀のみせしめつつ」（二四七四）等がある。さて此の歌の「菅」は山菅卽ち麥門冬である。次に「しぬぐ」は「しぬぶ」（忍）

に對する他動詞で、押し伏せる意である。「しぬぶ」が後世「しのぶ」に轉じたやうに、「しぬぐ」は「しのぐ」に轉じた。「しぬぐ」の用例には「をみなへし秋萩之努藝さを鹿の露分け鳴かむ」(四二九七)「春されば木の葉凌ぎて霞たなびく」(一八一五)「天の川白浪凌ぎ落ちたぎつ早瀬渉りて」(二〇八九)等がある。此等の「しぬぐ」は押し分ける意である。此所の「菅の葉凌ぎ」は、山菅の葉を押し靡かせての意。○消なば惜しけむ　「惜しけ」は「惜し」の未然形に當る古い活用形である。消えてしまつたらば殘念であらうの意。○雨な降りそね　「雨莫零行年」を流布本にアメナフリコソ(代匠記・童蒙抄・考・略解・攷證同訓)と訓み、略解所引の宣長說には「行」を「所」の誤と見て、アメナフリソネ(槐落葉・檜嬬手・古義・新考同說)と訓んでゐる。フリコソと訓む說では、「行年」を「去年」と同じ意と見て之をコソと訓むのであつて、代匠記には此の「こそ」を希望を表す助詞であると云ひ、攷證には「こそ」の「こ」は「來」で、「そ」は「な」の結であるとして、「雨な降りこそ」を雨の降り來ること勿れの意に解いてゐる。集中には此の歌と同類の例に、「風莫吹行年」(一三一九)「言勿絶行年」(一三六三)「犬莫吠行年」(三二七八)などがあるのであつて、此等の「行年」を何れも「所年」の誤と見るのは稍不穩當である。併し禁止の助詞「な」を承けて、希望の助詞「こそ」で結んだ確證は無く、又攷證の說のやうに「こそ」の「こ」を動詞の「來」と解しては、「言な絶えこそ」の如き例に適當しない。よつて今は姑く宣長の說に從つて、「行年」を「所年」の誤として解く。「そね」の「そ」は禁止の助詞の「な」の結で、「ね」は願望を表す助詞である。「そ」を承けた例には「吾をな絶え曾禰」(三四一六)「草な刈り曾禰」(四四五七)等がある。

【譯】山奥の山菅の葉を押し靡かせて降り積る雪が、消えてしまつたら惜しいことであらう。雨よどうか降らないで欲しい。

【評】萬葉の自然鑑賞の歌には、「ぬばたまの今夜の雪にいさ濡れな明けむ朝に消なば惜しけむ」(一六四六)の如く、降り積る雪を愛でた歌が數多くある。此の歌も其の一つであつて、深山の山菅の葉の上に雪の積んだ、すが〳〵しい景色を愛でてゐるのである。而して此の歌に表れた境地には、新古今の和歌に屢見るやうな、かなり幽邃纖細な趣がある。植物の葉の上に雪の降り積つた景趣を愛でた歌には、集中に「天霧らし雪も降らぬかいちじろく此のいつ柴に降らまくを見む」(一六四三)があり、又古今集にも「今よりはつぎて降らなむ我が宿の薄おしなみ降れる白雪」(よみ人知らず)の如きがある。

中納言安倍廣庭卿歌一首

三〇二　兒らが家道　やや間遠きを　ぬばたまの　夜渡る月に　競ひあへむかも

兒等之家道　差　間遠　烏　野干玉　乃　夜渡　月爾　競　敢　六鴨

【釋】○中納言安倍廣庭卿　廣庭は右大臣安倍御主人の子で、和銅二年に伊豫守、靈龜元年に宮內卿、養老五年に左大辨、神龜四年に中納言に歷任し、天平四年二月に享年七十四で薨じた。(續日本記に據る)○兒らが家道　妹の家に行く道の意。「兒ら」は女を親しんで云ふ語。複數ではない。○やや間遠きを　槐落葉には此の句が一本に「差母遠焉」とあるのに據つて、ヤヤモトホキヲと訓み、新訓には流布本の本文をヤヤアヒダトホシと訓んでゐる。今は本文訓共に流布本に從つて置く。「やや」は餘程かなりの意。「間遠し」は「間近し」の反對で、集中に「麻等保久の雲居に見ゆる妹が家にいつか到らむ步め吾が駒」(三四四一)の用例がある。○ぬばたまの　「夜」の枕詞。(既

出）○夜渡る月に　夜空を渡り行く月に。○鏡ひあへむかも　「きほふ」は「きそふ」の古語。假名書の例に「騒ぎ伎保比て濱に出でて」（四三六〇）「渡る日の陰に伎保比て尋ねてな」（四四六九）がある。「あへ」は下二段活用の動詞「あふ」の未然形。「あふ」は自動詞の時は堪ふの意であり、他動詞の場合は成し遂ぐの意である。今は「敢へて」「取り敢へず」等と用ゐるのみであるが、古くは「秋されば置く露霜に安倍ずして」（三六九九）「斯く戀ひば老づく吾が身蓋し安倍むかも」（四二二〇）「織る機を君が御衣に縫ひ將堪かも」（二〇六五）の如く用ゐられた。最後の「かも」の「か」は疑問の助詞、「も」は感動助詞。月が山に入るのと、自分が家に行き著くのと、先を競ひ得られようかといふ意である。

【譯】妻の家へはまだ餘程道のりがあるのだが、あの空を渡る月と競爭して、（月が山に入らぬうちに）行き著くことが出來るであらうか。

【評】月はすん〳〵西へ傾いて行く。家へはまだ餘程の道程がある。月の沒しない中に早くと、急ぎ足で月を見つめながら夜路を辿つて行く、其の情景が頗る實感的に且印象的に表現せられてゐる。

柿本朝臣人麻呂下二筑紫國一時海路作歌二首

三〇三　名ぐはしき　稲見の海の　沖つ浪　千重に隱りぬ　大和島根は
名細寸　稲見乃海之　奥津浪　千重爾隱　奴　山跡島根者

【釋】○名ぐはしき　ここでは地名の「稲見」の枕詞。（既出）○稲見の海の　印南野（既出）の沿海即ち播磨灘を云ふ。○沖つ浪千重に隱りぬ　「隱奴」を流布本にカクレヌと訓んでゐるが、「隱る」は古く四段に活用したのであるから、槻落葉にカクリヌと改めたのが正しい。新考にカクシヌと訓んであるのは穩當でない。沖の浪が千里にも繁く立つてゐる彼方に隱れたといふ意。「隱りぬ」の主語は下の「大和島根」である。○大和島根は　「島根」の「根」は接尾語。「大和島」は〔二五五〕に說明した。

【譯】名も美しい印南の海の沖に、千重にも繁く立つてゐる其の波の彼方に、なつかしい故郷の大和の山々は隱れて見えなくなつた。

【評】「沖つ浪千重に隱りぬ」は簡略な言ひ方で語法上の缺點もあるが、其の內容を想像して見ると、明石海峽を過ぎて、いよ〳〵縹渺たる播磨灘へ漕ぎ出た時の情景がよく現れてゐて、作者の心細さもさこそと想ひやられる。一首を通じてナ行音やマ行音が多く用ゐられてゐるので、音調が滑かで快い。

三〇四　大君の　遠の朝廷と　在り通ふ　島門を見れば　神代し思ほゆ
大王之　遠乃朝庭跡　蟻通　島門乎見　者　神代之所　念

【釋】○遠の朝廷と　「遠の」は前に出た「遠つ」と同樣に、「遠し」の語幹を體言の資格に用ゐ、之に助詞「の」を添へたのであつて、奈良朝時代に於ける形容詞の特殊な用法である。他に「等保能國未だも著かず」（三六八八）の如き用例がある。「遠の」は遠くのといふ意。次の「みかど」を從來諸註に、政を執り行ふ所即ち朝廷の意とし、「遠の朝廷」は諸國の國府や太宰府を指すのであつて、ここは太宰府であると解いてゐる。尤も新解には、集中の用例八箇所の中には、必ずしも地方の政廳の意でなく、韓國や越の國や筑紫の國などを「遠のみかど」と言つた例があるから、此等の「みかど」は其の原義によつて御門の意と見るべく、此の歌の場合も皇居の遠方の御門と解すべき

であると云はれてゐる。「みかど」は元來御門の意で、それが宮廷・政府・國家・天皇等の意を順次派生した事は既述の如くである。然るに「遠のみかど」の場合の「みかど」は、假名書の例を除く他の五例は、悉く「御門」と記さずして「朝庭」又は「朝廷」と記してあるから、「遠のみかど」はやはり從來の說のやうに、遠くの政廳を指したものと見るべきである。「みかどと」の「と」は目標を示す助詞であるから、此の句は遠くの政廳へとの意である。○在り通ふ　「在り」は動作又は狀態の反復繼續を表す接頭語。〔五二〇〕の「在り立たし」參照。「在り通ふ」は絕えず往き通ふ意。「絕ゆることなく安里我欲比見む」（四〇〇二）「我大君吉野の宮を安里我欲比見す」（四〇九九）などの用例がある。○島門を見れば　「島門」は島々の間の船の通路を云ふ。○神代し思ほゆ　原文の「所念」を流布本にソオモフ、代匠記にオモホユ、童蒙抄にシノバルと訓んでゐる。代匠記の訓が妥當である。「し」は强意の助詞。神代の事が偲ばれるの意。此の「神代」に就いて槻落葉（攷證同說）に、始めて太宰府を置かれた御代の事であると云つてゐるのは妥當でない。これは瀨戸內海に散在する島嶼を見て、遠き神代に伊邪那岐・伊邪那美二神が、國生みをし給うた神話を想ひ浮べたのである。

【譯】大君の統べ給ふ遠くの役所へと、絕えず人々の往き通ふ海路に在る島々を見渡すと、此等の島々を創造し給うた神代のことが偲ばれる。

【評】瀨戸內海を航行する時、送り迎へる幾多の島々を見て、直ちに二神の國生神話を想ひ浮べたのは、讃岐國を「神の御面」と歌つて讃へたのと同樣に、人麻呂が古來の傳統的國民思想に强く支配されてゐた歌人である事を示してゐる。此の歌には廣い瀨戸內海を詠み込み、而も遠き神代にまで想像を馳せて歌つてあるので、空間的にも時間的にも素材の擴がりが大きく、從つて頗る雄大且嚴肅な感が溢れてゐる。又音調の上では、一首の半を占める十五音が母音のオを含んでゐる爲に、自ら內容に適合した莊重な響きを傳へてゐる。前に講義した〔二五〇〕以下六首と此の二首は、作者が筑紫に下つた長い船路で詠んだ歌の一部分であらう。敍景歌人としての人麻呂の特色は、是までに講じた諸作によつて既に明かであるが、此の二首などは、雄大な自然に對する感激を歌つたもので、彼の歌風の特徵の一面を代表して居る。

高市連黑人近江舊都歌一首

三〇五　斯く故に　見じと云ふものを　樂浪の　舊き都を　見せつつもとな

如是故爾　不見跡云物乎　樂浪乃　舊都乎　令見乍本名

右歌或本曰、小辨作也。未審此小辨者也。

【釋】○斯く故に　斯くある故にの義。卽ち斯やうに悲しい思ひをするからの意である。○見じと云ふものを　此の句を槻落葉にミジトイヒシモノヲと訓んでゐるが、九音となつて音調が惡いから、流布本の訓に從つて八音に訓むのがよい。○見せつつもとな　これは「もとな見せつつ」を顚倒したのである。「もとな」は〔二三〇〕に解いた通り、よしなく又はみだりにの意。同じ用例に「さ夜中に友喚ぶ千鳥物思ふと侘び居る時に鳴きつつ本名」（六一八）「心なき秋の月夜の物思ふと寢の寐らえぬに照りつつ本名」（二二二六）等がある。「つ」は後世の用法と異なつて、時には關係がなく、動作の意味を强めるのである。而して「見せつつ」は「見せつ見せつ」の意であつて、副詞的修飾語である。これと同じ用例には前に講じた「隱りのみ戀ひつつあるに」（二〇七）や、後に講ずる〔三一九〕の

「降る雪を火もて消ちつつ」其の他幾らもある。

【譯】かういふ氣持がするであらうと思つたから、見まいと言つたのに、此の樂浪の舊都の荒廢した樣をよしなくも見せて、悲しい思ひをさせる事である。

【評】近江の大津宮の廢墟に對する悲哀の情緒を歌つた作であるが、それを人麻呂の作(三三)や(一六六)などに於けるが如く直接に表現せずして、間接に歌つたのが此の歌の異色ある所である。かなり理窟めいた表現法ではあるが、力が籠つてゐて作者の氣持はよく表れてゐる。

幸二伊勢國一之時安貴王作歌一首

三〇六　伊勢の海の　沖つ白浪　花にもが　包みて妹が　家づとにせむ
伊勢　海之　奥津白浪　花爾欲得　裹　而妹之　家裹　爲

【釋】○幸二伊勢國一之時　續日本紀に聖武天皇が天平十二年に伊勢國に行幸になつた事が記されてゐるので、諸註は此の年の作であると見てゐる。然し澤瀉氏は此の卷の歌の排列順序と、作品の時代の上から見て、玆に突然天平十二年の作が載せてあるのは不自然であるとし、續日本紀養老二年二月の美濃國行幸の條に、「己丑行所二經至一美濃・尾張・伊賀・伊勢等國郡司云々」とあるのを證として、これは其の時の作であらうと云つて居られる。(『國語國文の研究』第四十五號參照)　安貴王(續日本紀には阿紀・阿貴と記す)は志貴皇子の御孫、春日王の御子である。天平元年に從五位下、十七年に從五位上に敍せられ給うた。市原王の御父である。

○花にもが　「が」は文の終に附いて願望を表す助詞。(一二)の「常にもがもな」參照。原文の「欲得」をモガと訓ませたのは義訓である。花であればよいにの意。○家づとにせむ　「家づと」は我が家へ持ち歸る土産のこと。「つと」は「つつむ」(包)と關係のある語で、包んだ品を云ひ、轉じて土産の意に用ゐる。「家づと」の外に「山づと」「濱づと」「道行づと」などと用ゐられてゐる。

【譯】伊勢の海の沖に白く立つてゐる浪が、花ででもあればよいに。さうしたらあれを包んで、家なる妻への土産に持ち歸らうものを。

【評】白い花のやうな浪頭が、頻りに立つては碎ける清い沖の景色を眺めて、旅なる作者は、之をまだ見ぬ妻に見せたい一念から、包んで携へ歸る方法の無いのを殘念に思つたのである。卷七の「玉津島見れども飽かずいかにして裏み持ち行かむ見ぬ人の爲」(一二二二)と相似た心境を表現した作で、共に上古の旅人の素朴純眞な感情が歌はれて居る。

門部王詠二東市之樹一作歌一首

三一〇　東の　市の植木の　木垂るまで　逢はず久しみ　うべ戀ひにけり
東　市之殖木乃　木足　左右　不　相久　美　宇倍戀　爾家利

【釋】○門部王　『皇胤紹運錄』に長皇子の御孫で、川内王の御子と傳へてゐる。續日本紀に據れば、和銅三年に從五位下を授けられ、養老三年には伊勢守を拜命し、天平九年に右京太夫となり、其の後大原眞人の姓を賜はり、天平十七年四月大藏卿で薨じた方である。○東市之樹　「東市」は寧樂京の東西に置かれた市の一つである。東西兩市の位置に就いて關野貞博士は、「平城京に東西二市の區劃ありしことは、續日本紀に天平十三年八月、平城の

二市を恭仁京に遷せしことを載せ、又天平神護元年四月米價の踊貴せるを以て、左右京の穀各二千石を東西に糶せしことを記したれば明かなるべし。（中略）其の位置は平安京の如く明かならざれども、東市は辰市村大字杏（からも）に小字辰市あれば其の附近なるべく、西市は郡山町大字九條に田市と稱する地あれば、其の附近なるべし。されば東西市は八條の内にありし者の如し。」（東京帝國大學紀要工科第三冊『平城京及大内裏考』）と考證して居られる。即ち今奈良市の南方に當つて、櫻井線の東に東市村、西に辰市村の名が遺つてゐるのは、古此の邊に東の市が存した事を示してゐる。八〇八頁地圖參照さて大寶令の關市令及び延喜式の東西市式に、上古の市の制度が細かに規定せられてゐる。其の延喜東西市式の一條に、「凡毎月十五日以前集（ウヒトヒノミ）東市、十六日以後集（ハ）西市（ノミ）。」とある。

○東の市の植木の　「市の植木」は市の街路樹で、是に就いては〔一二五〕の條に説明した。○木垂るまで　樹が年を經て枝が垂れ下るのをいふ。○逢はず久しみ　原文の「不相久美」を流布本にアハヌキミ、童蒙抄にアハデヒサシミと訓んでゐるが、略解にアハズヒサシミと訓んだのが妥當である。逢はずして久しく時を經たのでといふ意。○うべ戀ひにけり　流布本に「宇倍吾戀（ウヘワレコヒニ）爾家利（ケリ）」とあるが、童蒙抄にウベワビニケリと訓み、槻落葉以下の諸註には原文の「吾」を衍字と見てウベコヒニケリと訓んでゐる。類聚古集及び神田本には「吾」が無く、ウベコヒニケリと訓んであるから、今は之に從ふ。「うべ」は「うべなふ」の語根で、後に「むべ」と轉訛した副詞である。實（げ）に或は成る程の意。其の用例に「春なれば宇倍（ウベ）も咲きたる梅の花」（八三一）、又「うべ」に強意の助詞の「し」を添へた例に、「宇倍之（ウベシ）こそ昔の人もしぬび來にけれ」（四一四七）、又音調を整へる助詞の「な」を添へた例に「于陪儺（ウベナ）于陪儺（ウベナ）我を問はすな」（仁德天皇紀）等の用例がある。

【譯】東の市に植ゑてある並木が、今は老木となつてこんなに枝が垂れ下るまでも、久しい間逢はないのであるから、戀しくなつたのも尤もなことである。

【評】上三句に敍べた市の並木が、幾年久しい間といふ觀念を美的に且具象的に表現してゐる。當時市は諸方の人が集まり、最も雜閙する繁華な所であつたから、自然かうした場所で愛人を見初める事も多かつたのであらう。かやうに考へて來ると、此の歌に取入れられた街路樹は單なる譬喩ではなく、恐らく作者にとつては思出のある樹として、胸裏に深く印象を宿してゐたものであらう。

波多朝臣少足（はたのあそみをたり）歌一首

三一四　さされ波　磯巨勢道（ふこせぢ）なる　能登湍河（のとせがは）音のさやけさ
小浪　磯越道有　能登湍河音之清左

たぎつ瀨毎に
多藝通瀨毎爾

【釋】○波多朝臣少足　傳未詳。集中に此の一首を傳へてゐるのみである。○さされ波磯巨勢道なる　「さされ波」はさざ波に同じ。「さされ波磯」は小波が磯を越すといふ意で、類似の音の「巨勢」に言ひ懸けた序詞である。巨勢道は〔五〇〕に述べた通り、大和から巨勢を經て紀伊へ通ずる街道を云ふ。最後の「なる」は、にあるの義。○能登湍河　南葛城郡葛村に源を發して北流する重阪（へさか）川の古名で

現在の能登湍川

あらう。此の川の下流を今曾我川と云ふ。北葛城郡河合村に於て大和川に注いでゐる。○たぎつ瀬毎に　「たぎつ」は水が奔流すること。〔三六〕の「瀧の宮處」參照。

【譯】巨勢道にある能登湍川は、水が逆卷き流れる瀬毎に、サア〳〵と爽かな音を立ててゐる、あの水音の良さよ。

【評】序詞に「さされ波」「磯」「たぎつ瀬」など川に緣のある語を用ゐたのは、一首の表現を效果あらしめてゐるが、此の歌の生命は内容よりも寧ろ形式としての音調の上にある。即ち全體の上に水のせせらぎを想はせるやうなサ・セ・ソ等のサ行音を頻繁に用ゐ、其の間に柔い響のナ行音を配置してあるので、一首の聲調が如何にも律動的で、宛らに川の流れを音樂的に寫し出してゐるのである。萬葉歌人の自然觀照の一面には、天然の景趣に全心を傾注する沒我的態度が見えるのであつて、斯かる態度によつて詠まれた作歌には、此の歌のやうに、波の音・鳥の聲・風の音などを、音調の上に感覺的に表現した作が少くない。

山部宿禰赤人望二不盡山一歌一首幷短歌

(三七)

天地の　分れし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　不盡の高嶺を　天の原
天地之　分　時從　神左備手　高　貴寸　駿河　有　布士能高嶺乎　天　原

振り放け見れば　渡る日の　影も隱ろひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い
振　放　見　者　度　日之　陰毛隱　比　照　月乃　光毛不　見　白雲母　伊

行き憚り　時じくぞ　雪は降りける　語り繼ぎ　言ひ繼ぎ行かむ　不盡の高嶺
去波伐加利　時自久曾　雪者落　家留　語　告　言繼　將往　不盡能高嶺

は

者

【釋】○山部宿禰赤人　傳は史書に見えてゐない。其の出生地に就いては伊豫說上總說大和說等があるが、何れも確實性に乏しい。集中の作品に據ると、聖武天皇の朝に事へた下級の官吏であつたらしく、天皇の行幸に供奉して諸國で從駕の歌を多く詠んでゐるのであつて、人麻呂と相似た閲歷の歌人である。即ち神龜元年には紀伊國への行幸に供奉し、天平六年には難波宮、同八年には吉野離宮へ陪從して居る。此の外其の足跡は西は伊豫溫泉印南敏馬地方から、東は駿河更に下總國の葛飾方面にまで及んでゐる。作品に年代の明記されてゐるものに就いて言へば、神龜元年の作が最も古く、天平八年の作が最も新しいから、大體奈良朝前期から後期にかけて活躍した宮廷歌人である。卷十七に載せられてゐる家持が池主に贈つた書の中に、「幼年未レ逕二山柿之門一」とあるのは、山部赤人と柿本人麻呂を指してゐるらしく、(尤も一說には憶良と人麻呂であらうと云ふ)赤人は當時既に人麻呂と並び稱せられてゐたものと思はれる。赤人は種々の意味で人麻呂と對照せらるべき歌人である。即ち人麻呂が主として傳統的國民思想を歌つた抒情的作品を多く遺してゐるのに對して、赤人は優美清淨雄大な自然美を嘆美した敍景歌を主として詠んでゐる。又作風に於ては、人麻呂が對象の上に自己の熱情的な强烈な主觀を積極的に吐露してゐるのに對し、赤人は寧ろ自然を客觀的態度で繪畫的に歌ふ事を得意とし、殊に自然美の中の優美若しくは靜寂な詩趣を好んで詠んで居る。なほ歌體に就いて言へば、人麻呂は長歌・短歌・旋頭歌何れにも長じてゐるが、殊に長歌に於ては五十句を超える長篇を多く詠み、對句・枕詞・序詞などを巧みに用ゐて、修辭技巧の方面にも

縱横の才を揮つてゐる。これに對して赤人は、寧ろ短脇に其の伎倆を最もよく發揮したのであつて、長歌は二十句以下の小規模なものが多く、修飾としては對句以外の技巧は餘り用ゐず、其の表現は動もすれば類型的であり、平明單純であつて、人麻呂に遠く及ばない。然しともかくも赤人は萬葉集中第一流の自然歌人であつて、萬葉代表歌人の一人である。○望二不盡山一歌　「不盡」は又「布士」「布自」等とも記されてゐる。考には「山」の下に「作」を補つてゐる。

○天地の分れし時ゆ　天地開闢の時以來の意。○神さびて　神々しくしての意。〔三八〕參照。○天の原振り放け見れば　此の二句は他の例と異なつて、天の原をの意ではなく、天の原にの「に」を略したのである、と新考に解いてある通りである。富士の高嶺を高く大空に仰いで見ればの意。○渡る日の　大空を渡り行く日の。○影も隱ろひ　「影」は日影卽ち日光を云ふ。「隱ろひ」は「隱る」に動作の繼續又は反復を表す助動詞の「ふ」が添つた形である。日の光も高大な富士の姿に遮られて、すつと隱れてしまふ意。○い行き憚り　「い」は語調を強める接頭語。（既出）原文の「代」は流布本に「伐」とあるが、古葉略類聚鈔その他諸本に「伐」とあるのに從つて改めた。行きかねての意。童蒙抄や槻落葉に山が高い爲に白雲も上りかねる義であると解いたのはよくない。考に下の「不盡の嶺を高み恐（かしこ）み天雲もい行き憚り」（三二一）を旁證として、恐れ留まる意と解いたのに從ふべきである。卽ち雲も富士の尊容を恐れて中天にかかつてゐるのを云ふ。○時じくぞ　「時じく」は形容詞の「時じ」の連用形で、時を定めず又は季節外れにの意。此處では時を定めずの意に用ゐてある。〔六〕參照。なほ「時じ」は〔一六〕に「み芳野の耳我の山に時自久（トキヒサク）雪は降るとふ」とあつて、其の別傳の〔二五〕に「み吉野の耳我の嶺に時無曾（トキナシソ）雪は降りける」とある

# 欠

たものかと思はれる。尤も生木の弓を生弓と言つたとする點に稍不安がある　○打ち寄する

「駿河」の枕詞。是に就いても諸説がある。(イ)仙覺萬葉抄には波の打ち寄する洲の義で「駿河」のスに懸けたのであると云ひ、(ロ)檜嬬手には浪の打ち寄するどき川の意で懸けたのであると解き、(ハ)古義所引の大神景井の説に據れば、駿河國には急流があつて、其の水音が地をゆするやうに轟くから、「動河(ゆすりがは)」がスルガと訛つたのであつて、此の枕詞は「打動動河(うちゆるがするゆすりがは)」の義で懸けたのであると云つて居る。思ふにこれは波の打ち寄するといふ意を以て、同音のスルを疊んで「駿河」に言ひ續けたものであらう。○こちごちの　あちこちの即ち雙方のといふ意。既出(二一〇)參照。○國のみ中ゆ出で立てる　「出で立てる」の本文は流布本に「出之有(イデチシアル)」とあるが、「之」は古葉略類聚鈔に「立」とあるのに據つて改め、童蒙抄の一訓に從つてイデタテルと訓む。「み中ゆ」の「み」は「眞(マ)」と同じく接頭語。「ゆ」は「より」の意。「出で」は輕く添へた動詞。國の眞中に聳え立つてゐるの意。○い行き憚り　本文の「伐」は流布本に「代」とあるが、今は古葉略類聚鈔その他諸本に「伐」とあるのに據つて改めた。○燎ゆる火を雪もて消ち　原文の「雪以滅」を流布本にユキモテキヤシと訓んでゐるが、考にはユキモテケチ、古義にはユキモチケチと訓んである。上古に於ては……を以ての意を、「もち」とも「もて」とも言つたのであつて、「何物母(モチ)氏か命繼がまし」(三七三三)「眞袖毛知(モチ)涙を拭(ぬぐ)ひ」(四三九八)の如く何れも用例がある。今音調の佳きに從つて考の訓に據る。「消ち」は「消し」の古語で四段に活用する。當時富士は噴火してゐたのであつて、續日本紀・日本紀略・三代實錄等に富士爆發の記事が屢見えてゐる。○言ひもかね名づけも知らに　原文の「言不得」を流布本にイヒカネテ、略解にイヒモエズと訓んでゐるが、代匠記にイヒモカネと訓んだのに從ふ。「名不知」は流布本にナヲモシラセス、代



欠

匠記にナヅケモシラズと訓んであるが、略解にナヅケモシラニと訓んだのに從ふ。言葉に言ひ表す事も出來ず、名狀すべき方法も無く、卽ち言語に絕しての意。○靈しくも　流布本にアヤシクモ（代匠記・童蒙抄・考・攷證等同訓）、槻落葉にクスシクモ（古義・註疏・新考・全釋・新釋等同訓）と訓んでゐる。何れにも訓み得るが、伊呂波字類抄に「神」「靈」にアヤシの訓を施してゐるやうに、「あやし」には靈妙神祕の意があるから、今は流布本の訓に從つて置く。○坐す神かも　上代人は山自體を直ちに神と考へたのである。今嶽麓なる大宮町鎭座の淺間神社は、木花開耶姫命を祭神としてゐるが、もとは山嶽崇拜に基づいて富士の山靈を祀つたのである。○石花の海と　原文にある「石花」は、今俗に「かめのて」（石蚓）と稱する節足動物の古名の「せ」を表す文字である。石蚓は海岸の石に附著して生ずる龜の手に似た形の動物で、石灰片の殼から白い花　五片の肢を出して、水中の微生物を食べる。其の形の上から「石花」と記すのである。

ここの「石花」はセの音を表す借訓である。さて「石花の海」は甲斐の學者萩原元克の說（宣長との問答を記した『問答錄』に見ゆ）に、「せの海と云ふは、本國八代郡（○今は南巨摩郡）に西の海と云ふ小さき湖あり。それ富士の西北なり。いにしへの湖の埋み殘れるにて、西はせのかたゝるべし」とある。「石花の海」は卽ち古の剗海で、『三代實錄』に次のやうな記事が見えてゐる。「貞觀六年七月十七日、辛丑甲斐國言、駿河國富士大山忽有二暴火一、燒二碎崗巒一、草木焦殺、土鑠石流、埋二八代郡本栖并剗兩水海一、水熱如レ湯、魚鼈皆死、百姓居宅與レ海共埋、或有レ宅無レ人、其數難レ知、兩海以東亦有二水海一、名曰二河口海一、火陷赴向二河口海一云々」、又「七年十二月九日丙辰、（中略）異大、變子ノ今未レ止、遣二使者一檢察、埋二剗海一千許町云々」とある。右の記事に見えたる「剗海」は今の富士五湖の精進湖、及び其の東約一里餘の西湖畔より富士を望む

西湖畔より富士を望む

つたのが、貞觀六年の爆發の時に熔岩が流出して二湖に分れたのである。（今も精進湖は村の地籍圖に「石花湖」と記されてゐる由である。）今「西湖」と謂ふのは、「せの海」の「せ」に「西」を當てた爲に起つた稱呼である。○不盡河と　「と」はとての意。○水のたぎちぞ　流布本の本文に「水乃當烏」とある。「烏」は類聚古集・古葉略類聚鈔その他に「焉」とあるのに據つて改めた。訓は考にミヅノタギチゾと訓んだのがよい。「たぎち」は動詞の「たぎつ」の連用形から轉成した名詞で激流のこと。○日の本の　「やまと」の枕詞。續日本後紀所載の興福寺の僧の長歌に、「日本乃倭の國は」の用例がある。宣長の『國號考』に日の本つ國の意で、ここは國號ではなく「やまと」の稱辭であると云つてゐる。「日本」の文字が國號に公定せられたのは、孝德天皇の大化元年からであつて、「日の本の」といふ枕詞は此の國號から出たものと思はれる。（なほ國號「日本」の制定の由來に就いては『大日本地名辭書』汎論第三「國號篇」參照）○鎭とも　國土の鎭護ともの意。

【譯】甲斐の國と駿河の國との、兩方の國の眞中に聳え立つてゐる富士の高嶺は、空に浮ぶ雲さへも行くことを憚り、飛び翔る鳥さへも飛び上ることは出來ない。又燃える火を雪を以て消し、降る雪を噴き出す火を以て消してゐて、何とも言ひやうもなく形容の詞も知らぬ程に、靈妙に坐します神である。石花の海と名付けてゐる湖も、

其の山の包み抱えてゐる湖水である。又富士川と云つて人々の渡る大河も、其の山の水の激流である。實に此の山は、我が日本の國の鎭護として坐します神である。又國の寶ともなつてゐる山である。駿河にある富士の高嶺は、いくら眺めても見飽きのしない山である。

【評】此の歌を前に講じた赤人の作に較べると、種々の點に異色が認められる。前の長歌は主として敍景を中心にしてゐるのに對し、是は寧ろ敍事殊に地理的敍述を中心としてある。即ち冒頭に甲斐・駿河兩國に跨る雄大な山である事を敍し、次いで雲・鳥・火・雪などを捉へて對句を以て敍景的描寫を行ひ、靈峰の壯觀を具象的且活動的に敍べ、更に裾に抱かれてゐる石花の湖、麓を流れる富士河等の富嶽の周圍の河湖を說明して、最後に富嶽禮讃の詞を數句に亙つて敍べて、一首を歌ひ結んである。單に富士の偉容を敍景的に歌ふのみではなく、更に周圍の地理的說明を試みて、其の雄偉壯大なる事を立體的に歌つて驚嘆してゐるのが此の歌の特色である。從つて此の作は觀念的に富士の壯觀を感ぜしめる力はあるが、實感的に人を感動せしめる力は寧ろ乏しいやうである。然し富嶽禮讃の歌としては、赤人の歌と共に古今の名作と言ふべきである。

次に此の長歌及び次の反歌(三二〇)の作者に就いて從來とかくの論が現れてゐるから、茲に簡單に私見を述べて置く。下に講する(三二一)の後に左註として「右一首高橋連蟲麻呂之歌中出焉。以類載此」とある。「右一首」とあるから(三二一)は疑もなく蟲麻呂の作であるが、其の前の長歌(三一九)及び反歌(三二〇)の作者に就いては、從來之を蟲麻呂の作とする說と、作者不明とする說との兩說がある。今それらの諸說の中注意すべきものに就いて簡單に紹介する。佐佐木博士は左註の「右一首」は「右三首」の誤と見て、三首とも蟲麻呂の作と認めるのが穩當であると言はれ(『和歌史の研究』)、武田博士は「右一首」を尊重して、其の前の二首は優れた逸名歌人の作であらうと言はれた。(『萬葉集新講』)澤瀉氏は冒頭に枕詞を伴なつた地名を重ねてゐる事、長歌に指示代名詞の「その」を繰返してゐる事、「こちごち」の如き用例の珍らしい語を用ゐてゐる事等が、何れも蟲麻呂の他の作品と共通する特色であることを示し、更に長歌の題詞に何首とある場合は、それは長歌のみを指し、反歌は員數外にあるのが慣例であつて、此の左註の「右一首」は卷五の(九〇六)の次にある左註の「右一首云々」の場合と全く同樣に、「右長歌一首云々」の意に解すべきで、反歌二首はそれに含まれてゐるのであると說かれた。(『國語國文の研究』第四十九號誌上)又森本治吉氏は卷三の作歌の揭載形式の方面から見て、左註の「右一首」は最後の短歌一首のみを指すものであると認め、更に澤瀉氏の擧げられた內容上の特色を偶然の暗合であるとせられ(『水甕』第十八卷第五號誌上)、又山田博士は左註に「右何首」と記した集中の用例を歸納して、「右何首」は凡て長歌反歌に拘らず、實際の歌の數を指してゐる事を說明して、此の場合も(三二一)のみを指すのであると論じて居られる。(『國語國文』第二卷第二號誌上)

思ふに此の左註は、もと蟲麻呂歌集に「詠不盡山歌一首并短歌」と標記して、長歌一首反歌二首を載せてあつたのを拔く時に、不用意に題詞の「一首」をその儘左註に記したのであつて、是は「右三首」と記すべき場合であつたのである。更に長歌の題詞に「詠何歌」と記してあるのも、他の蟲麻呂歌集の歌の場合と一致して居り、又此の長歌の內容及び作風上には、蟲麻呂の歌の特色が著しく認められるのである。即ち內容方面では(イ)地理的說明のある事、(ロ)敍事詩的色調を帶びてゐる事、(ハ)勳的描寫の多い事、(ニ)擬人法を用ゐてゐる事等を擧げ得る。又表現技巧の方面では、(イ)對句の形式及び用法上の特色、(ロ)觀念語(例へば「國」「飛ぶ」「火」「雪」「山」「海」「神」等)の反復が多い事、(ハ)句切の多い事等を蟲麻呂の歌の特色として擧げ得る。要するに右に述べた諸點を綜合して見ると、此の長歌及び以下講ずる二首の反歌は、皆蟲麻呂の作歌である事は疑ふ餘地が無いと思ふ。(詳しくは『萬葉集講座』第一卷所載拙稿參照)さて高橋蟲麻呂は、劇的な地方傳說を素材とする敍事的長歌を多く詠んだ集中隨一の傳說歌人であつて、赤人・憶良・旅人等と比肩すべき萬葉代表歌人の一人である。閱歷は詳かでないが、今日知られてゐる事柄は、後に(九七一)を講ずる際に述べる。

反歌

三一〇　不盡の嶺に　降り置ける雪は　六月の　十五日に消ぬれば　其の夜降りけり
不盡嶺爾　零置雪者　六月　十五日　消者　其　夜布里家利

【釋】○降り置ける雪は　「零置雪者」を流布本にフリオクユキハと訓んであるが、略解にフリオケルユキハと訓み改めたのがよい。降り積つてゐる雪はの意。○六月の　「みなづき」は水無月の義であると云ひ、又水之月卽ち田に水を湛へる月の義であるとも云ふ。陰暦の六月は「六月の地さへ割けて照る日にも」（一九九五）と歌はれてゐる如く、最も炎熱の烈しい月である。○十五日に消ぬれば　原文の「十五日」はモチと訓む。十五日夜の滿月を「もちづき」と云ふので、十五日を「もちのひ」と云ひ又略して「もち」とも云ふのである。仙覺萬葉抄には『駿河國風土記』に、富士の積雪は六月十五日に一旦消えて、子の時以後又降り變ると見えてゐる由を記してゐるから、此の歌は其の古傳說を歌つたものであらう。○其の夜降りけり　十五日に雪が消えて其の夜また降ると云ふのは、畢竟一年中消える事のない意を表したのである。

【譯】富士の山に降り積つてゐる雪は、炎熱の六月十五日に一旦消えてしまふと、又其の夜降り積るのである。

【評】作者が富士山頂の雪に關する土地の古傳說（仙學抄所引のもの）に興味を感じて此の反歌を添へたのである。蟲麻呂の傳說歌人らしい態度がここにも窺はれて興味がある。

三一一　不盡の嶺を　高みかしこみ　天雲も　い行き憚り　たなびくものを
布士能嶺乎　高見恐　見　天雲毛　伊去羽計　田棚引　物　緒

右一首高橋連蟲麻呂之歌中出焉、以レ類載レ此。

【釋】○高みかしこみ　高いので又畏多いので。○たなびくものを　原文の「棚」は流布本に「萊」とあるが、類聚古集を始め諸本に「棚」とあるのに據つて改めた。「ものを」は既述の通り强い感動詠歎を表す。〔八六〕參照。

【譯】富士の山が高く且貴いので、空を行く雲も恐れ憚つて、山の中程にたなびいてゐることである。

【評】此の歌の眼目とも言ふべき「天雲もい行き憚り」の二句は、赤人の長歌にもあり、又前の蟲麻呂の長歌にも略同じ意の句があるので、稍陳腐の感を伴なふが、ともかく最も端的に崇高な靈峰に對する上代人の感じを言ひ表した句である。從つて此の一首も單獨に味はふならば、短歌形式の中に能く富嶽の雄偉崇高な情景を歌ひ得てゐるものと言へる。「高み」「かしこみ」のやうに副詞を重ねるのは、長歌に「國」「飛ぶ」「火」「雪」「山」「海」「神」などの觀念語を反復するのと同樣に、此の作者の表現技巧の一特色である。此の事はなほ後に述べる。

山部宿禰赤人至二伊豫溫泉一作歌一首幷短歌

三一二　皇神祖の　神の命の　敷きます　國のことごと　湯はしも　さはにあれども
皇神祖之　神乃御言乃　敷座　國之　盡　湯者霜　左波爾雖　在

島山の　宜しき國と　こごしかも　伊豫の高嶺の　射狹庭の　岡に立たして
島山之　宜　國跡　極　此　疑　伊豫能高嶺乃　射狹庭乃　崗爾立　之而

歌思ひ　辭思はしし　み湯の上の　樹群を見れば　臣の木も　生ひ繼ぎにけり
歌思　辭思　爲師　三湯之上乃　樹村乎見　者　臣　木毛　生繼　爾家里

鳴く鳥の　聲も變らず　遠き代に　神さび行かむ　行幸處

鳴鳥之　音毛不更　遐代　神左備將往　行幸處

【釋】○伊豫溫泉　伊豫溫泉は伊豫國溫泉郡道後湯之町（松山市の東北）に在る道後溫泉である。此の溫泉は攝津の有馬溫泉や紀伊の牟婁溫泉等と共に、上代から著名であつて、允恭天皇記には「伊余湯」又齊明天皇紀には「石湯」と見えてゐる。釋日本紀所引の『伊豫國風土記』逸文に據ると、伊豫溫泉には前後五度の行幸啓があつた。即ち古くは景行天皇と皇后、次いで仲哀天皇と神功皇后の行幸啓があり、稍下つて聖德太子の行啓があつて、湯の岡の側に碑を建てて碑文を撰び給ひ、（碑は今傳はつてゐないが、碑文は釋日本紀に見える）次いで舒明天皇と皇后、更に下つて齊明天皇・天智天皇・天武天皇の行幸があつた事が記されてゐる。此の長歌には聖德太子の行啓の時の事、及び舒明天皇の行幸の時の事を懷古して歌つてゐる。此の事に就いてはなほ後に述べる。

○皇神祖の神の命の　神にまします歷代の天皇がの意。〔一一九〕參照。○敷きます　「敷座」を童蒙抄にシキマセルと五音に訓んでゐるが、流布本の訓にシキマスとあるのがよい。治め給うてゐるの意。○國のことごと　「國之盡」を童蒙抄にクニノカギリ、槻落葉にクニノハタテニと訓んでゐるが、代匠記精撰本にクニノコトゴトと訓んだのが妥當である。國中到る處にの意。○湯はしも　「し」は強く指示する助詞。○島山の宜しき國と　「島山」は島に在る山で、ここは伊豫國の山々を云ふ。槻落葉や古義に四國の總稱としてゐるのはよくない。伊豫國は山の景色も美しい國であるとての意。○こごしかも　原文の「極此疑」を流布本にココシキと訓んでゐるが、考にコゴシカモと改訓したのに從ふべきである。「こごし」は「こる」（凝）の語根を重ねて語幹とした形容詞で、岩石がごろごろと蟠つてゐて嶮しい樣を云ふ。用例に「天そそり高き立山……許其志可毛巖の神さび」（四〇〇三）「石が根の興凝敷道を」（三二七四）「石根許其思美菅の根を引かば難みと」（四一四）等がある。「こごしかも」はこごしきかものの意。○伊豫の高嶺の　槻落葉に西村重波の說として石槌山の事とし、檜嬬手・古義・註疏・全釋等はこれに從つてゐるが、石槌山は溫泉を去る東南八里の所にある山であるから、地理上此の說は穩當でない。これは次の射狹庭の岡のある山を云ふのであるから、溫泉の北及び東に續く連山を指したのであらう。○射狹庭の岡　此の岡に就いては、仙覺萬葉抄に引く『伊豫國風土記』逸文に「立二湯岡側碑文一。其立二碑文一處謂二伊社邇波之岡一也。所レ名二伊社邇波一由者、當土諸人等其碑文欲レ見而伊社那比來、因謂二伊社爾波一本也。」とある通り、聖德太子の建て給うた碑文の在つた岡である。其の岡の位置は今詳かでない。半井梧庵の『愛媛の面影』の說に、延喜式に見える溫泉郡伊佐爾波神社は元伊佐邇波岡に在つたのを、今は湯月八幡宮の傍に移したのであるとし、湯月八幡の背後の柿木谷から今の湯月城址（○今は道後公園となつてゐる。）の邊まで、古くは一帶に伊佐爾波岡であつたが、河野通盛が築城の際に山を開き堀を穿つたので、地勢が一變した旨を記してゐる。現在溫泉の東南方に道後公園が在り、公園の東北方に湯月八幡宮が在る。桑原達雄氏が松山中學校に在職の頃、著者に寄せられた報告に據れば、現今の道後公園の地は昔時溫泉館の在つた處であるらしく、又湯月八幡も社傳に據れば、もと其處に在つたと言はれてゐるから、射狹庭は今の公園地に當るもののやうに思はれるとの事である。○岡に立たして　聖德太子が嘗て此の岡に立ち給うての意。○歌思ひ　考の訓にウタシヌビとあるが、代匠記にウタオモヒと訓んだのがよい。新解に原文の「歌」を「敲」に改めて、ウチシヌビと訓んであるが、原文の文字を改めて訓む說には從ひ難い。歌を思ひ廻らしの意。

此の故事は文獻に見えない。○辭思はしし　考にコトシヌビセシ、槻落葉にコトシヌバシシ、檜嬬手にコトオモホシシと訓んでゐるが、小琴にコトオモハシシと訓んだのに從ふ。「辭」は文辭の意である。碑文を草し給うた所のといふ意。○み湯の上の　「み」は美稱の接頭語。溫泉の近傍の。○樹群を見れば　「樹群」は樹木の叢り茂つてゐる森のこと。○臣の木も　「おみの木」は今の樅の木である。「おみ」は「もみ」の轉訛であらう。仙覺萬葉抄所引の『伊豫國風土記』逸文に「以二岡本天皇并皇后二俱一爲二一度一。于レ時於二大殿戸一有二椹興臣木一。於二其木一集二止鵤興二此米鳥一。天皇爲二此鳥一枝繫二穗等一養賜也。」とあるから、此の「臣の木」は舒明天皇の行幸の際の由緒ある木である。○生ひ繼ぎにけり　舒明天皇行幸當時の木は枯れて、今は新たな木が生え代つてゐる意。○鳴く鳥の　此の「鳥」は右に掲げた風土記中に見える斑鳩と鵤とを追想して歌つたのである。斑鳩は俗に「まめまはし」と云ふ雀科に屬する小鳥で、全身灰色で頭と尾とが黑い。鵤は斑鳩に似て稍大きく、背と尾は紫色で、頭と腹が黃白色で黃色の斑點がある。○遠き代に神さび行かむ　遠き將來の代までいよ〳〵神々しくなつて行くであらう。○行幸處　初に記した通り、五度に亙つて行幸啓のあつた處を云ふ。

【譯】皇神にまします代々の天皇が治め給うてゐる、此の日本國の到る處に溫泉は澤山にあるけれども、中でも此の伊豫の國は山の景色の美しい國として、嶮岨な伊豫の高山の射狹庭の岡に、昔聖德太子がお立ちになつて、歌や碑文を思ひ廻らし給うたといふ、此の溫泉の附近の森を眺めると、嘗て舒明天皇が行幸遊ばされた時にあつたといふ彼の樅の木も、今は新しく生え代つてゐることである。又其の木に留つたといふあの小鳥も、今に昔と變らず鳴いてゐる。かうして此の行幸の地は、永遠にいよ〳〵神々しくなつて行くであらう。

【評】此の一篇は伊豫の溫泉に遊んだ作者が、往時を懷古して歌つた作である。此の溫泉は古く五度に亙つて行幸啓があつたといふ歷史的背景を有する地であるから、作者も此等の史實を想ひ浮べて、此の地を神々しくも又懷しく感じたのである。併し赤人は人麻呂と異なつて自然歌人であるから、熱情的主觀を以て歌はずして、樹木や鳥の聲を寫して、專ら敍景的敍事的に歌つてゐる。尤も敍景は一部分で、一首の過半は敍事的に伊豫の溫泉を禮讚し祝福する詞から成つてゐるから、此の歌には赤人の特色は餘り多く表れてゐない。要するに斯くの如き題材を歌ふ事は、赤人としては寧ろ不得意であつたのである。

反歌

三二三　百磯城の　大宮人の　飽田津に　船乘りしけむ　年の知らなく
百式紀乃　大宮人之　飽田津爾　船乘將爲　年之不知久

【釋】○百磯城の　「大宮」の枕詞。（既出）○飽田津に　原文の「飽田津」を考にアキタヅと訓み、槻落葉所引の西村重波の說には、飽田津の地名が存してゐると云つてゐる。又略解には「飽」を「饒」の誤として饒田津と訓んでゐるが、元來「飽」に「饒」の意があるから兩者通じ用ゐたものと見て、原の儘をニギタヅと訓むのが穩かである。飽田津は（八）に說明した通り、今の溫泉郡三津濱町の古名であらうと言はれてゐるが、桑原達雄氏の報ずる所に據れば、此の邊は地形の變化があつたので、昔の湊は溫泉とさほど離れてゐなかつた事は確かである。現に溫泉の西に在る御幸寺山（五度の行幸啓の行宮址と傳へてゐる所）には、昔時潮が寄せてゐたと傳へられて居り、又蠣殼の附著した岩を其の山から發見した事もあるとの事である。さすれば飽田津は三津濱町の海濱より一里餘も陸地に

入つた、松山市の北邊に相當する事になる。○船乗りしけむ　攷證に、これは齊明天皇の行幸せられた際に、額田王が詠まれた「熟田津に船乗りせむと云々」(八)の御歌を想ひ浮べて、齊明天皇の行幸の時の事を追懐して詠んだのであると云つてゐる。然し五度の行幸啓は總て此の港に發著せられたのであるから、攷證の如く時代を限定する必要はない。○年の知らなく　「知らなく」は知らぬことよの意。それ以來幾年を經たか年數も知れぬ程であるの意。

【譯】昔大宮人たちが此の飽田津の湊で船に乗つて、海上に乗り出した時以來、もう幾年を經たことか、隨分昔のことである。

登三神岳一山部宿禰赤人作歌一首幷短歌

三二四　三諸の　神名備山に　五百枝さし　繁に生ひたる　樛の樹の　彌繼ぎ繼ぎに
三諸乃　神名備山爾　五百枝刺　繁生有　都賀乃樹乃　彌繼繼嗣爾

玉葛　絶ゆる事なく　在りつつも　止まず通はむ　明日香の　舊き京師は　山
玉葛　絶事無　在管　裳不止將通　明日香能　舊京師者　山

高み　河とほしろし　春の日は　山し見が欲し　秋の夜は　河し清けし　朝雲
高三　河登保志呂之　春日者　山四見容之　秋夜者　河四清之　旦雲

に　鶴は亂れ　夕霧に　河蝦はさわぐ　見るごとに　音のみし泣かゆ　いにし
二　多頭羽亂　夕霧丹　河津者驟　毎見　哭耳所泣　古

へ思へば
思者

【釋】○神岳　飛鳥村雷に在る雷岳である。既出(一五九)參照。飛鳥川は此の岡の南から西を廻つて、西北へ流れてゐる。○三諸の神名備山に　雷岳を云ふ。「三諸」は御室の義で、神の鎭まります所を云ふ。從つて「三諸山」は神を祀れる山を云ふ。(九四)參照。次に「神名備」を祝詞考に「神の森」の約まつた語であると云ひ、金澤博士は「なび」は朝鮮語の namu(木)と同系統で、「かむなび」は卽ち神木の義であると言はれてゐる。(『國語の研究』)要するに「神なび」は神を祀つた森又は山を云ふ。「神なび山」は元來普通名詞であるから、此の名を以て呼ばれる山は大和の三輪山・龍田山・神岳などの外にも、出雲國・山城國・肥前國など諸處に在る。又飛鳥川や龍田川を「甘南備河」、飛鳥の里を「甘南備の里」、飛鳥川の淵を「神名火の淵」などと云つた例もある。○五百枝さし　多くの枝をさし伸べての意。○樛の樹の　冒頭から此の句までの五句は、神岳の眼前の景を歌つて序詞としたのである。卽ち「つがの樹の」は(二九)に於ける場合と同樣に、ツガといふ音から「彌繼ぎ繼ぎに」のツギといふ音を導いてゐる。○玉葛　「絶ゆる事なく」の枕詞。「玉」は美稱の接頭語。葛葛は長く這ひ纏うて容易に絶えないものであるから、譬喩的枕詞としたのである。○在りつつも　「在りつつ」は「在有而後も逢はむと」(三一一三)の「在り在りて」と同じ意で、卽ち絶えず斯うしてゐての意であるが、ここは生き長らへてと譯して差支ない。既出(八七)參照。○止まず通はむ　略解にツネニカヨハムと訓んだのは從ひ難い。「通はむ」の「む」は連體形である。○明日香の舊き京師は　明日香淨御原宮の舊址をいふ。其の位置は(二二)で述べた。○山高み　通例形容詞の語幹に「み」を添へる

と、……の故にといふ意味の副詞的修飾語になるが、此の場合の「み」は稍意味が輕い。從つて「山高み」は山が高くしての意と見るべきである。さて此の「山」を童蒙抄・古義・註疏・新考などに、神岳を指したものと見てあるが、

雷岡より飛鳥京址を望む

神岳は小高い丘で決して「山高み」と云ふべき程の山ではない。飛鳥の地から眺めると、遙か西に葛城山脈が高く聳え、稍近くは野口・五條野邊の丘陵が指呼の間に見え、又東には近く多武峰の山彙があり、それから南へかけて高取山や吉野の連山が屏風を廻らしたやうに見えるから、ここはそれらの三方の山並を指したのであらう。○河とほしろし　「とほしろし」の語義に就いては從來兩說があつた。卽ち(イ)大なりの意とする說(代匠記・考・新考等)と、(ロ)あざやか又はさやけしの意とする說(小琴・槐落葉・略解・古義・全釋等)とである。此の語に關して近頃橋本進吉博士が信憑すべき研究を發表せられたから、左に其の大要を紹介して置く。――(ロ)の說の根據は、此の語の「しろし」が「いちじろし」(顯著)又は「しろし」(白)等と關係があるものとする點にあるが、然し「とほ」の說明は不完全である。上代の特殊假名遣の上から見ると、「とほしろし」の「ろ」には「呂」の假名を用ゐ、「しろし」(白)「いちじろし」(著)の「ろ」には「路」の假名を用ゐてゐる。然るに「呂」と「路」とは別類の假名に屬してゐるから、「とほしろし」の「しろし」と「いちじろし」等の「しろし」とは、發音を異にした別語である事を認めねばならぬ。次に(イ)の說の根據としては



契沖は、寛永版日本紀の訓に「集二大小之魚一」(ツドヘテオホキニチヒサキイヲトモ)とあり、又應永年間書寫の奥書のある日本紀私記にも、「大小之魚」(止乎之呂久知比左岐)とある事等を擧げてゐる。其の外『大唐西域記』の訓に「人骸偉大」(はねとほしろし)とあり、又中世の歌學書に謂ふ「遠白體」も雄大偉大の意味であり、今鏡や愚管抄に見える用例も皆同樣である。ただ萬葉に「とほ」とあり、後世の用例には皆「とを」と記してある事が問題になるが、これは平安朝中期以後に「とほ」と「とを」とが全く同音に歸した爲、兩者の假名を混同したのであるから、假名の違は問題にする必要がないのである。因つて萬葉の「とほしろし」も大きい意である。――といふのである。(『奈良文化』第六號所載「とほしろし考」參照)○山し見が欲し　「し」は強く指示する助詞。「見が欲し」は「見まく欲し」と同義で、見たいと思ふ意。「見」は此處では見ることの意味の體言である。古事記に「吾が美賀本斯(ミガホシ)國は葛城高宮吾家(わぎへ)のあたり」、集中に「山からや見我保(ミガホ)之からむ」(三九八五)などの用例がある。山の景色が美しいので常に見たく思ふといふ意。○河し清けし　河の景色が清くさつぱりとしてゐるのを云ふ。「きやけし」は(三一四)に於ける用例や、又「行く水の音も佐夜氣久(サヤケク)」(四〇〇三)などの如く、サラ〳〵と流れる水音に就いて云ふ場合もあるが、此の歌の場合は「ここばくも見の佐夜氣吉か」(三九九一)「山川の佐夜氣吉見つつ」(四四六八)等の用例と同じく眺めに就いて云ふ。秋の澄んだ月夜に川が白く光つて流れる景色を歌つたのである。○河蝦はさわぐ　集中に詠まれてゐる「かはづ」は、田や沼池等に棲んでゐる蛙ではなく河鹿である。河鹿は蛙と同じく赤蛙科の動物で、形態は甚だ類似してゐるが、是は山川の清流に棲み、春の末から秋にかけて鳴くのであつて、其の澄んだ美しい鳴聲が萬葉人に特に愛せられたのである。今も吉野地方を始め諸國の方言では、河鹿を「かはづ」と呼んで、通常の蛙と區別して居る。「かはづ」を詠んだ歌に「佐保河の清き河原

に鳴く千鳥河津と二つ忘れかねつも」(一一二三)「瀬を速み落ちたぎちたる白浪に川津鳴くなり朝夕ごとに」(二一六四)等がある。因みに飛鳥川は今は水が涸れて河鹿もゐなくなつたが、吉野川や伊勢の五十鈴川等には澤山ゐる。○見るごとに　此の美しい景色を來て眺める毎に。○音のみし泣かゆ　流布本の訓にネニノミナカルとあるが、槻落葉の訓に從つて改めた。○いにしへ思へば　天武天皇が此處に都せられた往時を懷古すると。

【譯】三諸の神名備山に、數多くの枝を伸ばして生ひ茂つてゐる樛の木の、其の名の通りつぎ〳〵にいつまでも絶える事なく、此の儘永らへて常に通つて眺めたいと思ふ飛鳥の舊都の地は、四圍の山が高くして、川の流れも雄大である。春の日には山の景色が美しいので、いつまでも見てゐたく思はれる。又秋の夜は河の流れが清くさやかに眺められる。朝の雲をかすめて鶴は亂れ飛び、夕霧の立ち籠めた川邊に河蝦は鳴き騒いでゐる。此の美しい景色を見るごとに、舊都の榮えた往時が憶ひ出されて、聲を立てて泣かれるばかりである。

【評】これは敍景歌人赤人の代表作の一である。先づ最初に神岳の栂の木の神々しく物古りて、生ひ茂つた樣を敍して序詞としたのが巧みであるが、作者の詩才は更に後半の舊都の敍景の部分に於て、最もよく發揮せられてゐる。古京の山川風物を敍するに、山と川・春と秋・朝雲と夕霧をそれぞれ對したのは、漢詩の影響を受けたのであるが、之に據つて春秋朝夕など時に應じて變化する、雄大にして優美な舊都の風物が、繪畫的印象的に描き出されてゐる。かくて此の長歌は、自然の景趣と懷古の情緒との交錯された、一篇の美しい敍景的抒情詩となつてゐるのであるが、是を人麻呂が大津宮の遺蹟に立つて詠んだ(二九)と對比する時には、熱情の稀薄な點に於て一歩を讓るものと謂はねばならぬ。蓋し此の二首は、兩歌人の特徴を見るのに最も適切な資料であらう。

反歌

三二五　明日香河　川淀去らず　立つ霧の　思ひ過ぐべき　戀にあらなくに

明日香河　川余藤不去　立　霧乃　念　應　過　孤悲爾不　有國

【釋】○川淀去らず　新解に「川淀の盡くに、川淀毎に」と解かれたのは、「去らず」を「落ちず」と同じ意に見られたのであらう。「去らず」はやはり「夕されば山を左良奴布雲の」(三五一三)の場合と同じく、其の場所を動かぬ意である。○立つ霧の　立ちこめてゐる霧の如くの意で、以上三句は飛鳥川の實景を歌つて、以下二句の抒情に對する譬喩的序詞としたのである。即ち「川淀去らず」が思ひ過ぎぬ事の譬喩で、「霧」が戀の象徴になつてゐるのである。此の三句を古義・新解・全釋等に、單に「思ひ過ぐ」の「過ぐ」に懸る序と見てゐるのは從ひ難い。○思ひ過ぐべき　「思ひ過ぐ」は思ひが過ぎ去る、即ちやがて思ひが消える意である。「朝に日に色づく山の白雲の可思過君にあらなくに」(六六八)「清き瀬に朝夕ごとに立つ霧の於毛比須疑米夜」(四〇〇〇)などの例を參考すべきである。○戀にあらなくに　「戀」はここでは舊都を戀ひ慕ふ心をいふ。戀ではないものをの意。

【譯】飛鳥川の川淀にいつもぢつと立ち籠めてゐる霧のやうに、自分の舊都を戀ひ慕ふ氣持は、いつまで經つても消え失せるやうな事はない。

【評】動くこともなく淀の上に立ちふさがつてゐる川霧を捉へて、心の象徴としたのは技巧の妙を得てゐる。情景融合の境地を歌つた作と言つてよい。更に格調を見ると、上二句はカの音の反復によつて調が整へられて居り、結尾句が八音であるのは、深い感情を表現する有效な句形となつてゐる。

## 太宰少貳小野老朝臣歌一首

三二八　青丹よし　寧樂の京師は　咲く花の　匂ふが如く　今さかりなり
青丹吉　寧樂乃京師者　咲　花乃　薫　如　今　盛　有

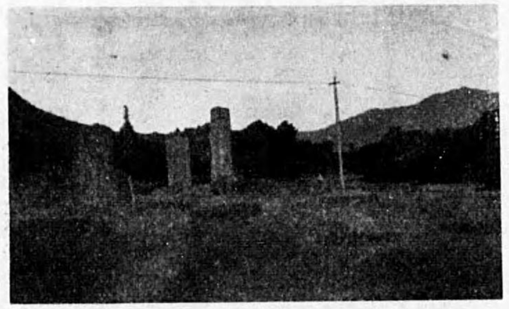
【釋】○太宰少貳小野老　職員令に據れば、太宰府の長官を帥といひ、其の下に大貳一人少貳二人を置かれたのである。小野老は續日本紀に據れば、養老三年に正六位下を授けられ、同四年に右少辨となり、斯くて累進して天平九年に太宰大貳從四位下で卒した。なほ萬葉に據れば、天平二年には太宰少貳で、太宰帥大伴旅人の部下であつた事が知られる。歿年は續日本紀に天平九年六月とあるが、正倉院文書中の天平十年の駿河國正税帳、及び同年の周防國正税帳の斷簡（共に『南京遺芳』所收）に據れば、天平十年に病の療養の爲那須溫泉に赴き、同年六月十一日に彼の地で歿したのである。續日本紀の記載は恐らく誤記であらう。（『心の花』第三十卷第三號所載橋本進吉博士論文「小野朝臣老」參照）○匂ふが如く　「薫如」を童蒙抄にカヲレルゴトクと訓んでゐるが、流布本の訓にニホフガゴトクとあるのがよい。此の「匂ふ」は馨る意ではなく、色が美しく照り映える意味である。（二一一）の「にほへる妹を」參照。

【譯】奈良の都は、咲き誇つてゐる花が美しく照り映えるやうに、今しも全盛の時である。

【評】太宰府に在る作者が、天平時代の文化の爛熟した奈良京を思慕し謳歌した作である。平明な作であるが、「咲く花の匂ふが如く」の譬喩によつて、極めて端的に如實に文化極盛期の都の有樣を表現してゐる。時の太宰帥大伴旅人が、其の花の咲き匂ふが如き奈良の都を慕つて詠んだのが、次に講ずる歌である。

## 帥大伴卿歌三首（○原五首の中）

三三一　吾がさかり　またをちめやも　ほとほとに　寧樂の京師を　見ずかなりなむ
吾盛　復將變八方　殆　寧樂京師乎　不見賦將成



太宰府都府樓の址

【釋】○帥大伴卿　太宰帥大伴旅人卿である。旅人は大納言大伴安麻呂の第一子で、家持の父である。旅人の閲歴は續日本紀及び萬葉集等によつて知る事が出來る。續日本紀に據つて其の經歴を記せば、和銅三年正月に左將軍正五位上とあるのを初見とし、同七年十一月には左將軍を拜し、靈龜元年五月に中務卿に任ぜられ、養老二年二月に中納言を兼ね、同年九月に山背國攝官となり、四年三月に征隼人持節大將軍を命ぜられて大隅の隼人を征し、養老五年に從三位、天平三年に從二位に累進して、同年七月二十五日に大納言從二位で薨じたのである。なほ集中の題詞・作歌・左註等に據れば、旅人は神龜年間には六十餘歳で太宰帥として、妻を伴なつて筑紫に下つて居り、同五年の夏に妻を喪ひ、天平二年に瘡を病んでゐる。其の年十一月に大納言に兼任せられて十二月に上京の途に著き、歸京して幾何もなく翌年七月に六十七歳で薨じたのである。旅人が筑紫に在る頃、憶良は筑前守であつて、部下として親しく往來してゐた。旅人は萬葉集

代表歌人の一人であつて、其の歌は卷三・四・五・六・八に短歌(長歌は僅かに一首)が八十首近く傳はつて居る。それらは殆ど全部太宰府に赴任して以後の晩年の作であつて、其の中の代表的な作は望郷の歌・亡妻を偲ぶ歌・酒を讃むる歌・松浦河に遊ぶ序並に作歌等である。旅人は憶良と同樣に漢文學の造詣が深く、從つて漢文にも堪能であつた。又作歌の上には支那思想や支那文學の影響の著しく現れてゐるのが特色である。以下講ずる三首は、太宰府に在つて都を慕つて詠んだものである。

○またをちめやも　「復將變八方」を類聚古集・西本願寺本等にマタカヘラメヤ、代匠記初稿本にマタカヘレヤモ、代匠記初稿本にマタカヘラメヤ、考にマタカヘラメヤモと訓んでゐるが、小琴にマタヲチメヤモと訓んだのが妥當である。動詞「をつ」の假名書の例は、同じく旅人の作に「我が盛りいたくくだちぬ雲に飛ぶ藥食むともまた遠知めやも」(八四七)「雲に飛ぶ藥食むよは都見ばいやしき吾が身また越知ぬべし」(八四八)の如きがある。此の外「をち」の用例には「月よみの持てる越水い取り來て君に奉りて越得しむもの」(三二四五)「ゆめ花散るないや乎知に咲け」(四四四六)等がある。「をつ」は元へかへる意味であるが、多くは若返る意に用ゐてある。「め」は助動詞「む」の已然形で、「や」は反語の助詞。再び自分の壯年時代が戻つて來る事があらうか、若い盛りは二度とないといふ意。○ほとほとに　假名書の例に「保等穗跡妹に逢はず來にけり」(一九七九)「保等保登死にき君かと思ひて」(三七七二)等がある。後世の「ほとんど」(殆)の古形である。意味用法も「殆ど」と大體同じである。此の句は下の「なりなむ」に懸つてゐる。○見ずかなりなむ　「か」は疑問の助詞。一句の最後に置くと意がよく通じる。

【譯】私の若い時代が又と歸つて來ることがあらうか。恐らくはもう奈良の都を見ずして世を終るのであらう。

【評】六十を越して既に老境に入つた作者が、都を遙かに隔つた僻陬の地に於て、再び都を見ずして此の地に朽ち果てるのではあるまいかと、悲觀的に老を嘆じた歌である。率直平明な中に實感が流露してゐる。

三三一　吾が命も　常にあらぬか　昔見し　象の小川を　行きて見むため
吾命毛　常有奴可　昔見之　象小河乎　行見爲

【釋】○常にあらぬか　「ぬ」は否定の助動詞。「か」は疑問の助詞であるが此處では感動助詞として用ゐてある。「ぬか」は元來感動的に否定的事實を述べる形であるが、轉じて非現實を假想して願望の意を表すのである。例へば「吾が待つ月も早も照奴賀」(一三七四)「思ふどち遊ぶ今夜は明けずもあ有奴香」(一五九一)「人も無き國も有粳」(七二八)、又「ぬか」の下に感動助詞の「も」を添へて同じく願望の意を表した例に、「夜渡る月を留めむに西の山邊に關も有樓毛」(一〇七七)「三笠の山に月も出奴可母」(一八八七)等がある。一句はいつまでも續かないものであらうかの意。○象の小川を　吉野郡中荘村に大字喜佐谷の名が遺つてゐる。此の地は吉野川を隔てて北の宮瀧と相對してゐる。今喜佐谷を南から北へ流れて吉野川に注いでゐる川が卽ち象の小川である。(九四頁の地圖參看)旅人は中納言時代に芳野離宮への行幸に陪從して、「昔見し象の小川を今見ればいよよ清けくなりにけるかも」(三一六)の歌を詠んでゐるから、此の川の流域の幽邃な景色を常に愛してゐたのである。

【譯】せめて私の命なりともいつまでも續くものであつて欲しい。昔見た吉野のあの象の小川を、今一度行つて眺めたいと思ふから。

【評】壯年時代に屢遊んだ吉野山中の象の小川の佳景を憶ひ起して、頽齡を嘆じつつも今一度此の佳景に接したい

ものであると、望郷の念の堪へ難さを歌つたのである。其の心情には哀れ深いものがある。

三三三　浅茅原　つばらつばらに　もの思へば　古りにし里し　思ほゆるかも

浅茅原　曲　曲　二　物　念　者　故　郷之　所　念　可聞

【釋】○浅茅原　「茅」は禾本科植物の「ちがや」の異名で、其の花は俗に「つばな」（茅花の轉）と云ふ。「浅茅原」の「浅」は「浅小竹原」のそれと同じく、丈の低い意であつて、茅が低くはえてゐる野原を云ふ。「浅茅生」と云ふのも同じである。此處ではチハラとツバラとの音の類似によつて「つばら」の枕詞に用ゐてある。○つばらつばらに　「曲曲二」を流布本にトサマカクサマニと訓んであるが、代匠記初稿本にツハラツハラニと訓んだのがよい。「つばらに」は審かにの義で、ここはつくづくとの意である。〔一七〕の「つばらに」參照。○古りにし里し　「故郷之」を流布本にフリニシサトノと訓み、諸註は之に從つてゐるが、集中に「間なくこのごろ日本師所念」（三五九）「妹が袂師所念鴨」（一〇二九）「吾妹が宿志所念香聞」（一五七三）の如き例が幾らもあるから、それらに倣つて、古義の訓の通りフリニシサトシと訓むべきである。「し」は強く指示する助詞。「古りにし里」は永年住み馴れた土地を云ふ。〔一〇三〕參照。

【譯】つくづくと物を考へて見ると、とりわけ自分の故郷が懐かしく思はれる事である。

【評】上二句に於ける同音の繰返しが快い音調をなしてゐる。一首のなだらかな詠歎的な調の中に、しみ〴〵と物思ひに沈んで、家郷を戀ひ慕つてゐる氣持がよく出てゐる。

三三六　しらぬひ　筑紫の綿は　身につけて　未だは著ねど　暖けく見ゆ

沙彌滿誓詠レ綿歌一首

白　縫　筑紫乃綿者　身　著　而　未　著　伎　禰　杼　暖　所　見

【釋】○沙彌滿誓　「沙彌」は前に一言した通り、梵語のSramanera（室羅末尼羅）の轉訛で、『釋氏要覽』に「此始落髪後之稱謂也。此譯爲二息慈一云々」とある通り、佛門に入つたばかりの男を云ふ。滿誓は俗名を笠朝臣麻呂と云つた。續日本紀に據れば、慶雲三年美濃守に任ぜられ、靈龜二年尾張守に兼任せられ、養老三年按察使を設置せられるに際して、尾張・參河・信濃の三國を管せしめられ、同四年右大辨となり、翌五年太上天皇（元明天皇）御不豫の爲に出家入道を請うて勅許を得、同七年筑紫に觀世音寺（其の址は今筑紫郡水城村に在り、太宰府址の西に當る。六〇九頁地圖參看）を建立せられるに當り、彼の地に遣はされて別當となつた人である。歿年は未詳。○しらぬひ　流布本の訓にシラヌヒノとあるが、假名書の例には總てノが無いから、考にシラヌヒと訓んだのに從ふ。「筑紫」の枕詞である。語義に關して從來一般に行はれたのは、燭明抄を始め代匠記・童蒙抄・冠辭考等に見える說である。それは景行天皇紀十八年の條に見える「五月壬辰朔、從二葦北一發船到二火國一、於レ是日沒也。夜冥不レ知二著岸一、遙視二火光一、天皇詔二挾抄者一曰、直指二火處一、因指レ火往之、卽得レ著レ岸。天皇問二其火光處一曰、何謂邑也。國人對曰、是八代縣豐村。亦尋二其火一、是誰人之火也。然不レ得レ主、玆知レ非二人火一、故名二其國一曰二火國一。」といふ傳說に基づいて、不知火の義を以て「筑紫」の枕詞としたのであると云ふのである。此の外古義の一說には

白野火の義で、「白」は明るい意であつて、野火が附くといふ意で、同音の「筑」に懸るのであらうと云つてゐる。一體此の枕詞の假名書の例には「斯良農比」(七九四)「之良奴日」(四三二一)とあつて、其のヒに當る假名「比」「日」は共に特殊假名遣の上ではヒの甲類の假名に屬して居る。又此の歌の「白縫」の「縫」も和名抄に「縫殿寮(奴比止乃豆加佐)」とあり、又同書に「出雲國楯縫(多天奴比)」とあるから、「縫」のヒの假名は甲類である事が明瞭である。然るに「火」はヒの乙類の假名に屬してゐるから、從來「しらぬひ」の「ひ」を火の義と見て解いた諸說は、何れも假名遣の上から見て妥當でない。要するに此の枕詞の語義はなほ今後の研究を要する。○筑紫の綿は　「筑紫」は古事記に「筑紫島」とあるやうに、九州全體を指す場合もあるが、ここは後の筑前筑後を合せた筑紫國をいふ。此の綿は眞綿ではなく木綿であつて、元印度の產で、それが支那を經て當時我が國にも輸入せられたのである。太宰府から年々綿を朝廷に獻つた事は、續日本紀の神護景雲三年の條に、「三月乙未、始每年運二大宰府綿廿萬屯一以輸二京庫一」とあり、又延喜內藏式に「白綿二千屯(越中石見各五百屯、太宰一千屯)」とあるのによつて知られる。○暖けく見ゆ　「暖所見」を流布本にアタタカニミユと訓んであるが、古事記傳の說に據つて、古義にアタタケクミユと訓んだのがよい。「あたたけく」は形容詞の「あたたけし」の連用形で、「あたたけし」は副詞の「あたたかに」の「か」が「け」に轉じ、之に形容詞の語尾が附いたものである。同類の形容詞に「明(あきら)けし」「淸(さや)けし」「のどけし」「連(つらな)けし」等がある。

【譯】筑紫の國から來た綿は、未だ身につけて著て見たことはないが、如何にも暖かさうに見える。

【評】綿を始めて見た時の實感が率直に歌はれてゐて面白い。攷證に此の歌を譬喩歌と見て、綿は女を譬へたのであつて、女を見て戲れに詠んだ作であると云つてゐるのは、考へ過ぎた說である。

山上憶良臣罷レ宴歌一首

レ三三七　憶良らは　今は罷らむ　子泣くらむ　其の子の母も　吾を待つらむぞ

憶良等者　今者將罷　子將哭　其子母毛　吾乎將待曾

【釋】○山上憶良臣　傳は後に記す。〔七九四〕參照。○罷レ宴　ウタゲヲマカルと訓む。饗宴の席上から退出する意。○憶良らは　此の「ら」は語調を整へる爲の接尾語であつて、複數を表すのではない。○其の子の母も　流布本に「其彼母毛」とあつて、之をソノカノハハモと訓んである。諸註は是に從つてゐるが、槻落葉にはソモソノハハモと訓んで、其の子も其の母もの意と解き、新解にはソレソノハハモと訓んで、「それ」は語調を強める爲に添へた副詞と見てある。併し古葉略類聚鈔に「彼」は「子」とあつて、ソノコノハハモと訓んでゐるのに從ふべきである。○吾を待つらむぞ　「吾乎將待曾」を流布本にワレヲマタムソ、古義にアヲマツラムゾと訓んでゐるが、今は槻落葉に從つてワヲマツラムゾと訓む。最後の「ぞ」は語勢を強める係助詞であつて、活用語の下に附いて文を終止する場合には連體形を承ける。

【譯】憶良はもうおいとま致しませう。家では子供が泣いて居るでありませう。又其の子供の母も私を待つてゐることでせうから。

【評】憶良は後にも述べる通り、家庭生活を樂しんだ子煩惱の人である。萬葉歌人の多くが數限りない戀愛歌を詠んだのに對して、憶良は又性愛の深い人で歌を數首遺してゐるのは、極めて注目すべき事である。此の歌は宴席に

列した憶良が、子を思ひ妻を思ふ餘りに、中座する時の挨拶の歌であるが、妻子を思ふ眞情を率直に僞らずに敍べたのが貴い所である。一首の音調は、ラ及びラムの音が韻律的に反復せられて、流麗であり且輕快である。

太宰帥大伴卿讃レ酒歌十三首

三三八　驗なき　物を思はずは　一坏の　濁れる酒を　飲むべくあらし
驗無　物乎不　念者　一坏乃　濁　酒乎　可　飲　有良師

【釋】○讃レ酒歌　サケヲホムルウタと訓む。○驗なき　「しるし」は集中に「持てれども之留思を無みと」(三六二七)「見る之留思なし旅にしあれば」(三六七七)等と用ゐられてゐる。何の甲斐も無い無益なと云ふ意。○物を思はずは　流布本の訓にモノヲオモハスハとあるが、古義にモノヲモハズハと七音に訓んだのがよい。「思はずは」のズハをズバと訓むのは誤である。物を思はずしての意。「ずは」に就いては(八六)で説明した。○一坏の　「坏」は皿のやうな食器で、上古には專ら土器を用ゐた。酒を盛るのを「酒坏」と云ひ、平たい皿のやうなのを「平坏」と云ひ、高い脚の附いたのを「高坏」と云ひ、燈油を盛るのを「油坏」(燈盞)と云ふ。「一坏の」は一杯のといふ意。○濁れる酒を　清酒に對する濁酒、即ち粕を漉してない濁醪のこと。○飲むべくあらし　「可飲有良師」を流布本にノムベクアラシ、童蒙抄にノムベカルラシ、新考にノムベクアルラシと訓んである。「有良師」は假名書の例の「來鳴かす安流良之」(三九八四)に據つて、アルラシと訓んでもよいが、「あるらし」は通例「吾が旅は久しく安良思」(三六六七)の如く、約まつて「あらし」となるのであるから、今は流布本の訓に從ふ。飲む方がよいやうであるの意。

【譯】つまらない事をくよ〳〵と考へないで、一杯の濁酒を飲む方がましのやうぢや。

【評】酒好きがとかく口にするやうな事を、無造作に歌つてのけたといふ感じのする作である。

三三九　酒の名を　聖と負せし　古の　大き聖の　言のよろしさ
酒　名乎　聖跡負　師　古昔　大　聖之　言乃　宜　左

【釋】○聖と負せし　「負師」を流布本にオヒシ、代匠記にオフセシ、槻落葉にオフシシと訓んであるが、類聚古集及び略解にオホセシと訓んだのがよい。「おほす」の用例には「馬に太馬に於保世持て」(四〇八一)「靫取り於保世」(四四六五)等がある。酒に聖といふ名を負はせたといふ意。これは『魏志』に「太祖禁レ酒、而人竊飲レ之。故難レ言レ酒。以二白酒一爲二賢者一、以二清酒一爲二聖人一。」とある故事に據つたのである。○大き聖の　酒を聖と名附けた魏の人を指して、戯れて大聖人と云つたのである。○言のよろしさ　其の言葉の何と結構なことであらうの意。

【譯】酒の名を「聖人」と名附けた昔の大聖人の言葉は、何とよく出來てゐるではないか。

【評】作者は酒を隱語で呼ばなければならぬ程の、窮屈な異國の昔と今とを比較して、微笑を洩したであらうが、吾々は誰が言ひ出したとも知れぬ隱語の創始者を假想して、勿體らしく「大き聖」と云つたのを更に面白く感ずる。

三四〇　古の　七の賢しき　人等も　欲りせしものは　酒にしあらし
古之　七　賢　人等毛　欲　爲　物　者　酒西　有良師

【釋】○七の賢しき人等も　原文の「賢」を流布本にカシコキと訓んであるが、攷證及び古義の所説の通り、「かしこし」は上代に於ては恐ろし又は畏多しの意に用ゐたのであつて、賢の意の場合は「さかし」と云つたのであるから、ここは古義の訓のサカシキが妥當である。仁德天皇紀に「賢遺、此云二左河之能莒里一」と訓註を施してあり、

又『肥前國風土記』に「賢女」をサカシメと訓んであるのを證とすべきである。次に「人等」を類聚古集・古葉略類聚鈔等にヒトトモ、仙覺抄にヒトトチ、童蒙抄にヒトタチと訓んである。複數を表す接尾語としては古く「たち」「ども」何れも用ゐたのであつて、「齋へ神多智」(四二四〇)「海人處女登母」(三八九〇)等の例がある。今はヒトドモと訓んで置く。「七の賢しき人等」は所謂竹林の七賢であつて、『晉書』の嵇康傳に「康所二與神交一者、惟陳留阮籍、河内山濤、豫二其流一者河内向秀、沛國劉伶、籍兒子咸、瑯琊王戒、遂爲二竹林之遊一世所レ謂竹林七賢也。」とある。

○欲りせしものは　流布本の訓にホリスルモノハとあるが、考にホリセシモノハと過去にして訓んだのがよい。「欲りす」は動詞の「欲る」と「す」とが複合したもので、後には音便によつて「欲す」となつた。○酒にしあらし　原文の「有良師」はアルラシと訓んでも差支ない。上の「し」は強意の助詞。

【譯】昔晉の竹林の七賢人たちも、欲しがつたものはやはり酒であつたやうだ。

【評】七賢人の弱點を捉へて身方にした著想は面白いが、表現は散文的で平凡である。

三四一　賢しみと　物言ふよりは　酒飲みて　醉泣するし　まさりたるらし
賢跡　物言　從者　酒飲　而　醉哭爲　師　益　有　良之

【釋】○賢しみと　「賢跡」を流布本にカシコシト、童蒙抄にサカシラト、古義にサカシミトと訓み、又新解にはサカシキトと訓んで、賢しき人との意に解いてある。これは古義の訓釋に從ふべきである。卽ち「賢しみ」の「み」は此處では理由を表すのではなく、輕い意味で添へたのであつて、賢しくの意である。終の「と」は副詞的修飾語を作り狀態を表す助詞である。これと同じ「と」の用例に「知らに等妹が待ちつつあらむ」(二二三)「そこも飽かに等布勢の海に船浮け据ゑて」(三九九一)等がある。一句は賢こぶつての意である。○物言ふよりは　槻落葉にモノイハムヨハと訓んであるが、流布本の訓にモノイフヨリハとある方がよい。○醉泣するし　「醉ふ」を古く「ゑふ」と言つた證には、古事記に「須須許理が釀みし御酒に我惠比にけり」がある。○まさりたるらし　流布本の訓にマサリテアルラシとあるが、童蒙抄にマサリタルラシと訓んだのがよい。

【譯】利口振つて物を言ふよりは、寧ろ酒を飲んで醉泣をする方が、よほどまさつてゐるやうだ。

【評】酒嫌ひの固苦しい人を嘲笑せんが爲に、人々が持てあます醉泣を却つて優つてゐると見たのは、著想が奇拔で面白い。

三四二　言はむすべ　せむすべ知らず　極まりて　貴きものは　酒にしあらし
將言爲便　將爲便不知　極　貴物者　酒西有良之

【釋】○せむすべ知らず　本文の「不知」を流布本にシラズと訓んでゐるが、考にシラニと訓み改めてゐる。佐伯梅友氏の說に據れば、「知らに」の場合には、次に來る事柄の理由といふやうなものを表し、「知らず」は單に狀態を表すのであつて、此の歌の場合は貴い狀態を云ふのであるから、シラニは適當でないと云ふことである。(『松井博士古稀記念論文集』所收「萬葉集『不知』の訓について」參照)○極まりて　考にキハミタル、槻落葉にキハメタルと訓んでゐるが、流布本の訓のキハマリテがよい。

【譯】何と言つてよいかどうしてよいか、すべも知らない程此の上もなく貴いものは、酒であるやうだ。

【評】酒を讃美する言葉で終始したのは、他の作に比して稍見劣りがする。下二句も既に(三四〇)に用ゐてある。

三四三　なかなかに　人とあらずは　酒壺に　なりてしかも　酒に染みなむ
中中二　人跡不有者　酒壺二成而師鴨　酒二染嘗

【釋】○なかなかに　元來はなかば卽ち中途半端の意である。從つて集中の「思ひ絶え侘びにしものを中中爾何か苦しく相見そめけむ」（七五〇）の如きは、なまじつかといふ意であり、又「奈加奈可爾死なば安けむ君が目を見ず久ならば術なかるべし」（三九三四）の如きは、却つてと譯すべきである。ここはなまじつかといふ意。○人とあらずは　人と生れずしての意。「ずは」は既に說明した。○なりてしかも　「成而師鴨」を流布本にナリニテシカモ、攷證にナリテシガモと訓んであるが、槻落葉の訓に據つてナリテシカモと訓んで置く。さて「てしか」に就いて武田祐吉博士は、これは「てしか」と清音に訓むべきであるとの說を發表せられて居る。其の大意を左に紹介して置く。

――萬葉集に於ける「てしか」「てしかも」のカに當る假名を見ると、それらは「可」「加」「香」「然」「鹿」等で何れも清音のカに用ゐる文字であつて、ガと訓むべき字の用例は見當らない。從來是をガと訓む者のあるのは「……もが」の「が」と混同した爲であつて、「もが」の「が」（假名は「餓」「我」「賀」「鴨」等である）は希望を表す助詞で、必ず「も」を承けるのであつて、「てしか」の「か」とは別である。卽ち「てしか」の「て」は完了の助動詞、次の「し」は時の助動詞の「き」の活用形で、「か」は疑問を表す助詞から轉じて感動を表すのである。「てしか」が希望の意味を表すのは、さうなつてゐたらと歎ずるからであらう。――と云ふのである。（『國語と國文學』第八十七號所載「しかてしか考」參照）今は此の說に從つて「か」を清音に訓み、「てしかも」を強い願望を表す語形として解く。さて略解には此の二句を『吳志』にある鄭泉の故事に據つたのであると云つてゐる。是に就いて山田孝雄博士は、『吳志』には鄭泉傳なるものは無く、而も此の書は神護景雲三年に太宰府に賜はつたもので、旅人が帥であつた頃には太宰府に存しなかつた筈であるとし、名古屋市眞福寺藏の『琱玉集』は奈良朝の頃もてはやされた書であつて、其の中の嗜酒篇に鄭泉の話が見えてゐるから、作者は此の書に據つたのであらうと述べて居られる。（『藝文』第十五年第十一號所載「琱玉集と本邦文學」參照）卽ち『琱玉集』には「鄭泉字文淵陳郡人也。孫權時爲二太中太夫一。爲レ性好レ酒。（中略）臨レ死之日勅二其子一曰、我死可レ埋二於窯之側一。數百年之後化而成レ土、覬取爲二酒瓶一獲二心願一矣。出二吳書一。」と見えてゐる。○酒に染みなむ　槻落葉にサケニソミナムと訓んであるが、流布本の訓サケニシミナムが正しい。「染」をシミの訓假名に用ゐた例には「益目頰染」（一九六）「和備染責跡」（六四一）等がある。

【譯】なまじつか人間に生れてゐないで、寧ろ酒壺になつてしまひたいものだ。さうしたら斷えず酒に漬つて居られよう。

【評】酒を聖といつた故事や、竹林の七賢人を引合に出した作者は、更に酒に徹した滑稽な鄭泉を例に引いて放笑してゐる。無邪氣な歌である。

三四四　あな醜く　賢しらをすと　酒飲まぬ　人をよく見れば　猿にかも似る
痛醜　賢良乎爲跡　酒不飲　人乎熟見者　猿二鴨似

【釋】○あな醜く　「あな」は感動詞。「醜く」は形容詞「みにくし」の語幹であつて、斯樣に語幹を述語として用ゐた場合には感動の意が籠つてゐる。古語拾遺に「阿那於茂志呂」「阿那佐夜憩」といふ例がある。神武天皇紀の訓註に「大醜、此云二鞅奈瀰邇句一」とある通り、あゝ見苦しやの意である。○賢しらをすと　「ら」は屢形容詞の語幹にも

附く接尾語である。其の用例に「物悲良に思へりし」(七二三)「赤羅小船」(三八六八)「衣寒等に」(一八〇〇)等がある。「賢しら」は利口ぶること。○人をよく見れば　代匠記初稿本にヒトヲヨクミバと訓んでゐるが、今は考にヒトヲヨクミレバと改めたのに從ふ。○猿にかも似る　「似」は流布本の訓にニルとあり、代匠記にニン、槻落葉にニムと訓んである。第四句の終をミレバと已然形にすれば、ここをニルと訓むべきであり、ミバと未然形にすれば、ニムと訓むべきである。「かも」の「か」は疑問の係助詞であるから「似る」は連體形である。

【譯】あゝ見苦しいことだ。利口ぶつて酒を飲まない人をよく見ると、小賢しい猿に似てゐるわい。

【評】醉漢の方が却つて猿に似てゐるのであるが、それを逆に使つて、下戸を強く罵つてゐるのが面白い。酒の美味に耽溺してゐる時の醉狂の作である。

三四五　價無き寶といふとも　一坏の濁れる酒に　豈まさめやも
價無寶跡言十方　一坏乃濁酒爾　豈益目八方

【釋】○價無き寶といふとも　「價無き寶」は法華經の授記品の所謂「無價寶珠」の義であつて、價を以ては量り難い程の貴い寶の意である。○豈まさめやも　流布本に「豈益目八」とあるが、今は類聚古集古葉略類聚鈔神田本に「八」の下に「方」のあるのに據つて之を補ひ、訓は槻落葉に從つてアニマサメヤモと訓んで置く。「ます」は元來增加する意で、「まさる」は勝れてゐる意である。併し集中には「ます」「まさる」を共に增す意にも勝る意にも用ゐてゐるから、ここはアニマサラメヤ、アニマサメヤモの何れの訓に從つても差支ない。「秋萩凌ぎ鳴く鹿も妻に戀ふらく我には不益」(一六〇九)の「まさじ」は勝るまいの意であり、又「ほととぎすもとなな鳴きそ吾が戀麻左流」(三七八一)の「まさる」は增す意である。「豈」は「何」と同じでどうしての意。下は反語又は否定の形で結ぶのが常である。どうして勝ることがあらうかの意。なほ「あに」と「なに」のやうに、アとナと相通ずる例には「あぞ」と「なぞ」、「あど」と「など」、「あぜ」と「なぜ」等がある。

【譯】無價の寶といふ程の貴重な寶と雖も、一杯の濁酒にどうして勝らうぞ。

【評】此の歌や次の作には、第二句及び第五句の用語上に漢文直譯風の口調が表れてゐる。一體此の十三首には漢文式の表現法を用ゐて居り、又漢籍や佛典の故事或は用語を屢引用してゐるのであつて、漢文學の影響の著しい點に於て集中に異彩を放つてゐる。

三四六　夜光る玉といふとも　酒飲みて　心を遣るに　豈若かめやも
夜光玉跡言十方　酒飲而　情乎遣爾　豈若目八方

【釋】○夜光る玉といふとも　夜光の玉は支那の傳說に屢見えてゐる。例へば『史記』には「隋公祝元暢因之齊、道上見二一蛇將死。遂以水洒摩、傳二之神藥一而去。忽一夜中庭皎然有光、意謂有賊、遂案劒視之、迺見二一蛇、銜珠在地而往。故知前蛇之感報也。以珠光能照夜、故曰夜光云々」と見え、又『述異記』には「南海有珠卽鯨目瞳、夜可以覽、謂之夜光」とある。此の外『戰國策』などにも見えてゐる。夜光の玉の如き貴い寶と雖もの意。○心を遣るに　集中に用例の多い「思ひ遣る」と同じ意味で、憂ひを晴らすこと。○豈若かめやも　原文の「八方」の「方」は流布本に「目」とあるが、類聚古集其の他諸本に「方」とあるのに據つて改めた。

【譯】たとへ夜光の玉といふやうな立派な寶と雖も、酒を飲んで憂さを晴らす樂しみに、どうして及ばうか。

三四七　世の中の　遊びの道に　さぶしくば　醉哭するに　ありぬべからし
世間之　遊道爾　冷者　醉哭爲爾　可有良師

【釋】○遊びの道に　色々の遊藝の道に於ての意。○さぶしくば　原文の「冷者」に就いては種々の訓及び誤字説がある。流布本にマシラハハ、代匠記にオカシキハ、童蒙抄にスサメルハと訓んだのは何れも穩かでない。考にはサブシクハと訓んで「さぶし」を不樂の意と解き、小琴には「冷」を「怜」の誤字と見て、「さぶし」を「不怜」と記すから「怜」はタヌシと訓むべきであるとして、一句をタヌシキハと訓んで、世の中の遊びの道の中で第一の樂しい事はと解いてゐる。又古義には「冷」を拾穗抄に「洽」と記してあるのに據つて改め、アマネキハと訓んで、遺るくまなく心だらひなるはと解いてゐる。更に生田耕一氏は原の儘をスズシキハと訓んで、「すずし」は心持の清く爽かで、何のこだはりも無い境地を表すと解かれて居る。（『萬葉難語難訓攷』一五五―一七〇頁）以上の諸説を通觀すると、小琴の説が意味上からは最も穩かであるが、其の誤字説には遽かに從ひ難いから、今は姑く考の訓釋に從つて置く。但しこれは假定條件を示す句であるから、訓はサブシクバとすべきである。○ありぬべからし　「可有良師」を流布本にアリヌベカラシ、童蒙抄にアルベカルラシと訓んである。何れに從つても差支ないが、今は前者によつて置く。

○【譯】世間の種々の遊びの道に於て、どれとて面白くないならば、醉泣をするのが一番よいやうだ。

三四八　この世にし　樂しくあらば　來む世には　蟲に鳥にも　吾はなりなむ
今代爾之　樂有者　來生者　蟲爾鳥爾毛　吾羽成奈武

【釋】○この世にし　流布本に「今代爾之」とあるが、「代」は古葉略類聚鈔に「世」とある。拾穗抄の訓にはイマノヨニシとあるが、原文に「今代」とあるのは「現世」には人言しげし」（五四一）とある「現世」と同じく、來世に對する語であるから、コノヨと訓むべきである。○樂しくあらば　流布本の訓にタノシクとあるが、考にタヌシクと改めたのがよい。○蟲に鳥にも　「蟲にも鳥にも」と云ふべきのを、上の「も」を略したのである。同類の例に「門爾屋戸爾毛珠敷かましを」（一〇一三）がある。

○【譯】現世でさへ樂しく過せたならば、來世では蟲に生れようが、鳥に生れようが、私は少しも厭はない。

【評】輪廻や因果應報などの佛説を素材に取入れてゐるのが珍らしい。佛教思想が貴族社會を風靡してゐた時代にあつて、斯樣な佛説否定の享樂思想を歌つてゐるのは、此の一群の讃酒歌の作歌動機を考へる上に注意すべき點である。

三四九　生ける者　遂にも死ぬる　物にあれば　此の世なる間は　樂しくをあらな
生者　遂毛死　物有者　今生在間者　樂乎有名

【釋】○生ける者　「生者」を流布本にイケルヒト、神田本にイキタラバ、童蒙抄にイケルモノ、略解の一訓にウマルレバと訓んで居る。今は童蒙抄の訓に從つた。童蒙抄や攷證に述べてある通り、此の歌の上三句は、『史記』孟嘗君傳に「馮驩曰、生者必有死、物之必至也。」『揚子法言』に「有生者必有死、有始者必有終、自然之道也。」又佛語に「生者必滅」とある道理を詠んだのである。「もの」は人に限らず、禽獸蟲魚に至るまでを總稱してある。○物にあれば　童蒙抄にモノナレバと訓み、諸註是に從つてゐるが、流布本の訓にモノニアレバとあるのがよい。

○此の世なる間は　槻落葉にイマイケルマハと訓んでゐるが、流布本の訓のコノヨナルマハがよい。新訓には類聚古集等に「生」が無く、「今在間者」とあるのを採つて、イマアルホドハと訓んである。○樂しくをあらな　「を」は感動を表し音調を整へる助詞。斯様に「を」が形容詞の連用形を承けた例には、「ほととぎす此處に近く乎來鳴きてよ」(四四三八)がある。終の「な」は願望を表す助詞。

【譯】生きてゐるものは、どうせ遂には死んでしまふのであるから、せめて此の世に在る間は、樂しく暮らしたいものだ。

【評】此の歌にも酒を表面に出して歌つてはゐないが、酒を飲んで現世を悦樂しようとするものである事は、前の作と同樣である。

三五〇　默然居りて　賢しらするは　酒飲みて　醉泣するに　なほ若かずけり
默然居　而　賢　良爲　者　飲酒　而　醉泣爲　爾　尙　不　如來

【釋】○默然居りて　「默然居而」を流布本にタタニヰテ、童蒙抄にモダシヰテと訓んでゐるが、槻落葉にモダヲリテと訓んだのがよい。「もだ」の假名書の例には「咲けりとも知らずしあらば母太もあらむ」(三九七六)がある。「もだ」は今謂ふ「むだ」の古語で、「むなし」(空)とも關係がある。意味は字面の通り默つてゐるのを云ふが、又事も無く徒然なる事を云つた場合もある。○なほ若かずけり　否定の助動詞の「ず」に「けり」や「けむ」が附くのは、上代の語法に限られてゐる。假名書の例に「戀ひ止ま受家里」(三九八〇)「見れど飽か須介利」(四〇四九)「求め逢は受家牟」(四〇一四)などがある。此の「けり」は過去を表すのではなく、詠歎の意を表してゐる。

【譯】默つてゐて利口ぶつてゐるのは、酒を飲んで醉泣をするのに、やはり及ばないのだ。

【評】右に講じた十三首の讃酒歌は、何れも酒の德を讃へた一連をなす作である。此の十三首の詠まれた時期は、卷三に於ける讃酒歌の掲載順序などの上から見て、題詞にある通り、旅人の太宰帥在任中の事であらうと言はれてゐる。讃酒歌の作歌動機や、作歌當時の旅人の思想や心境に就いては考ふべき點が多い。檜嬬手には「酒に託して儒佛を譏れる也」と云つてゐる。思ふに此の十三首には、思想としては支那の老莊及び神仙思想が顯著に表れてゐて、現世を享樂的に過さうとする刹那主義的傾向が濃厚である。從つて此の旅人の思想と相容れぬ儒教や佛教の思想が斥けられたのは當然であるが、儒佛を譏るのが目的であつたとは思はれない。旅人の閱歷を見ると、晩年の六十餘歲で遠國の筑紫に遣はされ、間も無く妻を喪ひ自分の齡も漸く傾き、人生の無常寂寥を痛感するに至つたのである。望鄕の歌や亡妻を憶ふ歌などには、其の晩年の孤獨を嘆ずる悲痛な心境が、しみ〴〵と歌はれてゐる。讃酒歌は斯かる境涯に於て詠まれた作であるから、其の根柢にはせめて酒によつて憂さを晴らし、酒を友として餘生を樂しく送りたいといふ氣持が流れてゐるのである。一方旅人は漢籍佛典にも通曉してゐた敎養の豐かな人であるから、老莊や神仙思想に共鳴する所が多く、此等の外來思想が境遇に根ざす享樂的刹那的思想に影響して、右の十三首となつたものと考へられる。

沙彌滿誓歌一首

三五一　世の中を　何に譬へむ　朝びらき　榜ぎ去にし船の　跡なき如し
世間乎　何物爾將譬　旦開　搒去　師船之　跡無　如

【釋】○沙彌滿誓　傳記は前に述べた。〔三三六〕參照。○朝びらき　朝早く船が出航すること。動詞の連用形から轉成した名詞であつて、集中には「朝びらき」のみが用ゐられてゐる。例へば「安佐妣良伎入江漕ぐなる楫の音の」（四〇六五）「珠洲の海に安佐比良伎して漕ぎ來れば」（四〇二九）などの用例がある。此の語は平安朝時代に入つて「あさぼらけ」と轉訛し、意味も曙の意に轉じた。拾遺集卷二十には此の歌の下句を「あさぼらけ漕ぎゆく船の跡の白浪」と改作して載せてある。○榜ぎ去にし船の　童蒙抄にコギユキシフネノ、考にコギニシフネノと訓んでゐるが、流布本の訓にコギイニシフネノとあるのがよい。○跡なき如し　「跡無如」を流布本にアトナキガゴトと訓んでゐるが、今は槻落葉の訓に從つた。

【譯】此の世の中の無常を何に譬へたらよからう。恰も朝に湊を船出して漕いで行つた船の跡に、何も殘つてゐないのと同じである。

【評】此の歌は世の無常を歎じた作として集中著名なものである。岸に立つて眺めてゐると、朝霧のかかつた靜かな水面に、水尾を引きながら船が出て行つた跡は、湊が急に廣くなつたやうで、船の泊つてゐた位置さへ分らなくなる。さうした淋しさ果敢さを世の無常に譬へたのは、譬喩として適切であり、又敍景としても勝れてゐる。

山部宿禰赤人歌二首（○原六首の中）

三五八　武庫の浦を　榜ぎ廻む小舟　粟島を　そがひに見つつ　ともしき小舟

武庫浦乎　榜轉小舟　粟島矣　背爾見乍　乏小舟

【釋】○武庫の浦を　攝津國武庫郡の沿海、卽ち武庫川から西神戸の和田岬邊までの間の浦を云ふ。○榜ぎ廻む　漕ぎ廻ること。既出〔五八〕參照。○粟島を　此の島の所在に關しては諸說がある。（イ）仙覺抄には讃岐國屋島の北方の島を阿波島と云ふと記し、（ロ）代匠記精撰本には紀伊國に在ると云ひ、（ハ）考には阿波國を云ふのであるとし、（ニ）攷證には淡路の北方播磨との間の島であらうと云つてゐる。（ホ）又『大日本地名辭書』には、淡路島の北端岩屋町の海岸の繪島・大和島などであらうと云ひ、（ヘ）『萬葉地理研究兵庫篇』には淡路島であるとしてゐる。「粟島」或は「淡島」の名の島は諸國にあるが、此の歌のは集中に「淡路を過ぎ粟島をそがひに見つつ」（五〇九）又「粟島に漕ぎ渡らむと思へども明石の門浪いまだ騷げり」（一二〇七）と歌はれてゐるのと同じ島であるらしい。而して其の位置は淡路島以西であらうと思ふが、それらしい島は見當らない。○そがひに見つつ　「そがひ」は背後・後方の意である。「そがひ」の「そ」は、「そく」（退）「そくへ」「そきへ」（退方）「そとも」（背面）等の語根の「そ」と同じであらう。「向く」に對する「向ひ」と同じ關係の語が「そく」に對する「そがひ」であらう。假名書の例に「筑波嶺に曾我比に見ゆる葦穗山」（三三九一）「山菅の曾我比に寢しく今し悔しも」（三五七七）等がある。○ともしき小舟　「ともし」は〔五三〕に解いた通り、尠い意味から轉じて、羨ましく又は珍らしの意に用ゐられる。ここは羨ましの義である。槻落葉攷證・古義等に、作者は西に下るのであつて、粟島を後にして大和の方へ漕ぎ上つて行く小舟を、羨ましく思つたのであると云つてゐる。又檜嬬手・新考等には、粟島を後に眺めつつ武庫の浦を漕ぎ廻る船を見て、佳景を恣にしてゐる其の船人を羨んだものと解釋してゐる。何れにも解かれるが、今は後說に從つて置く。

【譯】武庫の浦傳ひに漕ぎ廻つてゐる小舟よ。粟島を背にして美しい眺めを恣にして行く、あの小舟の羨ましさよ。

【評】作者の眼前に横たはつて居るのは、粟島を中心とする廣い海の眺望であるが、彼の心は其の添景としての扁

舟に注がれ、やがて船人の心になつてゐるのである。第二句と結句に「小舟」を反復した表現は、此の境地から自然に湧き出たのであつて、赤人が自然を沒我的に歌ふ人である事は、此の一首によつても明瞭である。

三六一　秋風の　寒き朝明を　佐農の岡　越ゆらむ君に　衣貸さましを
秋風乃　寒　朝開乎　佐農能崗　將　超　公爾　衣借　益　矣

【釋】○寒き朝明を　「朝開」は「防人に立ちし安佐氣の」(三五六九)「今朝の安佐氣秋風寒し」(三九四七)等の例に倣つてアサケと訓む。「あさあけ」の約つた語形である。ここの「を」は動作の行はれる時刻を示す助詞であるから、「に」と譯すべきである。○佐農の岡　紀伊國の今の三輪崎町大字佐野の丘陵であらう。〔二六五〕參照。○越ゆらむ君に　略解にコエナムキミニと訓んでゐるが、流布本の訓コユラムキミニが穩かである。

【譯】秋風が肌寒い此の夜明け方に、君は佐農の岡を獨り越えて行かれるであらう。其の君に出來ることなら私の著物を貸して上げませうものを。

【評】此の歌を考及び略解には、都なる赤人の妻が詠んだ作であるとし、小琴には旅宿の遊女などが赤人に贈つた作であらうと云ひ、攷證及び古義には、作者は都に居て紀伊へ旅に出た人の上を思ひやつて詠んだのであらうと云ひ、檜嬬手には旅路にある作者が、大和へ歸る旅人に與へた歌であるとしてゐる。此の歌には女性らしいやさしい同情の心が溢れてゐるから、妻の作のやうにも思はれるが、なほ題詞を尊重して赤人の羇旅の歌とすべきであらう。

## 笠朝臣金村鹽津山作歌二首

三六四　丈夫の　弓末振り起し　射つる矢を　後見む人は　語り繼ぐがね
大夫之　弓上振　起　射都流矢乎　後將見人者　語繼　金

【釋】○笠朝臣金村　傳記資料は史書に見當らない。金村は集中有數の歌人の一人であつて、作歌は笠朝臣金村歌集に出でたものをも合せると、短歌三十四首長歌十一首が卷二・三・四・六・八・九に收められてゐる。此等の作品中の作歌年月の明かなものに據つて窺ふと、金村は靈龜元年から天平五年に至るまで、前後十八年間に歌を詠んでゐるから、大體赤人と同時代(卽ち奈良朝前期)の歌人である事が判る。金村も赤人麻呂や赤人と同じく、屢吉野や難波の離宮への行幸に陪從して歌を詠んで居るから、下級の官吏であつた事と思はれる。作品中には流麗若しくは律動的な音律美を具へたものが多く、又長歌は概ね短くして、枕詞を多く用ゐて對句を用ゐる事の尠いのが特徵である。○鹽津山　「鹽津」は和名抄に「淺井郡鹽津津之保」とある所で、今の近江國伊香郡鹽津村及び永原村が是に當る。鹽津村は琵琶湖の最北岸の地で、此處より北方二里の鹽津越を經て、越前の敦賀郡に出る道がある。其の山越が鹽津山であらう。金村は北陸道への道すがら此處を通過したものと思はれる。

○弓末振り起し　「弓上」を古來ユズエと訓んでゐるが、童蒙抄にはユハズ、新解にはユガミと訓んである。樹の上部を梢(こすゑ)(木末の義)と云ふのと同じく、弓の上部を「ゆずゑ」と云つた事は、集中に「梓弓須惠布理於許之(スエフリオコシ)」(四一六四)「梓弓末は知らねど」(三一四九)等の用例があるので明かである。「振起」を西本願寺本代匠記精撰本等にフリタテと訓んであるが、流布本の訓のフリオコシが妥當である。假名書の例は右に掲げた。○射つる矢を　古義に此の「を」をなるものをの意の感動助詞であると解き、又新考に此の句を「射つる矢ぞ」の意と解かれたのは共に妥

當でない。「を」は次の「見む」の客語を示す助詞である。なほ新解に「古代の英雄又は巨人の類が矢を放つた云々」と云はれたのも穩當でない。これは作者が自ら射たのである。○語り繼ぐがね　「がね」は「がに」とは異なる助詞である。「がね」の「ね」は、活用語の未然形を承けて文を終止し願望の意を表す助詞の「ね」と同じである。「がね」は「が」で上に述べた事を指示し、「ね」によつて其の事を願望する意を表すのであると『奈良朝文法史』に説明してある。用例には「萬代に言ひ繼ぐ可禰（ガネ）と」（八一三）「菖蒲（あやめ）草花橘に合へも貫く我禰（ガネ）」（四一〇二）などがある。（因みに「がに」の「に」は目的を表す助詞で、「がに」は「雁が音寒し霜も置きぬ我（ガニ）」（一五五六）の如く、活用語の終止形を承けて、……する程にといふ意を表す。）

【譯】丈夫たる此の自分が、弓末を振り立てて射て置いた此の矢を、後に見る人は強い弓を引いたものだと、弓勢のほどを語り傳へてくれよ。

【評】弓勢に自信のある作者金村が、渾身の力を籠めて山中の大木に矢を射込んで立去る時の作である。初の三句に堂々たる武人が弓を引き絞つて射る時の、颯爽たる英姿が動的に力強く表されてゐる。第四・五句には武人として名を尙んだ當代の思想がよく表れてゐる。情景共に丈夫振りを發揮した雄々しい作である。

三六五　鹽津山（しほつやま）　うち越え行けば　我が乘れる　馬ぞつまづく　家戀ふらしも

鹽津山　打越去者　我乘有　馬躓爪突　家戀良霜

【釋】○馬ぞつまづく　「ぞ」は語勢を強める係の助詞。「つまづく」は原文に「爪突」とある通り、「つめつく」が複合して成つた動詞である。○家戀ふらしも　此の句の解釋に兩説がある。一は馬が家を戀ひ慕つてゐるらしいと解く説で、他の一説は家人が自分を戀ひ慕つてゐるものと見えると解く説である。諸註に見えてゐる通り、旅中に在つて馬が躓くのは、家人が慕つてゐる徵であると考へる習俗が古くあつたやうであるから、今は後説に從ふ。集中になほ「妹が門出入（いでいり）の河の瀨を速み吾が馬つまづく家思ふらしも」（一一九一）「白妙ににほふ信土（まつち）の山川に吾が馬なづむ家戀ふらしも」（一一九二）などと歌はれてゐるのを參考すべきである。上代人は或特殊な現象に遭遇すると、それを或事柄の兆徵であると判斷する習俗を多く有つてゐたのであつて、これも其の一つである。

【譯】鹽津山をうち越えて行くと、折しも乘つてゐる馬が躓いた。して見ると家人は今頃自分を慕つてゐると思はれる。

【評】前の歌に武人としての雄々しい一面を歌つた金村は、轉じて此の歌では、人間性としての旅中の家鄕戀しさの感情を歌つてゐる。初句から第四句までに活動的な動作を一氣に歌ひ續けて、「馬ぞつまづく」に至つて明確な句切をつけ、第五句を詠歎的に歌つてゐるので、作者の動きが其のまま一首の格調となつて表れてゐる。

石上大夫（いそのかみのまうちぎみ）歌一首

三六六　大船に　眞楫繁貫（しじぬ）き　大君の　命（みこと）かしこみ　磯廻（いそみ）するかも

大船二　眞梶繁貫　大王之　御命恐　磯廻爲　鴨

右今案石上朝臣乙麻呂、任三越前國守一、蓋此大夫歟。

【釋】○石上大夫　石上朝臣乙麻呂卿であらうと云ふ。乙麻呂の傳は既に述べた。（一一八七）參照。此の歌の詠まれた時期に就いて、考には土佐國へ配流の時の船路で作られたものとし、槻落葉には西海道巡察使となつて下る時

の作であると云つてゐる。左註に乙麻呂が越前守に任ぜられた由が見えるが、續日本紀には此の事は記されてゐない。姑く左註を信じて任國越前へ赴く時の作と見て置く。○眞楫繁貫き　訓は古葉略類聚鈔等にシシヌキとあるのが正しい。「眞」は接頭語。「楫」は前に說明した。「繁貫き」は繁く數多貫いての意。船の左右の舷に澤山の櫂を取り附けること。○磯廻するかも　原文の「磯廻」を流布本にアサリ、考にイサリと訓んでゐるが、童蒙抄にイソミと訓んで磯めぐりする意と解いたのがよい。「磯廻」は元來磯のめぐりの意の名詞であつて、「磯廻する」は磯を廻る、卽ち磯傳ひに漕いで行く意を表す。槻落葉・檜嬬手等に船がかりする事と解いたのは妥當でない。「鳴く鶴の聲遠ざかる磯回爲らしも」(一一六四)「島回爲流鵜にしもあれや」(九四三)「灣廻爲流人とは知らに」(四二〇二)等は皆同類の用例である。

【譯】大船に櫂を澤山に取り附けて、大君の勅命を畏多くも承つて、磯廻りをする自分である。

【評】先に講じた田口益人の作(二九七)と同樣に、上代人が君命を重んじて我を顧みなかつた其の精神を歌つたものである。初の二句に官船の樣を寫したのは、以下三句の抒情を大いに助けてゐる。

和歌一首

三六九　もののふの　臣の壯士は　大君の　任さしのまにま　聞くとふものぞ
物部乃臣之壯士者　大王任乃隨意聞跡云物曾

右作者未審、但笠朝臣金村之歌中出也。

【釋】○和歌　右の乙麻呂の歌に對して、船中の一人が和した歌である。左註に據れば作者は金村であるらしく、又金村には別に(三六六)に角賀津(今の敦賀)から出航した時の旅路の長歌(本書には省略した)があるのを考へ合せると、金村は乙麻呂の一行に加はつてゐたもののやうである。○もののふの　武を以て朝廷に仕へる者を云ふ。(五〇)參照。○臣の壯士は　原文の「壯士」を流布本にタケヲ、童蒙抄にヲノコ、槻落葉にヲトコと訓んでゐる。古事記の訓註に「訓二壯夫一云二袁等古一」とあるからヲトコと訓むべきであるが、又集中に東男を「安豆麻乎等故」とも「安豆麻乎能故」とも記してあるから、ヲノコと訓んでもよい。「臣の壯士」は「臣の孃子」(古事記に「淤美能袁登賣」とある)に對する語であつて、「臣」は元來姓の名であるが、又宮仕へ人卽ち臣下の意にも用ゐる。ここは後の意味であつて乙麻呂を指す。○任さしのまにま　「任乃隨意」を流布本にヨサシノママニと訓み、考には「任」を「言」に改めてミコトノマニマと訓んでゐるが、代匠記初稿本書入及び槻落葉に、原の儘をマケノマニマニと訓んで以來諸註是に從つてゐる。マケノマニマニといふ訓は、假名書の例の「天離る鄙治めにと大君の麻氣能麻爾末爾」(三九五七)「大君の麻氣乃麻爾麻爾級離る越を治めに」(三九六九)等に倣つたものであらうが、「まけ」は罷り遣はす意の名詞であつて、委任の意は無いのである。一方原文の「任」は古事記・日本書紀・祝詞・宣命等に散見し、何れもヨサスと訓んで委ねる意に解いてゐる。よつて流布本の訓にヨサシとあるのが正しいやうである。(『萬葉集講義』卷二、四五〇—四頁參照)次に「隨意」を流布本にママニと訓んでゐるが、假名書の例はマニマニ(例は右に揭げた)又は「君が麻爾麻と」(三九九三)「大君の命の麻爾末」(四三三一)の如くマニマであつて、後世の如くママニと云つた例は無いから、是はマニマと訓むべきである。天皇の御委任の儘にといふ意。○聞くとふものぞ　流布本の訓にキクトイフモノソとあるが、今は考にキクトフモノゾと訓んだのに從ふ。「といふ」を約めて「とふ」と云

つた證には「等布」「登布」などと記した例が幾らもある。尤も此所の「とふ」は輕く添へた語であつて、一句の意味は聞くものであるその意。

【譯】武人として朝廷に仕へ奉る丈夫は、大君の御任命のままに、よく大命に從ひ奉つてお仕へ申すべきものであるぞ。

【評】鄙の國へ遙々海を渡つて行く事が如何に辛からうとも、何事も勅命を尊んでお仕へ申さなくてはならぬといふ、上代の武人の美しい至情と心意氣とを歌つたものである。一首を通じて母音のオが極めて多く現れて居り、殊にノの音が頻出してゐるので、響きが莊重雄大であり、音律が快適であつて、內容形式共に勝れた作である。

湯原王芳野作歌一首

三七五　吉野なる　夏實の河の　川淀に　鴨ぞ鳴くなる　山陰にして
吉野爾有　夏實之河乃　川余杼爾　鴨曾鳴　成　山影爾之丘

【釋】○湯原王　天智天皇の皇子なる志貴皇子の御子の湯原王である。御歌は此の集の卷三・四・六・八に短歌のみ合計十九首傳はつてゐる。それらの御歌には奈良朝前期から後期にかけての頃の、優美纖細な歌風の認められるものが多い。此處に講ずるのは其の代表作の一つである。○吉野なる　吉野に在る。○夏實の河の　「夏實」は大和國吉野郡中莊村大字菜摘(宮瀧の東方約十町)に其の名が遺つてゐる。九四頁の地圖參看　吉野河を古く此の邊では夏實河と呼んだのである。『大和志』に「吉野川(中略)歷二國栖・樫尾一、至二菜摘村一曰二菜摘川一」とある。○山陰にして　「にして」は既出。(二一七〇)參照。山陰に於ての意。

夏實川の景趣

【譯】吉野の夏實の河の清らかな河淀に、鴨が頻りに鳴いてゐる。此の山陰の處で。

【評】山は青く水は清き吉野の山奥の、紺碧の水を湛へた河淀に在つて、靜寂を破るものは川瀨の音と、寂しい鴨の鳴聲とがあるばかりである。其の山陰の幽邃なる境地に立つて、作者は自然の聲に耳を澄まして聞き入つてゐるのである。結句の「山陰にして」が、其の清澄なる境地を鮮明に描き出してゐるのみならず、一首を引締める力がある。音調が頗る快適爽快に響くのは、「吉野なる」のナを直ちに繰返して「夏實」と歌ひ、更に「鳴くなる」の句に之を反復してある事も與つて力があるが、更に注意すべきは「河の」「川淀」「鴨」「山陰」と、カの音を頻繁に配置してある事である。卽ち此の御歌は、柔く滑かに響くナ・ニ・ヌ・ノ・マ・ミ等の音の續出する間に、鋭いカの音が靜寂を破る鴨の聲のやうに、適度に配置せられてゐる爲に、內容にふさはしい韻律美が具はつてゐるのである。

湯原王宴席歌一首(○原二首の中)

三七七　青山の　嶺の白雲　朝に日に　常に見れども　めづらし吾が君
青山之　嶺乃白雲　朝爾食爾　恒　見　杼毛　目頻　四吾　君

【釋】○青山の　青々と樹木の繁つた山をいふ。○嶺の白雲　嶺にたなびいてゐる白雲。以上の二句は、其のすが

すがしい景色は何時まで眺めても見飽きがしないから、是を下の「めづらし」の譬喩的序詞としたのである。○朝に日に　朝に夕にの意。「け」は「日」の意。○めづらし吾が君　「めづらし」は今は專ら珍らしの意に用ゐるが、元來動詞の「愛づ」から出た形容詞で、愛づべき即ち愛らしの意である。其の用例に「煤してあれど己が妻こそ常目頬次吉」(二六五一)「時毎にいや米頭良之久咲く花を」(四一六七)などがある。次に原文の「吾君」を流布本にワガキミ(代匠記・新考同訓)、考にワギミ(略解・攷證・古義・新訓・全釋同訓)、槻落葉にアギミ(檜嬬手同訓)と訓んである。代名詞の「あ」を直ちに體言の上に置いた例には、記紀の歌謠に「いざ阿藝(吾君)」「一つ松阿勢(吾兄)を」「阿豆麻(吾妻)はや」等があるが、「わ」には斯かる用例が無いから、ワギミと訓むのは妥當でない。また「吾君」「吾兄」の如き用例も上代の歌謠にあるのみで、萬葉時代に用ゐられた確證は見當らない。集中には「松柏の榮えいまさね尊き安我吉美」(四一六九)の如き用例があるから、此所も「あ」又は「わ」に助詞の「が」を添へて、アガキミ又はワガキミと訓むべきであらう。(『奈良朝文法史』四七—八頁參照)

【譯】青々とした山の峰に懸つてゐる白い雲を見飽かぬやうに、朝に夕にいつもお逢ひしてゐても、我が君は飽くことなく親しまれるお方です。

【評】此の歌の生命は初二句の序に在る。青い山の頂に白雲のたなびいてゐる清々しい景色を、いつまでも相對してゐたいと思ふ君の譬喩に用ゐたので、情味の盡きない歌となつてゐる。

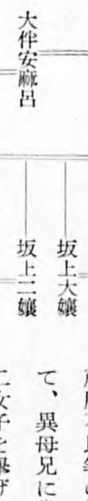
大伴坂上郎女祭レ神歌一首幷短歌

三七九　ひさかたの　天の原ゆ　生れ來る　神の命　奥山の　榊の枝に　しらかつけ
久堅之　天原從　生來　神之命　奥山乃　賢木之枝爾　白香付

木綿取り付けて　齋瓮を　齋ひ穿り据ゑ　竹玉を　繁に貫き垂り　獸じもの
木綿取付而　齊戸乎　忌穿居　竹玉乎　繁爾貫垂　十六自物

膝折り伏し　手弱女の　襲取り懸け　かくだにも　吾は祈ひ禱む　君に逢はじかも
膝折伏　手弱女之　押日取懸　如此谷　裳　吾者祈　奈牟　君爾不　相可聞

【釋】○大伴坂上郎女　坂上郎女は集中の代表的女流歌人の一人である。閲歴は集中の題詞・左註並に作歌を資料として窺ひ知られる。即ち郎女は佐保大納言大伴安麻呂を父とし、石川内命婦を母として生れたのであつて、旅人・宿奈麻呂兄弟には異母妹に當り、家持には叔母に當る。初め天武天皇の皇子穂積皇子に嫁して寵愛を蒙つたが、靈龜元年に皇子が薨ぜられて後、藤原不比等の第四子麻呂の室となつた。然るに郎女は其の後久しからずして、異母兄に當る宿奈麻呂の妻となつて、始めて坂上大嬢と坂上二嬢の二女子を擧げた。(なほ宿奈麻呂の女田村大嬢は郎女には繼子に當つてゐる。)其の後又宿奈麻呂との關係も絶えたものの如く、神龜年間の末には二女を遺して旅人の任地太宰府に下り、天平二年に旅人に從つて歸京し、旅人の薨じた後は佐保の里に在つて、



專ら旅人の遺兒家持及び郎女の二女を愛育し、大嬢を家持に二嬢を駿河麻呂に嫁せしめて後は、獨り靜かに餘生を送つたのである。「坂上郎女」の名は、郎女の居住してゐた坂上里に因んでゐる。郎女の作歌時代は、養老年間から天平勝寶二年に至るまでの、前後約三十年間に亙つてゐる。作品は長歌六首・短歌七十七首・旋頭歌一首が本集の卷三・四・六・八・十七・十八・十九に傳はつてゐる。萬葉の女流歌人(長歌)を善くしたのは、此の娘女ぐらゐのものである。此處に講ずる長歌は左註にある通り、天平五年に氏神を祭つた時の作である。

○天の原ゆ　從來アマノハラヨリと訓んでゐるが、今は新訓にアマノハラユと訓んだのに從ふ。○生れ來る　原文の「生來」を童蒙抄にウマレコシ、槻落葉にアレコシと訓んでゐるが、流布本の訓に從つてアレキタルと訓んで置く。「生る」は出現する意。(一一九)參照。「生れ來る」は高天原から此の國土に來臨する意。○神の命　「命」は敬意を表す爲に添へた語。「神」は大伴氏の遠祖天忍日命を指す。古事記に據れば、此の神は天孫降臨の際に瓊瓊杵尊に隨從し奉つた神である。以上は神に呼び掛けた詞であるから、下に助詞の「よ」を添へて譯すべき所である。○奥山の榊の枝に　原文の「賢木之枝」を考などにサカキガエダと訓んでゐるが、流布本の訓にサカキノエダとあるのがよい。山奥の人の蹈んだことのない清淨な處に生えてゐる榊の枝にの意。新撰字鏡に「杜」「榊」「榧」「椪」「龍眼」を「佐加木」と訓んでゐる。「さかき」は今では山茶科に屬する常綠樹の楊桐を云ふが、古くは「神木」「祀木」等の合字を以て「さかき」を表してゐるのに依つて知られる通り、神靈の宿る所として常盤木を立てて祭祀を行つた其の樹木を云ふのである。卽ち「さかき」は榮木の意であつて、上古に於ては神の鎭る常綠樹を一般に指したのが、後に榊や櫃などを指し、遂に今の榊を云ふやうになつたのである。○しらかつけ　「白香付」の訓釋に就いては諸說がある。(イ)童蒙抄にはシラガツケと訓んで、神祭に用ゐる紙は木綿の代りに用ゐるのであるから、「しらか」は白紙ではなく苧のことであるとして居る。(ロ)冠辭考にはシラガヅクと訓んで「木綿」の枕詞とし、木綿は白髮に似てゐるから冠したのであると云つて居る。(ハ)本居大平はシラガツクと訓んで、奈良朝頃から木々に添へて白紙を切りかけて著けたもので、白紙を添へ付ける木綿の意であると解いて居る。(ニ)檜嬬手にはシラカツクと訓み、これは枕詞ではなくして「しらか」は白い苧で、木綿は此の苧を以て取り附けるのであると云つてゐる。今は姑く檜嬬手の說に從つて「しらか」を麻苧と見て、白苧と木綿を榊の枝に附けたものと解釋して置く。○木綿取り付けて　「木綿」は前に說いた通り白和幣のこと。(一九九)の「木綿花の」參照。○齋瓮を　「齋瓮」は淸淨に忌み淸めた瓮、卽ち祭祀に用ゐる神酒を盛る土器である。「瓮」は「鍋」(茶瓮の義)「釣瓶」(釣る瓮の義)などの「へ」と同じで容器の汎稱である。齋瓮の形は種々ある。此の歌のは下に「齋ひ穿り据ゑ」とあるから相當大きな壺であつて、底が丸いので地を掘つて据ゑたのである。集中に「伊波比倍据ゑつ吾が床の邊に」(三九二七)と歌はれてゐるのは、小型の瓮であつたと思はれる。(新解に原文に「齊戶」とあるので、「神靈を鎭める神殿を意味する」と解かれたのは妥當でない。)○竹玉を　「竹玉」は宣長の說に據れば、玉を緒に貫いたのであらうと云ふ。然し高橋健自氏の說に據れば、「竹玉」は竹管を

齋瓮の形狀

起原とする管玉であつて、元は竹で造つたのであるが、後には專ら綠色の碧玉岩で造るに至つたのであるとし、萬葉の「竹玉」は此の管玉或は臼玉(管玉の短いもの)の類であらうと言はれてゐる。而して古墳から發掘せられる管玉は、通例長さ一寸徑二分許りの碧玉岩であつて、齋瓮等と共に數十乃至數百箇發見せられる事があると云ふ。(『鏡と劍と玉』一九三―五頁參照)○繁に貫き垂り　竹玉を數多緒に連ねたものを、齋瓮に纏き附けて飾としたのである。「垂る」は他動詞で、後世は下二段に活用するが、古くは四段に活用した。○獸じもの　此の句は〔一九九〕に說いた通り、野獸のするやうにの意で、次の「膝折り伏し」の枕詞である。○膝折り伏し　流布本にヒサヲリフセテ、略解にヒザヲリフセと訓んである。諸註は此の兩訓の孰れかに從つてゐるが、「伏」をフセと訓めば「伏せ」は他動詞であるから、膝を伏せる意に解かねばならぬ。併しここは膝を折つて身を地に伏せる、卽ち膝を折り地に伏す意であるから、「伏」は自動詞にしてフシと訓むべきである。○手弱女の　「手弱女」は假名書の例に「多和也女」(三七五三)とあるのに倣つてタワヤメと訓む。又訛つて「たをやめ」とも云ふ。「たわやめ」は形容詞の「たわやし」の語幹を、直ちに名詞の「女」に續けたのであつて、弱き女の意である。「たわやし」は「たわむ」(撓)「たわやか」等と同系統の語である。「手弱女」と同類の語に、古事記に「多和夜賀比那」(手弱腕)がある。ここは作者自身を指す。○襲取り懸け　「おすひ」は古事記に「太刀が緒も未だ解かずて淤須比をも未だ解かね」又「汝が著せる意須比の裾に」と歌はれてゐる通り、上古に於て男女共に衣服の上に頭から襲ひ懸けて裾まで垂れた、後世の被衣のやうなものである。延喜伊勢大神宮式に「帛意須比八條長二丈五尺廣二幅」と見えてゐる。此の歌にあるのは祭服として用ゐたのである。○かくだにも　此の「だに」は「かく」を强める爲に添へてある。これ程までもの意。○吾は祈ひ禱む　此の句は流布本に「吾者折奈牟」とあるが、「折」は神田本・細井本等に「祈」とあるのに據つて改め、訓は代匠記にコヒナムと訓んでゐるのに從つた。「祈ひなむ」の「なむ」は、代匠記初稿本に「禱む」の轉訛であるとしたのに從ふべきである。此の「なむ」を童蒙抄に助動詞と見てゐる。(新解同說)併し集中に「天つ神仰ぎ許比乃美」(九〇四)の如き例が幾らもあるから、「こひなむ」は「こひのむ」の轉訛と見るのが穩當である。「のむ」は日本靈異記に「祈」をノミと註し、又崇神天皇紀の訓註に「叩頭、此云二酒務一」とあるのによつて知られる通り、祈り願ふ意である。(拙著『祝詞新講』一九―二一頁參照)○君に逢はじかも　「不相可聞」を流布本にアハシカモと訓み、諸註是に從つてゐるが、槻落葉にはアハヌカモと訓んでゐる。後者に從へば、然し君にはお逢ひ出來ないことである の意となる。今は流布本の訓に從つて、君にはお逢ひ出來ないのであらうかと解いて置く。

【譯】高天の原に出現して、此の國に天降り給うた我が遠い祖先の神よ。奥山の榊の枝に白芋や木綿を取り附け、齋み清めた瓮を、地を清淨に清めて掘り据ゑ、それに數多の竹玉を緒に貫いて飾りつけ、獸のやうに膝を折り地に伏して、此のか弱い女が襲を引被つて、これほどにもお祈りを致します。これでもあのお方にお逢ひ出來ないのでせうか。

【評】此の長歌は、上古に於ける祭祀の古俗を窺ふべき、貴重な資料である。當時朝廷や神社で行はれた公的の祭典が、頗る莊麗且鄭重なものであつた事は想像に難くないが、斯樣な家庭で行はれた私的の祭祀も、なほ相當に清淨と善美とを極めたものであつた。今日古墳から發掘せられる鏡や玉や種々樣々な裝飾を施した齋瓮などは、何れも當代の文化の粹を萃めた工藝品であつて、それらが精巧を極めてゐるのに驚かれる。此等の考古學的遺物

と此等の歌とを念頭に置いて見ると、當時の祭の有樣が如實に窺ひ知られて興味が多い。神祭が女性の手で營まれてゐるのは、當時の一般の風習であつて、戀の成就を祈る爲であるからではない。

反歌

三八〇　木綿疊（ゆふだたみ）手に取り持ちて　かくだにも　吾は祈ひ禱（な）む　君に逢はじかも
木綿疊　手取持而　如此谷　母　吾波乞　甞　君爾不　相鴨

右歌者、以天平五年冬十一月、供祭大伴氏神之時、聊作此歌。故曰祭神歌。

【釋】○木綿疊　木綿は既に述べた通り、楮（かぢ）又は穀（かぢ）の木の樹皮の纖維を原料として織つた白布を云ふ。それを疊んだのが「木綿疊」である。之を神前に供へた事は、「一手には木綿（ユフ）取持（トリモチ）一手には和妙（にぎたへ）奉り……天地の神に乞ひ禱（な）み」（四四三）と歌はれてゐるのによつて明かである。（「木綿疊」は又「手向山」「田上山」「白月山」などの地名の枕詞にも用ゐられる。）

【譯】木綿を疊み重ねて手に捧げ持つて、これほどまでに私はお祈りを致します。それなのにあのお方にお逢ひ出來ないのでせうか。

筑紫娘子（きとめ）贈二行旅（たびびと）一歌一首　娘子字曰二兒嶋一

三八一　家思ふと　心進むな　風守り　好くしていませ　荒き其の路
思家　登　情進　莫　風候　好　爲而伊麻世　荒　其　路

【釋】○筑紫娘子云々　筑紫國の或少女が大和へ還る官人に對して、別離を惜しんで詠んで贈つた歌の意。「娘子字曰兒嶋」の六字は流布本には無いが、西本願寺本・細井本・溫故堂本・大矢本等に據つて補つた。「兒嶋」は卷六の〔九六五・九六六〕の左註に「右太宰帥大伴卿兼二任大納言一向レ京上道、此日馬駐二水城一顧二望府家一。于レ時送レ卿府吏之中有二遊行女婦一、其字曰二兒島一也。於レ是娘子傷二此易レ別嘆二彼難レ會、拭レ涕自吟二振レ袖之歌一」とある通り、筑紫の一遊女の名である。此の歌も或は天平二年に旅人の一行が歸京する時に、兒嶋が誰かに贈つた作であらう。○家思ふと　考にイヘモフトと訓んでゐるが、流布本の訓のイヘオモフトで差支ない。「と」はとての意。家鄕を戀ひ慕ふあまりに。○心進むな　「情進莫」を考・槻落葉・攷證等にサカシラナセソと訓んでゐるが、流布本の訓にココロススムナとあるのがよい。「すすむ」は「すさぶ」と同義で心が勇みはやるのを云ふ。風波の危險を恐れずして輕はずみな事をせぬやうにの意。○風守り　流布本に「風俟（カゼマチ）」とある。然し「俟」は神田本・西本願寺本其の他には「候」とある。「俟」と「候」とは通じてマツとも訓むが、今は「候」に改めてマモリと訓んで解く。順風を待ち伺ふこと。○好くしていませ　古義に御無事においでなさいの意と解いてゐるが、「好く」は「風守りして」に懸る副詞である。「いませ」は行きませの意。○荒き其の路　新訓にアラシソノミチと訓んであるが、流布本以下諸註にアラキソノミチと訓んだのがよい。浪風の荒いあの海路をの意。

【譯】家を慕ふあまりに心がはやつて、冒險をなさつてはいけません。よく風を伺つておいでなさい。あの浪風の荒い海路のことですから。

【評】危險の多い波路を浸いで、遙々都を指して歸る人の身の上を案じた、鄙少女のやさしい濃かな心遣が可憐に歌はれてゐる。尤も初二句には、家を慕つて歸りを急ぐ男に對して、或程度の嫉妬を感じてゐる事が現れてゐる。

仙柘枝歌三首

三八五　霰降り　吉志美が嶽を　嶮しみと　草取りかなわ　妹が手を取る
霰零　吉志美我高嶺乎　險跡　草取可奈和　妹手乎取

右一首或云、吉野人味稲與柘枝仙媛歌也。但見柘枝傳、無有此歌。

【釋】○仙柘枝　柘枝傳説に就いては後に述べる。○霰降り　流布本の訓にアラレフルとあるが、假名書の用例に「阿良例布理鹿島の神を祈りつつ」(四三七〇)とあるから、槻落葉にアラレフリと訓んだのがよい。「鹿島」「杵島」「遠」などに冠する枕詞である。霰が降る音は喧しいといふ意で同音の「鹿島」に懸け、又カシマに音の近い「杵島」「吉志美」にも懸ける。又霰の音の意で「遠」のトにも懸る。○吉志美が嶽を　此の名の山は吉野山中には無い。後に述べる如く、肥前風土記に「霰降る耆資麼加多壇塢」とあるキシマを、キシミに訛つたものと思はれる。杵島が嶽は風土記や日本書紀の記載によつて古來知られた山で、今の佐賀縣杵島郡の杵島山であつて、佐賀市の西約五里の所に在る。此の山は日本書紀景行天皇の十八年の條に、「秋七月辛卯朔甲午、到筑紫後國御木居於高田行宮、時有偃樹長九百七十丈焉。(中略)爰天皇問之曰、是何樹也。有一老夫曰、是樹者歴木也、嘗未偃之先、當朝日暉則隱杵嶋山、當夕日暉亦覆阿蘇山也。」と見えてゐる。○嶮しみと　「嶮し」の假名書の例には、日本書紀に「佐餓始枳山も」がある。「さがし」は嶮岨の意。「嶮しみと」は前に解いた「賢しみと」(三四一)と同じ語形で、ここは嶮しいのでと云ふ意。○草取りかなわ　「草取可奈和」を流布本にクサトルカナヤ、小琴にクサトリカナワと訓み、槻落葉には「奈」を「禰」、「和」を「手」の誤と見てクサトリカネテと訓んでゐる。誤字説には從ひ難いから今は小琴の訓を採つて置く。尤も「かなわ」の意義は明確でない。小琴には「かな」は「かね」の意で「わ」は助辭であるとしてゐる。肥前風土記に此の句は「草取り我泥底」とあるから、ここも其の意味であらう。

【譯】杵島の嶽は誠に嶮しいので、草を掴まへようにも掴まへられずして、妻の手を取つて登ることである。

【評】左註にも記されてゐる通り、此の歌は柘枝傳説に直接關係のある歌とは考へられない。よつて考には柘枝の歌は後の二首で、此の歌には別に題詞があつたのが脱ちたのであらうと云ひ、小琴槻落葉攷證等にも別の歌であらうと云つてゐる。さて此の歌には類歌があつて、逸文肥前風土記及び古事記に見えてゐる。即ち仙覺の萬葉集註釋に引く所の肥前風土記には、「杵島郡、縣南二里有一孤山、從坤指長、三峰相連。是名曰杵島。坤者曰比古神、中者曰比賣神、艮者曰御子神。(一名軍神勝則兵興矣。)鄕閭士女提酒抱琴、毎歲春秋携手登望、樂飲歌舞、曲盡而歸。」とあつて、其の後に「歌詞曰」として「霰降る杵島が嶽を嶮しみと草取りかねて妹が手を取る」を杵島曲の歌詞と註して載せてある。これに據れば、杵島山に於ては毎年春秋に歌垣が催されたのであつて、「霰降る云々」の歌は其の歌垣の歌である。又常陸風土記にも、崇神天皇の御代に杵島曲を七日七夜歌つたとあるのは、此の歌であらうと云はれてゐる。更に古事記には仁德天皇の御代に、速總別王が女鳥王と共に遁れて、倉椅山(大和國礒城郡多武峯村の音羽山の一名)に登り給ふ時の御歌として、「梯立の倉椅山を嶮しみと岩掻きかねて吾が手取らすも」を載せてゐる。此等の三首の異傳或は類歌の中何れが原歌に近いかは俄かに決定し難いが、恐らく肥前風土記の歌が本源的のもので、杵島山の歌垣に於て年々謠はれた此の鄕土民謠が、廣く全國に流布したものと思はれる。而して萬葉の歌は其の異傳であり、古事記の歌は之を傳説中に採り入れるに當つて、改作したものであら

うと思はれる。

三八六　此の夕　柘のさ枝の　流れ來ば　梁は打たずて　取らずかもあらむ
此暮　柘之左枝乃　流來者　梁者不打而　不取香聞將有

【釋】○柘枝傳說　柘枝傳說は神婚說話の一であつて、茲に講ずる二首の歌、懷風藻の詩、及び續日本後紀に見える興福寺の僧が奉つた長歌に詠まれてゐる。此等に歌はれた斷片的な資料を綜合して、此の說話の概要を知る事は出來るが、前の歌の左註に見える柘枝傳なるものは今は傳はつてゐない。其の梗概は次の如くである。昔吉野に味稻（美稻とも記す）といふ男があつて、吉野川に梁を懸けて鮎を捕つて渡世してゐた。或時柘の枝が流れて來て梁に懸つたので、味稻は其の枝を拾つて家に携へ歸つた所が、それが美女に化生した。其の仙女はやがて味稻に戀して夫婦の契を結び、共に老いも死にもせずして長生したのであるが、其の後仙女は常世國へ飛び去つたと云ふのである。（なほ柘枝傳說の原形に關しては、土田杏村氏の「仙柘枝傳說原形論」―『上代の歌謠』所收―と題する研究があるから參照せられたい。）

○此の夕　流布本に「此暮」をコノクレニと訓んでゐるが、今は小琴にコノユフベと訓んだのに從ふ。○柘のさ枝の　「柘」は山桑であると云はれてゐる。俗に「やまぐは」と呼ぶ樹には二種ある。其の一は夏白い四瓣の花（實は總苞）の咲く「やまばうし」の一名であり、他の一は眞桑に對して山桑と云ふ桑科植物の一種である。上村六郎氏は此の二種の「やまぐは」による染色試驗、及び支那に於ける柘染の研究の結果、我が國に於ける上古の「柘」は「やまばうし」ではなくして、桑の一種の山桑を指したのであると云はれた。（『奈良文化』第二十四號所載「柘の木考」參照）「さ枝」の「さ」は接頭語。○梁は打たずて　「梁」は和名抄に「毛詩注云、梁（音良、和名夜奈）魚梁也（中略）取レ魚笱也」とある。卽ち梁は河瀨に杭を打ち並べて水を堰き止め、其の一部分を開いて水の集まり落ちるのを、竹を編んで造つた梁簀で受けて、其の上に流れ懸つた魚を捕る裝置のものである。杭を打つて梁を構へるから「梁打つ」と云ふのである。梁は架けてないのでの意。○取らずかもあらむ　「か」は疑問の係助詞。取らずに置く事であらうか。

【譯】若しも今宵、（かの傳說にあるやうな）柘の枝が流れて來たならば、梁は架けてないから、取らずに流してしまふことであらう。

三八七　古に　梁打つ人の　無かりせば　此間もあらまし　柘の枝はも
古爾　梁打人乃　無有世伐　此間毛有益　柘之枝羽裳

右一首若宮年魚麻呂作

【釋】○梁打つ人の　味稻を指す。○此間もあらまし　原文の「此間毛」を代匠記にコノマモ、考にコノゴロモ、略解に引く宣長の說にココニモ、拾解にイマモと訓んでゐるが、今は流布本の訓のココモに從つて置く。○若宮年魚麻呂　傳未詳。

【譯】昔梁を架けた味稻といふ人が無かつたとすれば、味稻に拾はれたあの柘の枝は、今でも此の邊にあるであらうに。

【評】上代人が古傳說に耳を傾けた心持は、後世と餘程異なつてゐた。右に講じた二首には、柘枝傳說に對して現實性を認め、而も一種の憧憬を感じてゐた事が窺はれる。

羇旅歌一首幷短歌

三八八　わたつみは　靈しきものか　淡路島　中に立て置きて　白浪を　伊與に回らし
海若者　靈寸物香　淡路島　中爾立置而　白浪乎　伊與爾回之

座待月　明石の門ゆは　夕されば　潮を滿たしめ　明けされば　潮を干しむ
座待月　開乃門從者　暮去者　鹽乎令滿　明去者　鹽乎令干

潮さゐの　浪を恐み　淡路島　磯隱りゐて　何時しかも　此の夜の明けむと
鹽左爲能　浪乎恐美　淡路島　磯隱居而　何時鴨　此夜乃將明跡

さもらふに　寢の寐かてねば　瀧の上の　淺野の雉　明けぬとし　立ち響むら
侍從爾　寢乃不勝宿者　瀧上乃　淺野之雉　開去歲　立動良

し　いざ兒ども　敢へて榜ぎ出でむ　にはも靜けし
之　率兒等　安倍而榜出牟　爾波母之頭氣師

【釋】○わたつみは　「わたつみ」は綿津見神卽ち海を掌る神であるが、此所は單に海を云ふ。（既出）○靈しきもの　「靈寸」を流布本にアヤシキ、槻落葉にクスシキと訓んでゐる。何れに從つてもよいが今はアヤシキと訓んでおく。〔三一九〕參照。終の「か」は「かも」と同じく感動を表す助詞。靈妙不可思議なものであるの意。○中に立て置きて　淡路島を海の中に立たせて置いて。○伊與に回らし　此の句を流布本にイヨニメクラシ、槻落葉にイヨニモトホシと訓んでゐる。「もとほす」も廻らす意であるが、今は流布本の訓に從つて置く。「伊與」は古事記に「伊豫之二名島」とあるのと同じく、四國の總名である。「筑紫」が一地方の名から轉じて九州の總名ともなるのと同樣である。○座待月　「明石」の枕詞。管見や冠辭考に「座待月」は陰曆十八日の夜の月であつて、其の月が明るいので「明石」に冠したのであると解いてゐる。又攷證には「座待月」を十八夜の月とするのは後の事であつて、こは寢ずに居明して月を待つ意であつて、夜を明すを「明石」に言ひ懸けたのであると云つてゐる。（因みに後世では十六夜の月を「いざよひ」、十七夜を「立待」、十八夜を「居待」、十九夜を「臥待」又は「寢待」と云ふ。）○明石の門ゆは　明石海峽からは。○潮を滿たしめ　流布本の訓にシホヲミテシメ、槻落葉にシホヲミタセとあるが、童蒙抄にシホヲミタシメと訓んだのがよい。○明けされば　流布本の訓にアササレハ　童蒙抄の訓にアケヌレバとあるが、假名書の例に「安氣左禮婆」（四二〇七）とあるから、槻落葉の訓アケサレバがよい。「されば」は「夕されば」「春されば」等のそれと同じ。卽ち「明け來れば」と同義で朝になるとの意。○潮を干しむ　此の句を流布本にシホヲホサシメ、考にシホヲヒサシメ、小琴にシホヲヒシム、拾解にシホヲヒサシムと訓んで居る。一體使役の助動詞としては、奈良朝時代には「しむ」のみを用ゐ、「さす」は平安朝時代に入つて現れたのであるから、ここは小琴にシホヲヒシムと訓んだのが正しい。さて小琴には「干しむ」は上の「靈しきものか」の「か」に對する結であると云つてゐるが、此の「か」は感動を表して文を終止してゐるのであるから、ここは係結ではない。以上は明石海峽から播磨灘へかけての海上の樣を歌つたもので、以下轉じて作者の身の上を敍してゐる。○潮さゐの　潮の滿ち來る時波の騷ぎ鳴るのを云ふ。（既出）○何時しかも　「し」は强意、「か」は疑問、「も」は感動を表す助詞。何時になつたらばの意。○さもらふに　此の句は流布本に「待從爾」とあるので、是に對し種々の異訓が現れてゐる。原の儘を代匠記にマツカラニ、考にマツママに、攷證にサモラフニと訓んでゐる。又小琴には「從」を「候」に改め

てマチマツニ又はサモラフニと訓み、略解槻落葉には「侍候」に改めてサモラフニと訓み、拾解には「待候」をマモラフニと訓んでゐる。思ふに集中に「伺候」「伺侍」「侍従」等と記してサモラフと訓んだ例があり、又此の歌の「待」は細井本等には「侍」とあるから、今は「侍従」をサモラフと訓むことにする。「さもらふ」は君側に侍る意から轉じて、待ち伺ふ意に用ゐられてゐる。「朝なぎに舳向け漕がむと佐毛良布と」（四三九八）の用例がある。○寢の寐かてねば　「寢乃不勝宿者」を流布本にイノネラレネハ、小琴にイノネカテネハ、新訓にイノネラエネバと訓んである。これはイノネカテネバと訓むのがよい。「かて」は堪ふ又は得の意の動詞「かつ」の連用形。（既出）「ねば」は〔一九九〕の「憶ひも未だ盡きねば」のそれと同じで、ずしての意。寢ることが出來ずしてゐるとの意。○瀧の上の　瀧のほとりの。次に説明する淺野村の地から溪間を十町程行くと、高さ七丈餘の瀧がある。これを今淺野の瀧又は紅葉の瀧と呼んでゐる。○淺野の雉　淺野は淡路國津名郡淺野村で、淡路島の西北岸に在る。（四三八頁地圖參看）「きぎし」は雉の鳴聲から出た稱呼で、「きし」は其の約まつたものである。○明けぬとし　「し」は強意の助詞。○立ち響むらし　「立動」を流布本にタチサワクと訓んでゐるが、考にタチトヨムと訓み改めたのがよい。飛び立つて鳴き騒いでゐるらしい。○いざ兒ども　「兒ども」は舟子どもを指す。○敢へて榜ぎ出でむ　思ひ切つて漕ぎ出さうの意。○には　「には」は海面を云ふ。（既出）

【譯】海といふものは如何にも靈妙なものである。あの淡路島を海の中に立てて置いて、白浪を四國の方まですつと廻らし、明石の海峽からは夕方になると潮を滿たし、又朝が來ると潮を干させる。其の潮時の鳴り騒ぐ浪が恐ろしいので、淡路島の磯邊に隱れてゐて、何時になつたら此の夜が明けるであらうと待ち伺つてゐるので、（心も落著かずして）眠ることも出來ないでゐると、やがて瀧のほとりの淺野の雉が鳴き出した。あれは夜が明けたと云つて立ち騒いでゐるのであらう。さあ舟子どもよ、思ひ切つて漕ぎ出さうではないか。幸ひ今朝は海上も穩かである。

【評】作者は四國から船出して、淡路島の西海岸に沿つて北航し、やがて明石海峽に差掛らうとして、荒浪を恐れて淺野村沿海の磯邊に船を繫ぎ、そこで一夜を明かしたのである。初の十二句には播磨灘を中心とする海洋の壯觀を簡潔に敍して、上代人の自然觀を率直に歌つてゐる。それ以下は作者の航海の樣を歌つたものであつて、當時に於ける渡海の困難な樣が想像せられる。而して終の三句は、一句毎に切れて力が籠つてゐるので、鏡のやうに風いだ海上を見渡して勇み立つてゐる光景が、格調の上に躍動してゐる。

反歌

三八九　島傳ひ　敏馬の埼を　漕ぎ廻めば　大和戀しく　鶴さはに鳴く
島傳　敏馬乃埼乎　許藝廻者　日本戀　久　鶴左波鶴鳴

右歌若宮年魚麻呂誦レ之。但未レ審二作者一。

【釋】○島傳ひ　考の説に、淡路から敏馬の埼へ行く間には島は無いから、ここは淡路島を傳つて敏馬の方へ漕ぎ行くのを云ふとある。○敏馬の埼　「敏馬」は前出。〔二五〇〕參照。○漕ぎ廻めば　漕ぎ廻つて行くと。○大和戀しく　流布本の訓にヤマトコヒシクとあるが、古義にはヤマトコホシクと訓んでゐる。何れでも差支ない。大和の戀しさをそそるやうにの意。

【譯】島傳ひをして敏馬の埼を漕いで廻ると、大和の戀しさをそそるやうに、鶴が澤山に鳴いて通ることだ。

【評】愈明石海峽を通過して、敏馬の浦傳ひをしながら、遲々たる船足をもどかしく感じてゐる折しも、群をなして大和の方へ鳴き渡る鶴の聲を聞いて、慕郷の念が益募つた時の作である。

## 譬喩歌

### 金明軍歌一首

三九四　標結ひて　我が定めてし　住吉の　濱の小松は　後も吾が松
印結而　我定義之　住吉乃　濱乃小松者　後毛吾松

【釋】○譬喩歌　「譬喩歌」は「相聞」「挽歌」「雜歌」の如く、歌の素材若しくは内容による分類とは異なつてゐる。卽ち卷十一卷十二に見える「正述心緒歌」「寄物陳思歌」などの名目と同樣に、一首の表現態度の上から分類した部目である。寄物陳思歌が多くは序詞を用ゐ又は譬喩を以て、作者の感情を表現した作であるのに對して、此の譬喩歌は主觀を直接には殆ど歌詞の上に表現せずして、一首全體を隱喩又は諷喩を以て歌ひ、主觀を間接的に表現したものである。尤も集中の譬喩歌は其の素材内容から見れば、全部相聞の部類に入るべきものである。「譬喩歌」なる名目は、詩の六義卽ち風・賦・比・興・雅・頌の比に擬したものであると云はれてゐる。

○金明軍　大伴旅人が薨じた時の挽歌〔四五四〕以下五首の左註に、「右五首資人金明軍不レ勝二犬馬之慕心一、申二感緒一作歌」とあるのによつて、此の人は旅人に仕へた人である事が知られる。三韓から歸化した人が、又は其の子孫であらう。○標結ひて　「標」は領有する意の「占む」の轉成した名詞で標繩をいふ。上代では何物も越える事の出來ない呪禁の繩として、一定の地域を限つて我が物とする時に、之を其の周圍に張り廻らしたのである。今日神社に張つてある標繩や、正月に軒毎に吊る注連飾は、上代の家の周圍に廻らした標繩の遺風である。○我が定めてし　流布本の訓にワカサタメコシとあるが、小琴にワガサダメテシと訓んで以來是が定訓となつてゐる。而して小琴には、集中に「義之」と記したのは皆「義之」の誤であつて、「義之」は支那の著名な書家王羲之が手師である所から、之をテシに當てた戲書であると云つてゐる。○濱の小松は　作者の愛する女を譬へてゐる。

【譯】標繩を張つて私が自分のものと定めて置いた住吉の濱の姫小松は、行末いつまでも自分のものである。

### 笠女郎贈二大伴宿禰家持一歌一首（○原三首の中）

三九六　陸奥の　眞野の草原　遠けども　面影にして　見ゆとふものを
陸奥之　眞野乃草原　雖遠　面影爲而　所見云物乎

【釋】○笠女郎　傳未詳。前に說明した笠麻呂（後出家して沙彌滿誓と云つた）の女か、或は笠金村の女であらうと思はれるが確證は無い。笠女郎は集中有數の女流歌人であつて、大伴家持に對して熱烈な思慕の情を詠み贈つた短歌のみを二十九首遺してゐる。○大伴宿禰家持　傳は〔四六二〕を講ずる際に述べる。○眞野の草原　「眞野」は和名抄に「陸奥國行方郡眞野」とある所で、今の磐城國相馬郡眞野村・上眞野村・鹿島村（福島縣原町の北方）一帶に當る。次に「かや」は神代紀に「草野」をカヤヌ、顯宗天皇紀に「草葉」をカヤと訓んで居り、古事記の訓註に「訓二葺草一云二加夜一」とあるのを見て明かであるやうに、古くは茅・菅・薄・章・荻等の如き屋根を葺くのに用ゐる草を「かや」

と總稱した。後世萱が葦草として一般に用ゐられるに至つたので、萱が其の名を獨占したのである。ここの「草原」は薄や萱などの生ひ茂つた荒野を云ふ。○遠けども　「雖遠」を流布本にトホケレト、考にトホカレドと訓んでゐるが、代匠記精撰本にトホケドモと訓んだのがよい。「遠け」は「遠し」の已然形に當る古い活用形である。さて小琴には、初の二句を「遠し」に懸る序としてゐるが、序と見ない方がよい。○面影にして　面影にの意。○見ゆとふものを　「とふ」は輕く添へたのであつて、見えることであるのにの意。

【譯】陸奥國の眞野の草原は隨分遠くでありますが、なほ其の景色は眼前にあり〳〵と浮んで見えて來るものでありますのに。（どうしてこんな近くに居られる貴方にお逢ひ出來ないのでせう。）

【評】此の歌の解釋には異說がある。卽ち初の二句を「遠し」の序詞とする時は、一首の意味は貴方は遠くに居られますが、お姿が面影に立つて見えますものをと云ふ意味になる。併し右に解いたやうに全體を譬喩と見て、疎々しくなつた家持に對する作者の怨の情を、婉曲に詠んだものと見るべきであらう。

四〇四　ちはやぶる　神の社し　無かりせば　春日の野邊に　粟蒔かましを
千磐破　神之社四　無有　世伐　春日之野邊　粟種　益　乎

娘子報二佐伯宿禰赤麻呂贈歌一一首

【釋】○佐伯宿禰赤麻呂　傳未詳。此の歌の前には、赤麻呂が娘子に贈つた歌があつたのが漏れたのであらう、と槻落葉に云つてゐる。○ちはやぶる　「神」の枕詞。〔一九九〕參照。○神の社し　「し」は强く指示する助詞。「神の社」は此の歌では春日神社を指す。○粟蒔かましを　仙覺抄に「粟」に「逢ふ」を懸けたのであつて、此の句は逢はましをの意を粟に託して敍べたのであると云ひ、諸註是に從つてゐる。

【譯】若し神の社が無かつたなら、私は春日野に粟を蒔きたかつたものを、今はどうにも致し方ありません。（貴方にしかと約束なさつたお方がなかつたならば、お逢ひ申して私の心中を申し上げようと思つてゐましたのに。）

## 挽歌

大津皇子被レ死之時磐余池般流レ涕御作歌一首

四一六　百傳ふ　磐余の池に　鳴く鴨を　今日のみ見てや　雲隱りなむ
百傳　磐余　池爾　鳴　鴨乎　今日　耳　見　哉　雲隱　去牟

右藤原宮朱鳥元年冬十月

【釋】○大津皇子　御傳は前に略述した。〔一〇五〕參照。なほ日本書紀持統天皇の朱鳥元年の條に、「冬十月戊辰朔己巳、皇子大津謀反發覺、逮二捕皇子大津一云々。庚午、賜二死皇子大津於譯語田舍一、時年廿四云々」とある。○被レ死之時　童蒙抄にコロサレタマフトキ、考にツミナハレタマフトキと訓んで置く。○磐余池般　「磐余」（「石村」とも記す）は大和國高市郡及び磯城郡南部一帶の地の古名である。此の池の事は日本書紀履仲天皇の條に、「二年十一月作二磐余池一」「三年冬十一月丙寅朔辛未、天皇泛二兩枝船于磐余市磯池一、與二皇妃一各分乘而遊宴。」と見えてゐる。卽ち磐余池は市磯池とも云つたのである。『大和志』の十市郡の條に「市磯池在二池內村一而石寸拔上山亦隣二于此一」とあつて、今の磯城郡安倍村大字池之內（香久山の東方十町）が

其の池の址であると云ふ。なほ香久山村に大字池尻の地名も存してゐるから、此の池は香久山の東北の麓に在つたのであらう。よつて「磐余池」は埴安池の一名であるとも云ふ。次に「般」は目錄に「陂」とあるので、其の誤と見る説もあるが、代匠記に據れば『史記』の註に『漢書音義』を引いて「般水涯堆地」とある由であるから、必ずしも誤字と見る必要はない。

○百傳ふ　管見・代匠記・冠辭考等に――五十・六十・七十・八十・九十と順次に百に數へ傳へる意で、「五十」又は「八十」に懸ける枕詞であつて、ここは「磐余」の「い」に續けたのである――と解いてゐる。古事記傳に、「磐余」の枕詞としては書紀及び本集に總て「角障經」を用ゐてあつて、「百傳」を用ゐた例は他に無いから、是も其の誤であらうと云つてゐるのは從ひ難い。○雲隱りなむ　死んだ者の靈は天に上るものであるとする上代人の思想から、死ぬることを「雲隱る」と云つた。死んでしまふであらうの意。

【譯】磐余の池に樂しく鳴いて遊んでゐる鴨を見るのも今日限りで、いよ〳〵死んでしまふことか。

【評】これと同じ時の大津皇子の辭世の詩が懷風藻に載せてある。即ち「金烏臨二西舍一、鼓聲催二短命一、泉路無二賓主一、此夕離レ家向」とある。未だ若年にして死に就かれた皇子の、極まりなき悲嘆の情が、此等の御作の上にしみじみと詠まれてゐる。

河内王葬二豐前國鏡山一之時手持女王作歌二首（○原三首の中）

四一八　豐國の　鏡の山の　石戸立て　隱りにけらし　待てど來まさぬ
豐國乃　鏡山之　石戸立　隱爾計良思　雖待不來座

【釋】○河内王　日本書紀天武天皇の朱鳥元年正月の條に「是月爲レ饗二新羅金智祥一、遣二淨廣肆川内王（○以下四人略）等于筑紫一」とあり、持統天皇の三年閏八月の條に「丁丑以二淨廣肆河内王一爲二筑紫太宰帥一云々」と見え、聖武天皇の神龜五年の條に「秋七月癸丑、從四位下河内王卒」とある人である。筑紫國で卒したものと思はれる。○豐前國鏡山　鏡山は豐前國田川郡香春町の東北（小倉市の南方約五里）に在る。高さ二十間周圍二百餘間の、全山鬱蒼たる樹木を以て蔽はれた丘である。なほ仙覺抄所引の『豐前國風土記』逸文に、「田河郡鏡山（在郡東一）昔者氣長足姫尊在二此山一、遙覽二國形一、勅祈曰、天神地祇爲レ我助レ福。便用二御鏡一安二置此處一。其鏡卽化爲レ石、見在二此山中一、因名曰二鏡山一焉。」といふ傳説がある。今鏡山には息長足姫尊（卽ち神功皇后）と御鏡とを祀れる鏡山神社がある。河内王の御墓は鏡山の西に在る前方後圓の古墳がそれであると云ふ。（『福岡縣鄕土史誌』參照）○手持女王　傳未詳。其の歌によつて河内王と親しい間柄の女性であつた事が判る。

○石戸立て　岩の戸を閉ぢて。「石戸」は古墳の石槨の入口卽ち羨門を塞いだ石を指す。（石槨の入口を羨門と云ひ、そこから奥の玄室に至るまでの通路を羨道と云ひ、奥の石棺を藏める廣い室を玄室と云ふ。）○隱りにけらし　原文の「隱爾」を流布本にカクレニ、略解にカクリニ、槻落葉にコモリニと訓んでゐる。カクリニ・コモリニの何れにも訓み得るが、今はカクリニと訓んで置く。隱れてしまつたものと思はれるの意。○待てど來まさぬ　流布本の訓にキマサスとあるが、今は童蒙抄にキマサヌと訓んだのに從ふ。「來まさぬ」と連體形で結ぶ時は、來まさぬことよの意となつて、詠歎の氣持が表れる。

【譯】我が葬ひ奉る君は、豐前國の鏡山の岩戸を閉ぢて、其の中にお隱れになつてしまつたものと思はれる。いく

らお待ち申しても、おいでにならないことである。

【評】鏡山の近くに石槨を築き、石棺に斂めて葬つたのを、王自らが岩戸を閉てて籠られたやうに歌つたのは、上代人の死に對する觀念が今日とは異なつてゐる所以である。即ち人は死によつて現實界から懸絶した他の世界へ去つて、なほ存在してゐるやうに考へてゐた。從つて「待てど來まさぬ」の一句は幼稚な詞といふよりも、寧ろ上代人の死の觀念に立脚した切實な嘆きの聲なのである。

四一九　石戸破る　手力もがも　手弱き　女にしあれば　術の知らなく
石戸破　手力毛欲得　手弱寸　女　有　者　爲便乃不　知苦

【釋】○手力もがも　「手力」は腕力の意。古事記の天石屋戸の段に現れる天手力男神の「手力」も是と同じである。「もが」の「が」は願望を表す助詞。○手弱き　「手弱寸」を流布本にテヲヨハキ、代匠記にタヨハキ、古義にタワヤキと訓んでゐる。古義の訓は「手弱女」の例に倣つたものであるが、「たわやし」といふ形容詞の獨立した用例は見當らないから、ここはタヨワキと訓んで、力の弱い意に解くべきであらう。○女にしあれば　「女有者」を流布本にヲトメニシアレハ、考にヲミナニシアレバと訓んでゐるが、小琴には、古事記の歌謡の「吾はもよ賣邇斯阿禮婆」の例に倣つて、メニシアレバと訓み改めてゐる。第三句が四音であるから、考の訓に從つて此の句を八音に訓む方がよいやうである。○術の知らなく　すべき方法も判らないことであるの意。

【譯】王のお隱れになつてゐる鏡山の岩戸を、打ち破る程の力が欲しい。けれども自分はか弱い女の身であるから、如何ともする方法が無いのが悲しい。

【評】「石戸破る手力もがも」の二句は、内容と云ひ格調と云ひ共に甚だ雄渾であつて、か弱き女性の詞とは思はれぬ程の力强さと熱情が漲つてゐる。此の雄勁なる二句を承けた下の三句には、遣る瀬ない悶々の情が溜息をつくやうに表れてゐる。萬葉調の勝れた一面を代表するに足る作品である。

過二勝鹿眞間娘子墓一時山部宿禰赤人作歌一首幷短歌

四二一　古昔に　ありけむ人の　倭文機の　帶解きかへて　伏屋立て　妻問しけむ　葛
古昔　有　家武人之　倭文幡乃　帶解　替　而　廬屋立　妻問爲家武　勝

飾の　眞間の手兒名が　奥津城を　此處とは聞けど　眞木の葉や　茂りたるら
壯鹿乃　眞間之手兒名之　奥　槨　乎　此間登波聞　杼　眞木　葉哉　茂有　良

む　松が根や　遠く久しき　言のみも　名のみも吾は　忘らえなくに
武　松之根也　遠　久　寸　言耳　毛　名耳　母吾者　不　所　忘

【釋】○勝鹿眞間娘子墓　「勝鹿」は和名抄に「下總國葛飾郡（加止志加）」とある。今の千葉縣東葛飾郡・埼玉縣北葛飾郡・東京市葛飾區一帶に當る。「眞間」は千葉縣東葛飾郡市川町大字眞間（京成電車市川眞間驛の東方）の地であつて、江戸川に注ぐ眞間川の北岸に在る。「眞間娘子」は此の歌に歌はれてゐる傳說中の美貌の女性、即ち手兒名である。「墓」を童蒙抄にハカ、考にオクツキと訓んでゐる。娘子の墓は眞間川の岸に在ると傳へられてゐる。今眞間に手兒奈堂があるが、後世のものである。手兒名傳說を歌つた作としては、他に卷九（一八〇七）に高橋蟲麻呂の長歌（後

に講ず)、及び卷十四に二首(三三八四・三三八五)の短歌がある。

○古昔にありけむ人の　昔居つたといふ或人がの意。これを眞間の娘子を指すとする說もあるが、考に娘子に言ひ寄つた男を云ふとしてゐるのに從ふべきである。○倭文機の　「文」は流布本に「父」とあるが、神田本等に據つて改めた。原文の「倭文幡」は、書紀の歌謠に「御帶の之都波柁」とあるのに倣つてシヅハタと訓む。「倭文」は日本書紀の訓註に「倭文神、此云二斯圖梨俄未一」とあり、又「倭文連(倭文、此云二之頭於利一)」ともあるのに據つて知られる通り、元來は「しづおり」と云つたのを約めて「しどり」と言ひ、又略して「しづ」とも云つたのである。「倭文」の字義は外國產の織物に對する倭の文の意である。「倭文織」は栲・麻・亭等の織物に、横線或は縱線又は縱横の市松模樣の縞を織り出した布を云ふ。倭文機は古くは主として帶地として尊重せられたのであるが、集中に「古の倭文旗帶を結び垂れ」(二六二八)とも歌はれてゐるから、舶來の織物が輸入せられて後は廢れたのであらう。○帶解きかへて　此の句の解釋には二三の說がある。童蒙抄には帶を解き交はして臥すの義で、次の「伏屋」の序詞であると云つて居るが、考に男女帶を解き交はして寢るのを云ふと解いて以來、此の說が一般に行はれてゐる。併し攷證にも指摘してゐる通り、卷九の手兒名傳說を歌つた作に據ると、娘子は誰にも靡かずして死んだのであるから、考の解釋は此の場合穩當でない。思ふに集中には、「かへて」を互にさし交はす意に屢用ゐてゐるが、又「その緒は替而吾が玉にせむ」(一三二六)の如く、別の物に取替へる意にも用ゐてゐる。從つてここも男が身邊を飾り立てようとして、古い帶を解き捨てて、美しい倭文織の帶を新たに締め替へてと云ふ意味に解すべきであらう。○伏屋立て　考にフセヤタツと訓んで「つま」の枕詞としたのは妥當でない。「伏屋」は「布勢伊保」(伏廬)と同じく、地に伏したやうに見える棟の低い陋屋を云ふ。上代では貴賤の別なく、妻を迎へる時に新たに家を建てた事は既に述べた。(後世俗に新婦を「新造」と云ふのは、『日次記事』に「俗謂二新婦一曰二新造一、言新造レ宅使レ居之義也」とある通り、此の古い習俗が言語上に遺つてゐるのである。)○妻問しけむ　「妻問ふ」に結婚を申込む意と、男女相逢ふ意の兩義がある。「益荒壯士の相競ひ妻問しけむ」(一八〇一)の場合は求婚する意で、「紐解き交し天人の妻問ふ夕ぞ」(二〇九〇)の場合は相逢ふ意である。ここは結婚を申出たであらう所のといふ意。○眞間の手兒名が　「手兒名」(「手兒奈」とも記す)は眞間の娘子の名であつて、其の名義に就いては諸說がある。(イ)管見には「てこ」は女の稱であると云ひ、(ロ)『萬葉考』及び『諸國方言物類稱呼』等には、上總・下總・武藏地方の方言に末子を「てご」と言ふから、「手兒名」は「てごの女」即ち末女兒の義であらうと云ひ、(ハ)小琴には妙兒又は貴兒の義の稱詞であらうと解き、(ニ)中山太郎氏は蝶子又はお蝶の義であらうと云はれ、(『物類稱呼』及び『倭訓栞』に、津輕地方で蝶を「てこな」と云ふとある)(ホ)武田祐吉博士は「手」は活動勞作を意味し、「兒」は婦人・小兒を意味する語で、「な」は接尾語と見て、勞作に從ふ少婦の義と解いて居られる。(『國文學研究萬葉集篇』一九〇―二頁)併し右の諸說よりも、次に述べる若沖の『萬葉集集類林』及び久老の『萬葉考槻落葉』の說の方が妥當なやうに思はれる。即ち「手兒」は東歌に「人皆の言は絕ゆとも埴科の石井の手兒が言な絕えそね」(三三九八)「劍大刀身に添ふ妹をとり見かね音をぞ泣きつる手兒にあらなくに」(三四八五)等の「手兒」と同じで、父母の手にある處女の義で、「な」は同じく東歌の「兒な」(三四八六)「妹なろ」(三四四六「背なな」(三五四四)等の「な」と同じく、親しみを添へる語と解くのである。思ふに「手兒」は、『萬葉集類林』に「今も東國には小女を美稱してて、こと云ふと也」とあるから、處女又は小兒の意の普通名詞であつ

て、「な」は東歌に特に用例の多い接尾語で、中央語の「ら」に相當する親しみの意を添へる語である。即ち「手兒名」は上古の中央語の「處女ら」と同義を表す東國方言の普通名詞であつたのが、娘子の名に用ゐられて固有名詞となつたのであらう。○奥津城を　「おくつき」は古事記傳の説に、「奥津城」の義で、「城」は圍をした一定の場所を云ふとある。なほ「つ」は「の」の意の助詞である。「奥槨」又は「奥墓」とも記してある通り、棺を藏める墓槨を云ふ。○眞木の葉や　「眞木」は既述の通り檜や杉等の類を指す。「葉」は「眞木」に因んで輕く添へた語である。「や」は疑問を表す係助詞。○茂りたるらむ　流布本の訓にシケクアルラムとあるが、童蒙抄にシゲリタルラムと訓んだのがよい。此の二句は眞木の葉が生ひ茂つてゐる爲であらうかの意で、此の下には墓所が何處とも定かに判らないといふ意味を補つて見るべき所である。○松が根や遠く久しき　此の二句の解釋には諸説がある。代匠記には、墓の上に枝を垂れた松の根が末遠く延びてゐるやうに、娘子の時代は遠く久しい以前の事であるから、墓が見えないのかの意に解いてゐる。(考槻落葉等も代匠記と略同説)略解に引く宣長の説では、原文の「也」を「之」の誤字と見て、「松が根の」を「遠く久しき」の枕詞として居る。然し此等は何れも穩かでない。思ふに此の二句は前の「眞木の葉や茂りたるらむ」と對句であつて、「松が根」の「根」は「眞木の葉」の「葉」と同樣に、輕い意味で添へてある。從つて此處では、松の木が永い時代を經て老いてゐる事を敍べて、娘子の時代が遠い過去である事を表し、且墓所の明かでない事を示したものと解すべきである。○言のみも名のみも　「こと」は言・事何れにも用ゐる。此の場合を事卽ち出來事の意に見る説もあるが、言卽ち物語傳説の意に見るのがよい。「名」は名聲評判の意。次に「のみも」は〔一九六〕に解いた通り、客語の下に添うて「のみをも」の意を表す。娘子の物語だけは、又手兒名の名だけは忘れる事が出來ないといふ意。○忘らえなくに　「不所忘」を流布本にワスラレナクニ、槻落葉にワスラエズと訓んでゐるが、童蒙抄の訓にワスラエナクニとあるのがよい。(新解には、神田本等に「不可忘」とあるのを採用して、ワスラユマシジと訓んである。)忘れられぬことよの意。「忘る」は古く四段に活用したのであつて、「忘ら」は未然形である。「え」は可能或は自然的可能を表す助動詞の「ゆ」の連用形で、後の「れ」に當る。「忘らえ」の假名書の例には「和周良延(ワスラエ)にけり」(八八〇)「和須良延(ワスラエ)ぬかも」(四四〇六)等がある。「なく」は否定の助動詞の未然形の「な」に、語尾の「く」を添へたものである。(既出)

【譯】昔居つたと云ふ或男が、美しい倭文織の帶を新たに締め替へて、(妻を迎へる爲に)小屋を新たに建てて言ひ寄つた、葛飾の眞間の手兒名の墓所は、此處だとは聞くが、眞木が生ひ茂つてゐる爲であらうか、或は松が物古りてゐるやうに、久しい時代を經たからであらうか、今は定かにそれとも判らない。併し私はゆかしい手兒名の物語だけは、又娘子の名だけは、到底忘れられないのである。

【評】手兒名の傳説は、前に講じた三山の妻爭や、後に講ずる葦屋の菟原處女〔一八〇九〕や、卷十六の櫻兒〔三七八六・三七八七〕縵兒〔三七八八―九〇〕などの傳説と共に、妻爭説話に屬してゐる。此等の妻爭説話の筋は、何れも二人又は三人の男性が、一人の女性を中心に戀を爭ふのであるが、三山妻爭を除く外は、女性が何れの男性にも靡き得ずして、遂に自ら生命を絶つといふ悲劇に終つてゐる。さて手兒名傳説は、眞間に古くから傳はつてゐた有名な地方傳説であつたらしく、此の地に下つた高橋蟲麻呂も亦長歌〔一八〇七〕を遺してゐる。尤も赤人が傳説の内容には觸れずして、遺蹟の現狀と自己の回顧の情とを歌つてゐるのに對して、蟲麻呂は説話の筋に重きを

置き、而も手兒名の服裝や容貌などを鮮明に歌つてゐる。從つて同一題材を取扱つた此の二首の長歌は、敍景歌人赤人と、敍事歌人蟲麻呂の特徴を見る上に、極めて適當な資料である。なほ右に講じた長歌の「奥津城を此處とは聞けど」以下の數句は、代匠記以下の諸註に指摘してゐるやうに、人麻呂が近江の大津宮の遺跡に立つて詠んだ長歌(二九)の「大宮は此處と聞けども云々」の句と極めて類似して居り、又「言のみも名のみも云々」は、同じく人麻呂が明日香皇女の殯宮の時に詠んだ(一九六)の「音のみも名のみも絶えず云々」の句とよく似てゐるのであつて、赤人が人麻呂の作品から影響を受けて居る事を知るべき一資料である。

反歌

四三二　吾も見つ　人にも告げむ　葛飾の　眞間の手兒名が　奥津城處
吾毛見都　人爾毛將告　勝壯鹿之　眞間能手兒名之　奥津城處

【釋】○葛飾の　流布本に「勝壯鹿」とあるが、「壯」は細井本には「牡」とある。○奥津城處　墓の在る所。

【譯】名高い葛飾の眞間の手兒名の墓場の樣を自分も見ることが出來た。此の有樣をまだ見知らぬ人にも話して聞かせよう。

四三三　葛飾の　眞間の入江に　うち靡く　玉藻苅りけむ　手兒名し思ほゆ
勝壯鹿乃　眞眞乃入江爾　打靡　玉藻苅　兼　手兒名志　所念

【釋】○眞間の入江に　「入江」は江戸川が入江を成してゐたものか、或は往時東京灣が此の邊まで灣入してゐたのであらう。○うち靡く玉藻苅りけむ　此の二句の解釋に兩說がある。卽ち代匠記精撰本の一說には、「打靡」をウチナビキと訓んで、娘子が入江に投身したのを、藻を苅りに行つたやうに言ひなしたものと解き、考・略解攷證は此の說に從つてゐる。他の一說は「打ち靡く」を藻の修飾語と見て言葉通りに解く說で、古義・新考等は此の說によつてゐる。これは入江に靡いてゐる美しい藻の樣を見て、それを苅り取つたであらう娘子の姿を偲んだのであるから、後說に從ふべきである。○手兒名し思ほゆ　流布本にテコナシソオモフ、童蒙抄にテコナシシノバルと訓んでゐるが、代匠記精撰本にテコナシオモホユと訓んだのがよい。「し」は强意の助詞、「思ほゆ」はここでは偲ばれるの意。

【譯】葛飾の眞間の入江に、水のまに〳〵靡いてゐる美しい藻を苅り取つたであらう古の手兒名の姿が偲ばれる。

神龜五年戊辰太宰帥大伴卿思戀故人歌二首（○原三首の中）

四三九　還るべく　時はなりけり　京師にて　誰が袂をか　吾が枕かむ
應還　時者成，來　京師爾而　誰　手本乎可　吾　將枕

【釋】○大伴卿思戀故人歌　「大伴卿」は大伴旅人、「故人」は其の亡妻を指す。旅人の妻大伴郎女は、旅人が筑紫に赴任する時に夫に隨つて彼の地に下つたが、其の後間もなく神龜五年の初夏の頃に病歿した。次に講ずる二首は、旅人が太宰帥の任期が滿ちて歸京の途に就くに當つて、亡妻を慕つて詠んだ作である。○還るべく時はたりけり　此の二句の訓は流布本にカヘルヘキトキニハナリヌ、代匠記精撰本にカヘルヘクトキハナリケリ、童蒙抄にカヘルヘキトキニハナリケリ、考にカヘルヘキトキニハナリクとある。其の他種々の訓あるが、今は代匠記の訓に從ふ。（原文の「成」は古葉略類聚鈔には無いから、之に據れば槻落葉にカヘルベキトキハキタリヌと訓んだの

がよい。)○吾が枕かむ　「吾將枕」を流布本にワカマクラセム、童蒙抄にワレハマクランと訓んでゐるが、考の一訓にワガマクラカムと訓んだのがよい。既述の通り、「枕く」は名詞の「枕」から轉成した動詞で、枕とする意である。斯様に名詞に活用語尾を添へて動詞とした例は、「頭く」(傾)「縵く」「頸る」(縱)「腹む」(孕)等幾らもある。

【譯】今や都へ還るべき時となつた。併し妻を喪つた自分は、都に歸つたとて誰の袂を枕としようぞ。

【評】大和を遠く離れた筑紫から、懷かしい家郷を指して歸るべき時期が近附いた。然し都に歸つても、手枕を交はして語らふべき妻が待つてゐるのではない。此の歌には、かうした喜びの中にも深い悲しみの情を宿した淋しさが歌はれてゐる。

四四〇　京師なる　荒れたる家に　獨り寢ば　旅にまさりて　苦しかるべし
在京師　荒有家爾　一宿者　益旅而　可辛苦

右二首臨二近向レ京之時一作歌

【釋】○荒れたる家に　筑紫に在任中に妻が卒去した爲無人となつた大和の家を指す。○獨り寢ば　妻が亡くなつたので獨り寢をしたならばの意。○右二首云々　題詞に「神龜五年云々」とあるが、此の左註にもある通り、右の二首は、旅人が天平二年十一月に大納言に任ぜられてから、翌月筑紫を出發するまでの間に詠んだものであるから、神龜五年よりは後の作である。

【譯】都に歸つて、荒れ果てた家にただ獨りで寢たならば、旅に在る時にも增して、更に辛い思ひをすることであらう。

【評】旅の憂き寢は苦しいものであつても、やがては樂しい我が家に歸ることが出來る。併し老軀を以て大和へ向ふ旅人の身には、歸りを待つ妻があるのでもなく、只無人の荒れ果てた家があるばかりである。さうした作者の心情を想像して見ると、平明な此の歌にも哀切涙を催するものがある。

天平二年庚午冬十二月太宰帥大伴卿向レ京上レ道之時作歌二首(○原五首の中)

四四六　吾妹子が　見し鞆の浦の　室の木は　常世にあれど　見し人ぞ無き
吾妹子之　見師鞆浦之　天木香樹者　常世有跡　見之人曾奈吉

右(一首)過二鞆浦一日作歌

【釋】○天平二年云々　旅人が筑紫を發して、瀬戸内海を東航して都へ上る時の旅中の作である。○鞆の浦の　備後國沼隈郡の今の鞆町である。廣島縣福山市の南方約三里、半島の南端にある港で、福山市から鞆輕便鐵道が通じてゐる。此處は往時の内海の要津であつて、外客の接待を行ふ海驛として榮えた所である。○室の木は　原文の「天木香樹」なる文字は(三八三〇)の題詞にもあつて、それには「室乃樹」とあり、又新撰字鏡に「梧」をムロノキと訓んであるから、ムロノキと訓むべき事は明かである。集中には「牟漏能木」と假名書にした例もある。「むろの木」に「天木香樹」なる文字を當てた理由に就いては、新村出博士の傾聽すべき考證がある。(『東亞語源誌』九二―一一五頁參照)和名抄及び新撰字鏡に「椶」(一名河柳)をムロノキと訓んであるので、此の歌の「むろのき」を椶柳であるとする說があるが、これは支那原產の觀賞植物で、而も近世

むろの木

になつて始めて渡來した樹であると云はれてゐるから、此の說は妥當でない。これは玉勝間に見える田中道麿の說に「ねず」(漢名杜松)であると云つたのが正しい。「ねず」は「ねずみさし」の略で、今も中國地方の方言に「むろ」「むろのき」「ひもろ」「もろまつ」「ねずもろうぎ」等と呼んでゐる。此の木は山地や海岸の砂地に自生する松杉科の常綠喬木で、葉は針狀で硬く、葉間に徑三分位の肉質球形の實を結ぶ。今も瀨戸內海の沿岸に多く自生し、鞆の浦の仙醉島には澤山見受ける木である。○常世にあれど　永久不變に存在してゐるけれどもの意。○見し人ぞ無き　「見し人」は自分の相見た人の義ではなく、上の「吾妹子が見し」に對して、其の室の木を見た人卽ち妻を指す。〔二一一〕參照。

鞆の浦全景

【譯】我が妻が嘗て眺めた鞆の浦の室の木は、何時までも變らずにあるけれども、それを眺めた妻は今や此の世の人ではない。

【評】筑紫へ下向の際に妻と共に眺めた室の木を、今又歸京の際に同じ場所で眺めるのは懷かしいが、それにつけても自然の常住不變なのに對して、妻が既に亡き人であるのが先づ悲しかつたのである。

四四九　妹と來し　敏馬の埼を　還るさに　獨りして見れば　涕ぐましも

與妹來之　敏馬能埼乎　還　左爾　獨　而見　者　涕具末之毛

右(一首)過二敏馬埼一日作歌

【釋】○敏馬の埼を　既出。○還るさに　「さ」は「行くさ」「來さ」などの「さ」と同じく、動詞の終止形又は形容詞の語幹に附いて名詞を造る接尾語である。歸りがけにの意。○獨りして見れば　原文の「而」が古葉略類聚鈔に「之」とあるので、槻落葉には此の句をヒトリシミレバと訓み、古義も之に從つて「し」を强意の助詞と見てゐる。集中には「獨りし寢れば」の用例もあるが、又「獨りして」の用例には「旅にし有れば獨爲而見る驗無み」(三六六)等があるから、今は流布本に從つてヒトリシテミレバと訓む。○涕ぐましも　「涕ぐまし」は「涕ぐむ」といふ動詞に對する形容詞で、涙を催すやうな狀態を云ふ。「ぐむ」は「角ぐむ」「水ぐむ」「芽ぐむ」などと用ゐて名詞を動詞に轉する接尾語である。「くむ」は「ふくむ」「くくむ」「こむ」「こもる」等の語根と同じで、物の兆す意を有つてゐる。

【譯】嘗て妻と二人で通つた敏馬の埼を、歸りがけに只獨りで眺めると、悲しくて涙が催して來ることである。

【評】是も往路と同じ風物に接して、今の悲しみを詠んだのではあるが、鞆での作よりも、更に切實な心情を率直に歌つて居る。

還二入故鄕家一卽作歌三首

四五一　人もなき　空しき家は　草枕　旅にまさりて　苦しかりけり

人毛奈吉　空　家者　草枕　旅爾益　而　辛苦　有　家里

【譯】人もゐない空しい家は、旅にある時にも增して一層苦しい思ひがする。

【評】前に講じた(四四〇)は、筑紫を出發するに當つて、豫め淋しい我が家を想像して歌つたのであるが、これはいよ〳〵妻もゐないひつそりとした我が家へ辿り著いた時の、現實の寂寥を歌つたものである。

四五二　妹として　二人作りし　吾が山齋は　木高く繁く　なりにけるかも
與妹爲而　二作之　吾山齋者　木高繁成　家留鴨

【釋】○妹として二人作りし　「妹と二人して作りし」と云ふべきを、音調の關係で位置を轉換したのである。○吾が山齋は　「山齋」を流布本にヤマ(童蒙抄・槻落葉同訓)、古葉略類聚鈔・神田本等にヤト(略解同訓)考にソノ、古義にシマ(註疏・新考等同訓)と訓んで居る。攷證にはヤドと訓んで、「やど」は「吾が屋戸に韓藍蒔き生し」(三八四)「吾が屋戸の草の上白く(七八五)の如く、家や庭をおしなべて云ふ語であると解き、又古義には「しま」は(一七八)(一八一)等に於ける「島」と同一語で、作り庭を云ふと解いてゐる。「山齋」は元來山中の居室の義である。然し集中には、卷二十の(四五一一)以下二首の題詞に「屬目山齋作歌三首」と記して何れも庭園を詠み、且その第一首に「鴛鴦の棲む君が此の之麻今日見れば」とあるから、「山齋」はシマと訓んで庭園の義と解くべきであらう。思ふに「しま」(島)は支那式の庭の池の中の築山を指し、轉じて庭園の義にも用ゐられたのであらう。(三一一頁參照)

○木高く繁く　家の主が筑紫に在任中に、立木が成長して鬱蒼と生ひ茂つたのを云ふ。

【譯】(妻の在りし日に)妻と二人して造つた我が家の庭園は、今は立木も伸びて枝葉が生ひ茂つたことである。

【評】妻と共に丹精して營んだ思出の多い庭を眺めると、樹木は見變る程に繁り榮えてゐるが、相並んで眺めるべき妻も今は亡く、一木一石悉く涙の種であつたのである。童蒙抄や攷證には、旅人が太宰府に在任中、草を刈取る人も庭の手入をする人も無かつたので、庭の立木が木高く繁つて荒れ果てたのを、歎息して詠んだのであると云つてゐる。然し吉田宜が天平二年七月に、太宰府なる旅人に贈つた歌に、「君が行日長くなりぬ奈良路なる山齋の木立も神さびにけり」(八六七)とあるのを參照して、今は右の如く解いたのである。

四五三　吾妹子が　植ゑし梅の樹　見る毎に　心咽せつつ　涕し流る
吾妹子之　殖之梅樹　毎見　情咽　都追　涕之流

【釋】○心咽せつつ　悲しさで胸が一杯に塞がる意。「咽す」は涙・埃・烟・香氣・飲食物などの爲に息が塞がるやうに感じられるのを云ひ、轉じて心が塞がる意を表す。○涕し流る　「し」は强意の助詞。

【譯】亡き我が妻が植ゑて置いた梅の木を見るたび毎に、胸に悲しみがこみ上げて來て、涙がはら〳〵と零れる。

【評】右に講じた旅人の作歌は、彼が筑紫を出發する頃から大和の我が家に歸り著いた時までに詠んだ歌、十一首の中の七首である。それらが時間的に排列されてゐるから、此の一連の和歌は、歸京の際の旅人の歌日記とも見ることが出來る。此等の歌を通觀すると、旅人は當時六十六七歲の老齡で氣力も衰へ、且愛妻を喪つた後の事であるから、終始見る物毎に妻の在りし日を想ひ出しては、現在の我が孤影を眺めて、悲嘆の涙に暮れてゐた事が判る。歌は何れも枯淡平明で、悲哀の情が率直に詠まれてゐる。斯くて旅人は歸京後數箇月にして、天平三年七月に薨じたのである。此の後には貢人金明軍が卿の薨去を傷んだ作五首、及び縣犬養宿禰人上の作一首が載せてある。今は其の中の一首を講ずる。

天平三年辛未秋七月大納言大伴卿薨之時歌一首（○原六首の中）

四五五　斯くのみに　ありけるものを　萩が花　咲きてありやと　問ひし君はも
如是耳　有家類物乎　芽子花　咲而有　哉跡　問之君波母

右（一首）資人金明軍不レ勝二犬馬之慕心一中二感緒一作歌。

【釋】○斯くのみに　「如是耳」を流布本にカクシノミと訓んでゐるが、類聚古集・古葉略類聚鈔等にカクノミニとあり、代匠記精撰本以下諸註はこれに従つてゐる。又新解にはカクノミシと訓んである。「かくしのみ」と訓むべき確證は無いが、「かくのみに」には「如是耳爾ありけるものを」（三八〇四）、又「かくのみし」には「如是耳志繼ひし渡れば」（一七六九）等の例がある。今はカクノミニと訓む。「のみ」は「ばかり」と同じくそれと限る意を表す。従つてここでは「斯く」の意を強める事になる。○ありけるものを　「を」は感動助詞。以上二句は、此のやうに主君はお亡くなりになつてしまつたのにと云ふ意。攷證に「かくばかりに萩の花は咲きてありけるものをといふ意也」と解いてゐるのは従ひ難い。○問ひし君はも　「はも」は感動詠歎を表す。〔一七一〕參照。お尋ねになつた君はあゝもう亡きお方であるといふ意、此の句は、橘比賣命が入水せられる時、日本武尊を思慕して歌ひ給うた「さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも」の結句と同じである。此の古歌を思ひ浮べて詠んだのではなからうか。○資人金明軍云々　「資」は流布本に「仕」とあるが諸本に従つて改めた。「資人」は朝廷から賜はる仕へ人で、旅人は養老五年に帶刀・資人四人を賜はつた事が續日本紀に見える。「犬馬之慕心」は犬や馬が主君を慕ふ如き思ひの義。「申」は原本に「中」とあるが、槻落葉に「申」の誤としたのに従つて改め、ノブと訓む。

【譯】此のやうにはかなくお亡くなりになつたのに、萩の花は咲いてゐるであらうかとお尋ねになつた君は、あゝおいたはしいことである。

【評】此の集の巻六に、天平三年に旅人が栗栖野の萩を墓つて詠んだ作「指進の栗栖の小野の萩が花散らむ時にし行きて手向けむ」（九七〇）があるから、旅人は病牀に在つて萩の花盛を想像しながら他界したのであらう。金明軍は萩を見るにつけても、其の花を見ずして薨じた主君に對して、哀傷の涙を禁じ得なかつたのである。

七年乙亥大伴坂上郎女悲二嘆尼理願死去一作歌一首幷短歌

四六〇　栲綱の　新羅の國ゆ　人言を　よしと聞かして　問ひ放くる　親族兄弟　無き
栲角乃　新羅　國從　人事乎　吉　跡所聞　而　問　放　流　親族兄弟　無

國に　渡り來まして　大君の　敷きます國に　うちひさす　京しみみに　里
國爾　渡　來座　而　大皇之　敷　座　國爾　內　日　指　京思美彌爾　里

家は　さはに在れども　いかさまに　思ひけめかも　つれもなき　佐保の山
家者　左波爾雖　在　何　方　爾　念　鶏目鴨　都禮毛奈吉　佐保乃山

邊に　泣く兒なす　慕ひ來まして　敷妙の　家をも造り　あらたまの　年の
邊爾　哭　兒成　慕　來座　而　布細乃　宅乎毛造　荒　玉　乃　年

緒長く　住まひつつ　坐ししものを　生ける者　死ぬとふことに　免れぬ
緒長久　住　乍　座　之物　乎　生　者　死　云事　爾　不　免

物にしあれば　憑めりし　人の盡草枕　旅なるほどに　佐保河を　朝川渡り
物爾之有　者　憑有　之　人乃盡　草枕　客有　間爾　佐保河乎　朝川渡

春日野を　背向に見つつ　足引の　山邊を指して　夕闇と　隱りましぬ
春日野乎　背向爾見　乍　足氷木乃　山邊乎指　而　晚闇跡　隱　益　去

れ　言はむすべ　せむすべ知らに　たもとほり　ただ獨りして　白妙の　衣
禮　將　言爲便　將爲須敝不知爾　徘　徊　直　獨　而　白細之　衣

手干さず　嘆きつつ　吾が泣く涙　有間山　雲居たな引き　雨に降りきや
袖不　干　嘆　乍　吾　泣　涙　有間山　雲居輕　引　雨爾零　寸八

【釋】○七年乙亥云々　左註に據れば尼理願は新羅から歸化して、長く大伴安麻呂（旅人とする説もあるが從ひ難い。）の佐保の邸に寄寓してゐたが、天平七年に病歿したのである。時に安麻呂は既に亡く、其の室石川命婦は有馬溫泉に湯治に赴いてゐた爲に、其の喪に會へなかつたので、留守居をしてゐた娘の坂上郎女が葬送を營んだ後、此の長歌を詠んで溫泉にゐる母の許に贈つたのである。

○栲綱の　「新羅」の枕詞。〔一一七〕の「栲繩の」參照。○人言をよしと聞かして　原文の「所聞而」を流布本にキカレテと訓んでゐるのは妥當でない。代匠記精撰本にはキカシテ、考にはキコシテと訓んでゐる。古事記の歌謠に「賢し女を有りと岐加志弖麗し女を有りと伎許志弖」とある通り、「きかす」「きこす」何れも用ゐたのである。「聞かし」の「し」は敬語の助動詞。さて二句の意は「よしと云ふ人言を聞かして」の義で、日本は結構な國であるといふ人の噂を聞いてといふのである。左註に「遠感二王德一云々」とあるのと同義である。新考に「よし」は「人言」の形容でなければならぬとして、「人の言をげにもと聞き給ひて」と解かれたのは穩當でない。○問ひ放くる　「問ひ放く」の「放く」は「見放く」「語り放く」等のそれと同じで、「思ひやる」「見やる」の「遣る」に相當する。從つて「問ひ放く」は問ひやるの意である。代匠記や槻落葉に、言問ひをして憂ひを放ち遣る意と解いたのは妥當でない。

○親族兄弟　「親族」は日本書紀に「不負於族、此云二宇我邏磨概茸一」とあり、又「親族」をウカラヤカラ、「同族」をウカラと訓んでゐるから、ウカラと訓むべきである。次に「兄弟」は、宣命に「父母兄弟爾及事得牟」「父母波良何良爾至鹿氏爾」などとあるのに據つて、ハラカラと訓むべきである。「うから」「はらから」の「から」は「家族」「輩」の「から」と同じである。○大君の　流布本に「太皇」をスメロキと訓んでゐる。又古義には「太」を「大」に改めてオホキミと訓んでゐる。今は神田本・西本願寺本其の他諸本に據つて、「太」を「大」に改め、「大皇」をオホキミと訓んで置く。○敷きます國に　御統治遊ばされてゐる國にはの意。○うちひさす　「宮」又は「都」に懸る枕詞。語義に就いては諸説がある。（イ）代匠記には宮殿の結構は宏大であるから、内に日のさす宮の義であるとし、（ロ）冠辭考には麗しき日のさす宮の義であるとし、（ハ）冠言辨には全日刺の義と解き、（ニ）『鏡の響』には全檜建宮の義であると云ひ、（ホ）古義の枕詞解には現しく日光のさし輝く宮の意であらうと云つてゐる。（イ）の説が比較的穩當であるが、要するに未だ確説は無い。○京しみみに　「しみみに」は既述の通り「しみに」を重ねた「しみしみに」の約まつた語であらう。「しみに」「しみらに」「しじに」「しげし」「しく」（頻）等は同系統の語である。「しみみに」は繁く或は充ち滿ち

ての意の副詞である。他にも「秋萩は枝も思美三荷花咲きにけり」（二一二四）等の用例がある。○里家は「里家」を攷證や古義に里と家の意と解いてゐるが、これは複合名詞で人里の家即ち人家の意である。○思ひけめかも「けめ」は過去を推量する助動詞「けむ」の已然形。「か」は疑問の助詞。思つたからであらうかの意。○つれもなき　緣もゆかりも無いの意。（一六七）參照。○佐保の山邊に　「佐保」は大和國添上郡佐保村（奈良市の西北方に續く地）である。（八〇八頁　地圖參看）佐保山は大字法蓮にある山で、聖武天皇並に光明皇后の御陵などがある。安麻呂の邸宅は佐保の地に在つたので、安麻呂を佐保大納言と呼ぶ。○泣く兒なす　泣く兒が母を慕ふやうにといふ意で「慕ひ來」に冠した枕詞。○敷妙の　「家」の枕詞。此の語は既述の通り、「枕」「袖」「衣」「床」等に冠する枕詞であるが、此所はそれから轉じて、常に寢る家の意で「家」に懸けたのであらうと云ふ。（冠辭考に據る）○あらたまの　「年」「月」などに冠する枕詞。これも語義に就いては諸說がある。二三を紹介するならば、（イ）管見には年月は移り行くものであるから、改まる年の意で言ひ懸けたのであると云つてゐるが、說明は充分でない。（ロ）御杖の『歌袋』には爲家の說として、荒玉卽ち掘り出した儘の玉は、砥にかけて磨ぐものであるから、トの音に懸けたのであるとする說を揭げてゐる。（ハ）古事記傳には新新間の約言で、年月は移り變るものであるから、「年」に懸けたのであると云つてゐる。（ニ）『古語大辭典』には「新物」の轉訛で、更新するものの義で懸けたのであると解いてある　假名書以外の例が殆ど總て「荒玉之」「璞之」などと記されてゐる事は、語義を考へる上に注意すべき點である。（ロ）の說が比較的穩當であるが猶研究を要する。○年の緒長く　「緒」は「玉の緒」「生の緒」「伴の緒」などの「緒」と同じで、長く連續するものを云ふ。「年の緒」は長い年月を云ふ。○住まひつつ　「住まひ」は「住む」に繼續の意を表す助動詞の「ふ」を添へた形である。○生ける者　流布本の訓にイケルヒト、古義の訓にウマルレバとあるが、童蒙抄にイケルモノと訓んだのがよい。（三四九）參照。○免れぬ　原文の「不免」を考の一訓及び槻落葉にノガロエヌと訓んでゐる。これは契沖が代匠記精撰本に於て、卷五の（八〇〇）に一本に據つて補つてゐる「遁路得奴兄弟親族云々」の句を例證とした訓である。此の數句は後に述べるやうに、後世の加筆と覺しく信じ難い點があるから、「のがろえぬ」といふ訓の根據とするのは危險である。今は姑く流布本の訓に從つてマヌカレヌと訓んで置く。○憑めりし人の盡　理願が平素賴つてゐた石川命婦以下、召使の者共までを含めて云ふ。○旅なるほどに　流布本にタヒニアルマニ、考にタビナルママニ、槻落葉にタビナルハシニと訓んでゐるが、略解にタビナルホドニと訓んだのに從ふべきである。命婦等が有馬溫泉に赴いてゐる間を云ふ。○佐保河を　以下八句は理願の葬送の事を歌つてある。佐保河は（七九）に出た。○朝川渡り　朝に川を渡りの意。○背向に見つつ　後方に見ての意。（三五八）參照。○夕闇と　「晩闇」を小琴にクラヤミと訓んでゐるが、今は流布本の訓に從つてユフヤミと訓む。「と」はのやうにの意を表す。夕闇は暗くて物が見えないから、「隱る」の修飾語としたのである。○隱りましぬれ　下に助詞「ば」を補つて解くべき所である。隱れてしまはれたから。○たもとほり　「た」は接頭語。「もとほり」は（一九九）に說いた通り廻る意であるが、轉じてここは徘徊する意を表す。○白妙の　「衣」の枕詞。（既出）○衣手干さず　袖は涙に濡れて乾く間もなくの意。○有馬山　攝津國有馬郡の有馬溫泉の在る山を指す。有馬溫泉は古くから著名であつて、夙に舒明天皇や孝德天皇が行幸になつた事が日本書紀に見えてゐる。此の句の下には「に」を補つて解くべきである。○雲居たな引き　「雲居」は空であるが、又單に雲を指す場合もある。其の

例には古事記の歌謠に「吾家の方よ久毛草立ち來も」がある。これは恰も田を「田居」と云ふのと同樣である。○雨に降りきや　「雨に」は「涙」を形容してゐる。「雨と」と云へば「降る」の修飾語になるが、「雨に」は雨のやうに降る意になる。ここは雨になつて降りましたかといふ意。

【譯】新羅の國から、此の國はよい國だと云ふ人の噂をお聞きになつて、親しく語り合ふ親戚や兄弟も無い他國に渡つて來られて、我が大君がお治めになつてゐる國には、都に充ち滿ちて人家は澤山にあるけれども、どのやうにお考へになつたものか、緣もゆかりも無い佐保の山邊の大伴の家を慕つて來られて、其處に家をも造り長年の間住まつて居られたのに、生きてゐる者は必ず死ぬるといふ世の理は遁れられないものであるから、賴みとしてゐた人々が皆旅に出てゐる間に、尼理願は佐保川を朝に渡つて、春日野を後に見ながら、山の邊を指して夕闇に隱れるやうに、姿を隱してしまはれたから、私は悲しさに何と言ひやうもなく、どうしてよいか術も知らないので、彼方此方をさ迷うて只一人で袖の乾く間もなく、愁歎して泣いてゐる私の此の涙が、母上の居られる有馬山には、雲がたなびいて雨になつて降りましたでせうか。

【評】此の挽歌は天平七年の作であるから、坂上郎女が旅人に隨つて歸京して後五年、即ち郎女の三十代頃の作である。さて尼理願は如何なる人とも知れないが、恐らくは布敎の爲に渡來して歸化した人であらう。豪族大伴家の敦い庇護を被り、大伴一族の人々に深く敬愛せられてゐた事は、此の歌に據つて窺ひ知られる。理願の閱歷を整然と敍し來つて後抒情に移り、作者の濃かな哀傷の情を歌つてゐる此の歌は、男子の長歌にも劣らぬ堂々たる作品である。殊に終の三句は、著想が奇拔で才氣煥發、作者の技倆を十分に發揮してゐる。

反歌

四六一　留め得ぬ命にしあれば敷妙の家ゆは出でて雲隱りにき
留不得壽爾之在者敷細乃家從者出而雲隱去寸

右新羅國尼、名曰理願也。遠感王德歸化聖朝。於時寄住大納言大將軍大伴卿家、既逕數紀焉。惟以天平七年乙亥、忽沈運病、既趣泉界。於是大家石川命婦依餌藥事往有間溫泉而、不會此喪。但郎女獨留葬送屍柩、既訖仍作此歌、贈入溫泉。

【釋】○敷妙の　「家」の枕詞。五七六頁參照。○家ゆは出でて　家から出ての意。○雲隱りにき　「にき」は過去完了の助動詞。「雲隱る」は死ぬること。(既出)○逕數紀　「逕」は「經」と通用の文字で經ること。「紀」は歲の意にも用ゐるが、又「一紀」は十二年を指す事もある。「數紀」は數十年の意。○沈運病　「運病」は運命に係る程の病の意であらう。○趣泉界　黃泉國に赴くこと、即ち死ぬる事を云ふ。○大家石川命婦　「大家」は女子の尊稱。「命婦」は職員令義解に「婦人帶五位以上曰內命婦也、五位以上妻曰外命婦也。」とある。石川命婦は內命婦である。○依餌藥事　病療養の爲に。

【譯】到底人の力では留めることの出來ない壽命であるから、遂に家を出て姿を隱しておしまひになつた。

十一年己卯夏六月大伴宿禰家持悲傷亡妾作歌一首

四六二　今よりは秋風寒く吹きなむを如何にか獨り長き夜を寢む
從今者秋風寒將吹鳥如何獨長夜乎將宿

【釋】○十一年　天平十一年である。○大伴宿禰家持　茲に家持の閲歴を略述して置く。大伴家持は安麻呂の孫で、旅人の晩年の子である。五三七頁系圖參看 生年は歿年から逆算して養老二年と推定せられる。幼少の頃父旅人に伴なはれて筑紫に下り、十三四の頃彼の地から歸京したが、旅人の薨後は佐保の里に在つて、叔母坂上郎女等の愛護を受けて成育した。斯くて天平十年頃から十六年頃まで内舍人に召された。其の後十七年に從五位下を授けられ、十八年三月宮内少輔となり、同年六月二十九歳で越中守に任ぜられて越中に赴き、五年の後天平勝寶三年に少納言に任ぜられて歸京し、同六年四月に兵部少輔となり、十一月に山陰道巡察使となり、天平寶字元年には兵部大輔に任ぜられ、同二年因幡守となつて任地に下つた。其の後は信部大輔薩摩守・太宰少貳・民部少輔左中辨兼中務大輔・式部員外大輔・相模守・左京大夫兼上總守・衛門督・伊勢守・參議兼右大辨・春宮大夫等を經て、延暦元年に陸奥按察使・鎮守將軍、同二年に中納言、三年に持節征東將軍などに歴任して、延暦四年八月二十八日中納言從三位で六十八歳で薨じた。此の間家持は聖武・孝謙・淳仁・稱徳・光仁・桓武天皇の六朝に歴事してゐる。當時藤原氏の權勢は日に日に隆昌となり、大伴氏は常に壓迫せられてゐたので、家持は大伴氏の家運挽回の爲に常に努めたのであるが、形勢如何ともする事は出來なかつた。家持は不幸にも死後二十餘日で、大伴繼人及び竹良等が中納言藤原種繼を射殺した時、家持が其の陰謀に關係があると讒言された爲に、名を除かれ其の子永主は配流となつたが、其の後無實の事が明かになつて、父子共に赦され本に復した。次に家持の私的生活に就いて述べるならば、茲に講ずる歌に見える通り、天平十一年には既に妻と死別してゐるが、其の前から嫡妻坂上大嬢との交渉が、其の母坂上郎女の許で始まつてゐた。美貌と社會的地位とを兼ね備へてゐた家持と歌を贈答した愛人は、此の外にも甚だ多いのであつて、笠女郎・山口女王・大神女郎（おほみわ）・紀女郎・中臣女郎・平群女郎（へぐり）・日置長枝娘子（ひをきのながえ）・粟田女娘子（あはため）・河内百枝娘子（かはちのもえ）・巫部麻蘇娘子（かんなべ）・阿部女郎等との贈答歌が集中に見えてゐる。さて家持は萬葉第四期（天平五年以後天平寶字三年まで）の歌壇を代表する歌人であるばかりでなく、萬葉集編纂の事業にも與つて大いに力のあつた人で、集中所載の歌數は諸歌人中最も多い。即ち本集の卷三・四・六・八・十・十六・十七・十八・十九・二十の諸卷を通じて、合計短歌四百三十餘首長歌四十七首旋頭歌一首を遺してゐる。作歌年月の明かなものの中最も古いのは天平五年の作で、爾後約二十七年間の作歌を經て、天平寶字三年に因幡國に在つて詠んだ歌が、年月の明かな歌の最後であつて、これが萬葉集中最も新しい歌となつてゐる。此等の長年月に亙る多數の歌を通觀すると、年齡・環境・時代の推移につれて、歌風に變遷のある事は勿論であるが、一言にして蔽へば彼の獨得の作風は優美纖細で、而も感傷的な傾向を帶びてゐる事である。これは爛熟期に到達した萬葉の歌風から、やがて平安文學への過渡期の特徴を示して居るのである。然し一面に於ては忠君愛國の國家的思想や、氏族に對する愛の至情を歌つてゐるのも特色である。又萬葉代表歌人たる人麻呂・赤人・憶良等の影響を受けた點も多く、殊に長歌には古歌の模倣は詞句の上にまでも著しく表れてゐる。ともかくも家持は種々の意味で、萬葉の歌を集大成した人として注意すべき作者である。

○吹きなむを　童蒙抄にはフクラムヲと訓んでゐる。「を」は感動助詞。吹くであらうにの意。妻が死んだのは夏六月であるから、やがて夜寒を覺える頃であつたのである。○如何にか獨り　流布本の訓にイカテカとあり、是に從つてゐる者も多いが、「いかで」といふ語の用例は集中に無いから、童蒙抄にイカニカと訓んだのが妥當である。「か」は疑問の助詞。如何にして自分獨りでの意。